

新しい家庭科

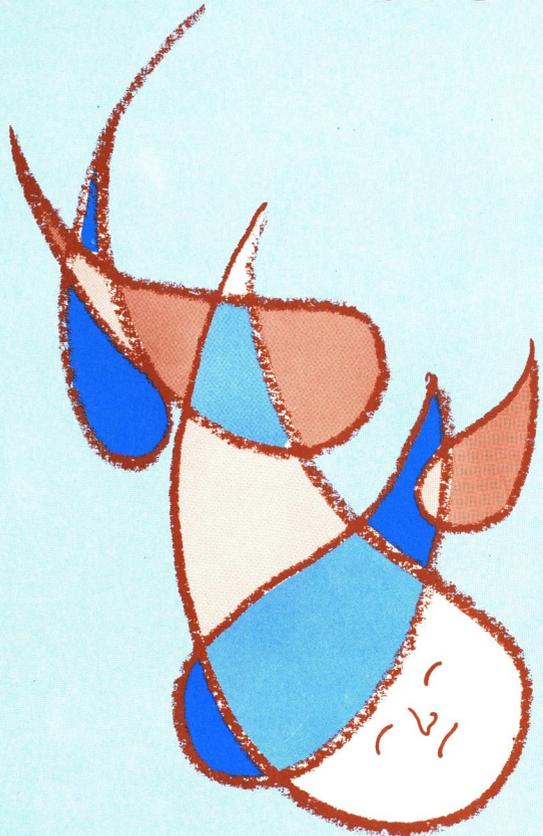
あそび

ウ

イ

2・3月号

くらしをいとおしむ



暮らしの論理

山本 松代

暮らしに論理などはない、あるいは暮らしというものはプライベートなもので他人がとやかく言う筋合のものではない、というのが大方の意見のようである。暮らしの問題は衣食住の問題と言っておれば、こうした妄言を聞くこともないかもしれない。しかし私はどうしても衣食住とは別に暮らしの論が必要と考えている。

経済優先が独走して様々なマイナス面が現れてくると、やっと生活優先という言葉が出てきた。がそれはどうということもない中に泡のように消えてしまった。何故？ それは日本の文化の土壌に根ざした根深い問題であるが……。その1つは経済優先を支えているような論理が暮らしに対して無いから、折角生活優先と言っても、それはどうすればよいのかわからないまま立ち消えてしまったということ。つまり、経済成長は目的ではなく、よりよい人間生活のための手段である、と言いきかせることのできる人間主体の暮らしの論理がないからということ。

では、そうした暮らしの論理とはどういうものであるかということになるが、それはまず万人に共通な、しかも必須のものでなければならない。それを私は3つの柱を基本に考えている。第1は心身共に健康に生き続けること、第2は生活文化を楽しむ、生きること、第3は人間連帯に責任をもって生きること。そして衣食住のことは、これらの人間生活の基本目標を支える手段と考える。

(トータルライフ研究センター)



くらしをいとおしむ

巻頭言 〈暮しの論理〉……………山本 松代

* くらしをいとおしむ

くらしをいとおしむ……………	向井 承子	2
山村のくらしの中で……………	今北 哲也	6
私はなぜ消費者運動をするのか……………	加藤 真代	10
なぜ、私はヒープを志したのか……………	碧海 西癸	12
名古屋新幹線公害問題の現在……………	長谷川公一	15
子どもにくらしを学ばせたい……………	野原 春江	20

* 新しい家庭科を創るために

小学校では	ミシン・卒業製作……………	名取 弘文	25
中学校では	保育学習でつけたい力……………	稲田加代子, 徳岡 桂子	32
高等学校では	女性と職業・課題研究学習……………	寺島 紘子	38
大学では	教師養成のための大学カリキュラム問題と 教科教育法について……………	内藤 道子	44

* 発言	学習の主人公たち……………	伊藤真希, 堀 明美, 真鍋由紀子	55
市民として	ぬちぬあるうちや いちぬいて とらしょうや……………	渡久地政子	58
	富士山麓を核戦争の足場にするな……………	梶原 公子	59
	「モンペハウス」の日々……………	内山 裕子	60
教師のつぶやき	暮しに根ざした保健教育を……………	柴崎 和恵	61

* 連載	視点	「おしえる」とは……………	長谷川 孝	50
	counselling 入門(現場から)	カウンセリングの教育への応用 ……	児玉すみ子	52
	Weの読書室	現場で生きるということ……………	横山 雅子	66
	テレビ残像	哀しき管理職……………	野村 康子	67
	銀輪のうた	男と女のあいだには……………	栗原 実抄	68
	K子さんチのね子たち	おカマひめハナ子……………	さとうけいこ	69
	丙十舞雅里パレード	(10) ……	門野 晴子	63
	波	“We”はIの拠点, “We”の中のI ……	半田たつ子	72

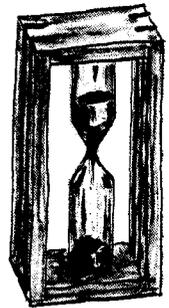
Weになんでも言おう なんでも聞こう 64/ Weの会だより 70/ 私たちのくらしぶりを
撃つ映画 その1 14/ その2 19/ 報告 62/ わたくしからあなたに 78/ 十字路 76/
あんでな 75/ “We” EDITOR'S NOTE 80 表紙 馬場洋子

くらしをいとおしむ

くらしをいとおしむ

ふとふり返ってみますと、ずいぶんたくさんの方にお目にかか
てきました。取材という仕事で、あるひとつの事象を納得するた
めに数多くの方のご証言をいただくこともあり、また、お会いしたい
と思う人そのものへの関心からのこともあり、お目にかかる動機も
さまざまなのですが、人間が好きでたまらない私には、実にむいて
いる仕事と、しみじみ思うこともあります。書くということでもく
せるなど思いもよらず、生き方を探しあぐねて右往左往していた時
が長かったものですから、まるで人生のいたずらのように、こうや
って活字にしていただけはいまを不思議にも思い、人さまに読んで
いただく重みもずしりと感じる、そんな四十代です。

ある事象を追っているようでいて、実はその事象が無数の人間群
像から編み出されている不思議さに気づいてきたころから、私はそ
の人のもつ、口から発されることばがとても好きになり、また気にか
かってくるようになりました。別に巧みに整ったことばだからとか、
かわゆる能弁家だから、ということではなく、ほとんどことばに
ならない沈黙に近いものだったり、ぼつり、ぼつりとこぼれ出す
ようなものであったりしても、沈黙も含めてのことばが、その人の



向井 承子

心やからだの奥底から出ていて、その人そのものの表現である
き、そのことばが、数え切れないほど無限に漂っていることばの洪
水の中から、ふいに浮かび上がって心につきささってくるのです。

その反対に、いわゆる能弁家とされる方たちのことばが、たま
なく空虚に感じられたりもします。ほとんど、からだと意識の底を
通過しない、無意味な記号としての文字が、その人の口から砂がこ
ぼれるように相互の脈絡もなくこぼれ出し、地表に落ちていき、い
くら長い時間、巧みに弁をあやつっていたとしても、そのことばを
受けとめる相手の心の間に、なにも生まれなかつたりする。そんな
場面に出会ったりするときは、人間と人間をむすぶものとしての役
割をもってはいたはずのことばが、意味を失ってしまった時代の象徴
をみる思いがして、とてもさびしくなります。

心をゆり動かされることばに出会った経験を思い返してみます
と、それはことばの専門家でもなく、知識人という枠にも縁のな
い、ただどれほどその方がご自分のくらしとむきあつてこられた
か、くらしの中の折々の現象に無意識にならずに、あるいは逃げる
ことなく目をそらさずにみつめてこられたか、ということに共通し

てかかっているように思われてなりません。

幸か不幸か、時を重ねるほどに、人間の反応が虚心のものかそうでないかが、すうっと見えてしまつて、だからといって、さびしくはなつても憤るでもなく、むしろ虚心になれるその人のものもろの条件に思いがいたりして愛しさを覚えたり、その人を歪めてしまつている人生模様や、解き放たれぬ業との葛藤を思いやり、我が身をのぞく思いにもなるのです。ほんとうに、ことばは単なる道具ではなく、人間そのものの表出なのでしょう。

ところで、ここ数年、私は心をゆり動かされることはに出会い続けました。それは、衝撃でもありまた感動でもありました。すでに四十数年生き続けてきて、まわりのことが急に変わらうしたのではないことぐらゐ判ります。私自身がそういうことばに出会いたくない、それを求める心の旅を始めた、ということも原因です。もつと原因の原因を探ればやみくもに生きる指針を求め、求めあぐねながら、いつもくらしという情念と矛盾の織りなし合うようなものとの間で反芻しているうちに、肩の力が抜けてまわりが見えるようになりかけてきたということでしょうか。

老いるのは、少しはさびしいのですが、次第に人の心が愛しくなり、邪心がほどけて、概念という枠からだけのものを見る肩張りから脱け出せてくるとすると、年経るのもまんざら、悪いものではない、とほつとしているところです。やみくもに走り求めるからだの情熱が少しずつ衰えているのも最近感じることです。そのかわり、自分のまわり以前よりも微妙に感応する力を感じたりしているのも、不思議なよるこびです。

つい数日前、関西に取材旅行に出かけていました。ある障害児の

通園施設と、この半年ほどおつきあいさせていたでいるのです。私が障害児の生き方にひきこまれていたのは、それが私の問題だからです。私自身も軽いのですが持病を抱え、また慢性病を抱えた子を育て（その間に感じ思ったことは、『小児病棟の子どもたち』という著書に折り込んでみました。お読みいただけると幸せです）、さらに自宅には半ば寝たきりの老親がいるのです。

病むこと、寝たきりでこの世に存在することは、ごく一般的な見方では不幸で悲惨なことです。原始的な宗教の発生の源をみても、老・苦・病・死との対峙がそこにあるようです。私も、身のまわりにもいつも存在する老・病・死を非日常の世界と思うばかりに、心の葛藤をくり返し、あるときにはその運命を呪い、自分を不幸感におとしめることで残酷な自己満足、裏返せば残忍な快感に変わるような感覚で、自分を保ってきたときもあります。

でも、それは私にとっては日常ではないか、と気づいたとき、私はそれを悲惨と思う常識のようなものが自分の感性に枠をはめているのではないか、とはつとしたものでした。たとえ寝たきりの母の存在を、ただ死を待つ期間、耐え忍ばなければならぬもの、ととらえてしまったならば、私の心にはいつもその死を早めようと願う力が果食うことになつてしまうのです。無意識の世界に果食う思いほど怖いものはありません。私はオカルト趣味はなく、よくオカルトの世界でいわれる生霊というものの存在もわかりませんが、自分自身の無意識の動作の底に流れるもの、それが連続とつながって日常をつくっていることを思うだけでも、無意識を形づくくるきっかけ、その意味の重大さをひしひしと思つてしまい、私は自分のよ

さて、その関西で、私は四歳のAちゃんというひとりの重症な水頭症の女の子に出会いました。からだや心を病む人たちと、健常とよばれる人たちがすっかり別の世界に切り離されてしまっているいまの世の中では、その様子は説明しなければ判らないのですが、水頭症というのは生まれついて、あるいはなにかの後天的な理由で脳の中にどんどん水がたまっていき、その水が脳を圧迫するため、脳が紙のようにうすくなってしまいうのです。

Aちゃんは、ちょっとみられないぐらい重い水頭症で、頭の重さだけでも二十キロはあるほどでした。さらに眼は下転^{しも}といって完全に下に落ちて白眼^{しろめ}だけになり、植物人間に近い状態だったのです。お母さんがAちゃんを連れて外に出ると、通りがかりの人は、「お化け」とささやきあう、なかにはわざわざもどってきて「しめ殺したらよかったのに」と聞こえるようにいう人もある。お母さんはAちゃんを抱え、家の中にうづくまるようにくらししていたのでした。

ところが、Aちゃんもお母さんも変わってきたのです。まず、白眼をむいているだけのAちゃんに視る機会を与えたい、と、その施設では、Aちゃんの眼が上へ向きたくなるような刺激を与え続けました。あるときは、重力を利用するためにAちゃんをゆらして頭を下げたり、目の上の方で楽しい音を鳴らしたり、考えられることは医師と生活指導員たちの手でなんでもやってみただけです。そして、Aちゃんの黒眼は次第に上ってきて、使っていなかった目はまるで義眼のように前をむいたままになりました。

こんどは左右です。遊び、音の刺激、からだをゆらす。Aちゃんがそれに反応するのかどうかの見透しもなく、ただ仮説の試みだった、と生活指導員の三十歳のKさんはいま思い出すのですが。つい

に、Aちゃんの眼は自在に動き出したのでした。

CTスキャンという現代医学の象徴のような機会があります。CTで映し出されるAちゃんの脳はまるで紙だそうです。この脳が好奇心とか、よるこび悲しみのような高度な反応をするはずはない、とだれもが思っていましたのに、眼が動き出してから、Aちゃんは少しずつ好奇心のように、手を動かし始めました。そして、耳がいい。家族のだれよりも最初に飛行機やクルマの音を聞き分け、自分の悪口をいう人には青ざめ、暖かな思いには表情をゆるめるのです。

「科学分析ではありえないことが、起こった。Aちゃんの奇蹟は、Aちゃんが人間であることの証明です。人間は測り知れない能力をもって世界にまわりに反応してるんですね。」

おかあさんも、指導員の人たちもAちゃんの奇蹟をこう語るのです。Aちゃんは、この春からふつうの幼稚園に仮入園します。Aちゃんは、科学分析絶対とか、悲惨観とかいう常識からまわりの人をふりほどく役わりをこの世で果たしているのでしょう。ただし、けいれんという苦しみをくり返しながらず。

Aちゃんは私が出会った障害児たちの、ほんの一人です。紙数には書きつくせないドラマがAちゃん一人だけをとってもあります。Aちゃんたちに出会った、そのまわりの、人間を愛しむ人たちに出会った。私は自分が救われたような思いになりました。それは、一人ひとりの小さないのちと妥協なくむきあった人たちだけから感じられる、また、その人たちがいったんは絶望にまで追いつめられただるうところから発見できた感動に接したからでありました。

私はいま、障害児だけのテーマを語っているつもりではありませ

ん。身のまわりのなにかに、心の限り接していたら、そこからなにかが生まれつくられる。社会が悪い、制度が悪いと口に出すのはやさしい。でも社会も制度も、この国や地域に住む人間たちがつくっているのです。たとえばAちゃんのもののある限り、人間の壮厳さに夢をかけながら接していきたくらいと願うとき、その願いの実現にむけてなにかを始めようとする、学校や幼稚園にはこんな設備が必要で、Aちゃんももし学校にいられないとするなら、それはいまの学校にどんな部分が欠けているから、そのために必要なことはこんなこと、という、ほんものの具体的な願いと、やむにやまれず動き出す人たちが数要るといふことなのでしょう。ことばのためのことばを口にする人は多くても、からだの底から噴出することばを吐く人も、それを受けとめて感応する心のもち主も少ない。社会は、そんな表面だけに生きつくりろう私たちを映しているだけです。

話題を変えてみます。一昨年から昨年、私は農村の女性たちと出会っていました。それも、この都会の中で探しあぐねているひとつの知恵をどこかで発見できないものか、という旅のようなものでした。都会では、いま女が働くこととか、女の自立ということばがまるで標語のようにとびかっている感じがです。女性誌のタイトルになり過ぎていふせいかもしれません。が、ただ働けばいいとはいえません。女性が外に出さえず自立できるわけでもない。いまは経済不況が吹き荒れ、O A革命がいわれ、女性にはますます単純補助労働の世界が、まるでゲーテの詩「魔王」のように生きがいという呪文でささやきかけている時代なのです。

雪深い山形のさらに山奥で出会った一人の若い女性のことばは、そんな私の懸念にざっくりとひっかかってきました。

「自立ってことば、なじまないのです。自分だけが自立するっていうことと、エゴとの区別がつかない。私は、家族のそれぞれがしたいことができて、それでいて家族だという互いを生かし合える関係がほしいのです」。

このことばだけではとても抽象的です。実は、彼女は小農の主婦として、孤独になってしまった農業社会が、農業そのものを衰えさせているさまに哀しみを覚えているのでした。農業はもともと自然のリズムに人間をなじませながら、一人一人の力が組み合わさって営む、かかわりの世界で、農産物も、そういう生き方から生まれました、生きもののリズムに忠実なものだったのです。老人や子どもが生かされる場もあった。旧さの象徴のようにいわれている農婦にもいまよりはもっと、いのちを生み出す底力があつた。彼女は、機械と農業に代替されてしまった手作業の世界を、死に絶えた人間のかかわりをとりもどそうと試みているようでした。

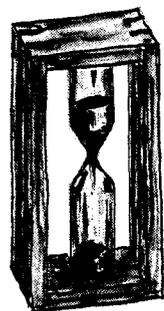
彼女と一年間かかわり続けました。別に学歴とてないひとつりの農婦の、一年間のことばは、宇宙自然の中に生きる人間が、その位置への畏れを見極め続ける深いものに聞こえました。それは、世間へ流された方がよほど安楽な常識に、むらという社会の中で背き続ける苦悩ひきかえの重いことばでもありました。

書くとは、不思議なものです。およそ、世間知にはうとく、ただ生き方を探しつつそれをたまたま仕事にできてきた、ということなのですが、心うたれる出会いを重ねるにつれ、ふと書くことが自分を規制し、いつのまにか出会いにひきずられながら、自分がつくられているようにも思えます。

(フリーライター)

くらしをいとおしむ

山村のくらしの中で



今北 哲也

霜月に入る前ごろから「もう秋しもたんか」というのがこら辺のあいさつ代わりになります。田植えをさつき、穫り入れをあきと呼ぶこの単純でくつきりとしごとを描く言葉がほくは好きです。

身体をつかうしごとを通して暮らしをたてていきたい、山という自然を現場として生活を興こしたい、と考えるようになったのは十年余り前からのことだったとおもいます。そのころのことです。東京でぼくは江戸火消しの伝統をうけ継ぐ町薦の仕事(当時七〇歳近かった)に出あったのです。その偶然の出逢いによって、職人の世界の一端に触れさせてもらえたということ以外に、結果としてからだを通して自分の再発見をやっていたこと、他から誘われるままに就職していればおそらくデスクワークが主体のしごとについていたかもしれない自分にとって、「野の師」との大きな出逢いでした。

基礎を掘り、コンクリをこめ、建前には腰を振らつかせながら三(四寸の材の上で)かけやを振りあげ、また足場丸太を組んでいく文

字通り地に足をつけざるを得ない毎日ですごした何年かの体験は、現在の自分の一つの転回点であり、出発点だったのだと気づきます。そして第二の出発点が、現在すむ村の一隅で、開墾をはじめた時期です。稲株の代わりに萱が占拠して久しいその荒田には、人間の撤退に乗じて二本の柳が背丈をゆうにこえて根を張っていました。

一日十坪、畳にして二〇枚分、塘欵をカヤ株に二度、三度テコ入れるたびに起きてくる黒い土を、少しづつ背後にひろげていったときの感情を今も想い起こすことができます。そのカヤ起こしから四年余りたって所帯をもち二年後に子を授かり、おまけに山羊一頭ニワトリ二羽を子の遊び相手にと飼いはじめ、当初から較べればだいぶ賑やかになってきました。

この三人一頭二羽のほくら小家族が縁をもった処は、滋賀県の朽木村の西北端。びわ湖に注ぐ安曇川の最上流部の一つにあたります。背後の山なみを越して在る若狭のくにや京都府美山町のくにざ

かいのムラ、ムラとの峠道でつなぐ交易がすでに途絶えてしまった現在、まさにどんづまりの部落となった「ハシタ生杉」。〈近畿〉というより「北陸」と言った方がよい多雪地帯。二、三Mは降り積もる三ヶ月余。一年三六五日の四分の一をこえて居坐る根雪。この界限のむらの伝統的なくらしの仕組みは、つまり一年の暦は、この百日余の冬にはじまり、再びの冬に終わるといっても言いすぎではありません。昔の暦が雪を下地にしているんだ、家族のくらしにとってこのことは大事な手本なんだ、と最近感じています。たべものを自給することを一つの目標にしてきたほくらにとって、それは一層強く感じられてきたことです。畑もなにも全て真白な世界の下に埋まるのですから。

所帯をもつ前まで、野菜や山の食いの自給はとくに保存という面で未だ不十分なものでした。春から秋は田づくりと請け負いの山しごとでアツという間にすぎる二、三年でした。米とみそだけは十分にまかなえてはいましたが。

この場に似つかわしい食卓に近づいてきたのは家族でくらすようになつたところからです。まがりなりにも百姓らしい生活のわたちがではじめていくことと、食卓がこの場にふさわしい献立で占められていくことは、大いに関連があると感じています。田や畑の世話だけでなく、山のめぐみを季節のがさずとりこんでそのつど貯蔵していく作業は、冬の長いころでは必要に迫られた大切なしごとです。子を授かってからは一層このしごとと割り当てる時間が増えてきたようです。

子に伝えるというあらかじめの意識なしに、しらすしらすにたべものをこまめに調理、保存していき、結果として、伝承というみえ

ない作業もやりはじめているのではないかと、連れ合いの動きをみてふと考えたりします。

春の雪だけは三月のお彼岸ごろから急ピッチになり、そのころから誰にも馴染み深いあのフキノトウが、かさの増えた川土堤の下や田畑の畦際や陽当たりのいい山裾など、至る処に目につくようになります。このフキノトウの味噌和えが我が家での春一番の青物です。漬物や冬前に干した野菜、芽の出かかったジャガイモなどはあっても、雪の下で冬越した紅カブラや雪菜の花茎はまだ伸びず、生の青いナツバに不自由するこの季節。たとえ少量であってもありふれたこの野のめぐみはありがたいものです。

山にコブシの花があちらこちらに目立つころ、インネギと呼ぶノビルが青々と株立ってきます。ラッキョウの孫のようなごまかい根っここの束を一つ一つ水洗いしながらほぐし、酢漬けにしたり酢味噌で和えて辛味をたのしみませす。在所の人は昔ほどは食卓にのせなくなりましたが。五月にさしかかるころはゼンマイの季節です。ワラビよりもはるかに価値あるものとしてきたこの山菜は、それだけに食べるまでに多くの手数がかかります。ゆがいてムシロ干しし、何度も揉みながら干し上げていきます。在所では山の口と呼ぶ山の神の御講やその他のいろんな寄り合いの機会にからし和えや油揚げと醤油を加えた煮物にしたりして、ひんばんにふるまいます。

このごろは木の芽のシーズンでもありません。家まわり、野良の隅に植えられたウコギや山裾に生えるマユミのまだ若い葉を枝ごとかきとり、庭先で乾しあげます。冬場の菜飯にまぜ込むのです。

田植えが一段落すれば梅雨も近づき、そろそろフキ採りの季節で

す。六月十日をフキ採りの口明けと定めた昔からのムラのとり決めがあります。このころからフキはよく肥えてきておいしくなるのです。山を大して持たない人も、誰でもこの山へ入ってもいいならわしは、一方で、どれだけフキが大事なたべものだったか教えています。だから足腰が弱ってきて若かったころのように自由に山を歩きまわる楽しみがなくなつたばあさんたちがせめて田や畑の畦草にまじつて生え込むフキを、山の沢筋のものより少し細かつたり場合によっては硬かつたりするけれど、腰を折り曲げていねいに刈り残す姿は、ぼくにとって一つの感動です。この地へ来て最初に到達つた〈伝統〉でした。

コヌカを入れた湯の中でアクを抜き、うす皮をはぎ、沢の流れでしばらくさらし、ワラで連に編んで梅雨の晴れ間を縫って乾かします。主に冬場のたべものとして保存するこの方法では、もどすのに丸一日ぐらいはかかっても塩漬けのものより味はいいのです。かつてはこのフキは米の凶作に備えての重要な糧としてかなり大量にたべられていたようです。

盆がすぎ、台風一過の秋は、猪と競争のトチの実拾いがまつてます。フキ、ゼンマイとならんで冬の糧のなかで大きな比重を占めていたとおもわれるトチ餅をこしらえることは、いかにめんどうくさいものであつても欠かせぬしごとです。正月前にあるいは寒に入つてから十日以上もかかつて餅にまで仕上げける作業は、この土地柄をよくあらわしているようにおもいます。縄文の時代から食べつづけられてきた代表的なこのトチも、戦後のバルブ材などに、大径木がどんどん伐出されてしまい、今はすいぶんと樹の数も少なくなつたようです。実をつけるまでに二〇年ぐらいはかかるだろうといわれ

るこの樹を、気長に植林していきたいと考えてます。

山村の食糧確保の知恵について、列島のすみずみを晩年に至るまで歩きつづけた宮本常一さんは、次のように伝えていきます。

「岐阜県と福井県の境に穴馬という村がありますが、私はそこへ泊まつたことがあります。そのあたりではトチの木というのは一本々々所有がぎまつておりまして、娘が嫁にいくときにはトチの木を持っていったものだ。トチの木を嫁にいくことは、大きな木は持つていくことはできないのですが、所有権だけをもらつていくわけですから。」

そうするとこの村の娘がかりに隣村へ嫁にいきます、親もとの村のトチの実落ちるときには、隣村から親もとの村までトチの実を取りに帰るわけです。やはりトチの実を拾うためには、ちゃんと下草をきれいに刈っておかなければいけない。そうしてその落ちたものを俵へ詰めて、背負つてまた嫁入り先へいくというのです。今度その嫁さんに娘ができて、娘が嫁にいくときにはまたこれを、おまえこのトチの木をやるからといってそのトチの木をもらう。そのトチの木を持つことによつて飢饉から逃れることができた。ものを作つて食べるだけでなく、トチを持つことによつて、その生活を安全に立てることができ、飢饉を切り抜けることができたという話をその村で聞いたことがあります。この木もやがてバルブ材なんかに伐られてしまつておりますけれども、人々が生きていくための手段として、そういうようにじつにきこまかに、食用に供しうるものすべてを抱え込んで生活を立てていたということが、そういう事実を通して知ることができるのです……」後略

こうしてぼくらはムラの人たちに教わるることによって、伝統的な「べもの」を少しづつ食卓にのせられるようになってきました。米や野菜以外のこの山のものをまだ地の人のように十分にとりこむまでにはなっていないませんが、たとえわずかでも毎年切らさず確保していけるようになってきたのはありがたいことです。それは同時に一方で女のしごととの多彩さに改めておどろく過程でした。この点で先ほどの話をみてみると、くらしを伝承していくといういわば文化の核心部分を、身体でなってきた女たちの非常に大きな役割におもいが至り深い感動をおぼえます。

自給ということではもう一つ、ぼくらのくらしにとって大きな励みになっているものがあります。夏はスイート・コーン秋は紅カブラ冬はその漬物といった畑物を中心とした出荷を通じてつながり合っている「使い捨て時代を考える会」(京都を中心に周辺都市にひろがっている)の存在です。農の世界を通してつまりはへたべもの「」を通してそれぞれがくらしの中身をみなおして、ものと情報氾濫に流されてしまうことなく自分たちが自身の生活の主人になれるようにできることからいろんな工夫を重ねていくという、女たちが中心になって動いてきた会です。百姓にたずさわる生産者を取りまいた一五〇〇世帯ほどのこの会のためものに対する一つの基本的な考え方は、百姓の自給の延長において街の者がそのおすわけにあずかる、というものです。百姓の側にとってみれば多大な装備、投資のともなう近代的経営とは逆に、自然の循環にははずれないやり方へ転換していくことです。百姓百品のくらしを徐々にでもとりもとして商品経済あるいは工業社会の論理に足をすくわれない自

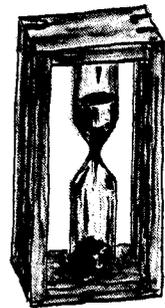
立した農の営みをめざすことです。へたべもの「」がそもそも商品として扱われるのではなく、人間の生命をやしなうかけがえのないものである、という認識は生産者と消費者との提携における大きな前提となっています。

ここへ縁をもち八年目を迎えたぼくは街の人たちとのつながりの中で、今、山をもとうと考えています。将来にわたって自給の幅をもうひとまわりふくらませるためには山がどうしても必要だと以前から想いつづけてきました。考えてみれば山あるいは山村は、圧倒的多数となった都市の人たちにとって余り遠い存在となり、あるいは不当にも忘れられてきました。地元ですむぼくらにとって直接的には山は薪炭を求めめる場であり、フキやゼンマイ、ワラビ、トチの実その他多種類のたべものを得る場であり、あるいはそこへ樹を植えてくらしの土台を築いていく現場です。舎飼いの家畜をある一定期間放し飼いしたり田畑の肥料として下草、柴を刈り取る場でもあり、稲木の材料や百姓道具、山しごとの道具の一部をまかなう場でもあり、薬草や染め物の材料を得てくらしをきめこまかに安定させる場でもあります。こういった「へ私」のくらしの場としての山を、街の人たちとのつながりの中で展開していき社会化していきたいと考えています。川を遡ればいずれ山に達するように街の暮しの源もまた山に在るとおもいます。時代の羅針盤の一つが山のひだに埋め込まれているはずだと信じています。

多くの人たちの知恵が列島の山ふところにも結集され、あちこちのムラ、ムラでいわば小さな小さなくらしの槌音が響くことを夢みて……。

くらしをいとおしむ

私はなぜ消費者運動をするのか



加藤 真代

結婚して共働きもした私だが、三十二歳の一九六八年、在宅時間の多い全日制市民になった。会社という組織や一人前の月給と引替に得たものは、家庭教師や翻訳下請で入る四分の一人前位の経済的自立と時間の余裕、そして地域社会での人間関係であった。

団地暮しの主婦になった私が一番驚いたことは、主婦たちの間の情報の氾濫であった。路上の立ち話から趣味の集まりでの情報交換、帰宅後の電話のやりとりなど、機会もさまざまなら内容もさまざまである。

「市販の洗剤は手荒れや公害のもとになるそうだから、アメリカ製のこれがいいそうよ」と一人がいえば、「でもあれは高いから国産でもいいのがあるのよ」と、何やら怪しげなものを教えてくれる人もいる。業者から高い自然食品なるものを買ってこんですすめてくれる人もいる。こんな周りの気のいい女たちの様子をみると、自分自身も含め、溢れている消費物資についての情報をどう整理し生活に生かしていったらいいのか戸惑うのだった。役員が毎年交替という

団地の管理組合に、消費生活についての情報提供まで期待するのは無理なようである。

そんな発端から、まず自分でいろいろな消費者情報を集め始めたのだが、入ってくるのは企業の宣伝的情報ばかり。勤めていたところと違ってコピー一つとるにも苦勞が伴う。こんな効率の悪いことを独りでやっていると駄目だ、そう考えてそれまでの近所の知り合いに声をかけ、グループをつくることにした(グループづくりをし、それを対等の関係で持続することの困難さについては、自責と悔恨、周囲への多少の訴えも含めて記したくもあるが、今は本題からはずれるので割愛する)。

私の市(人口五万弱)には、行政のお声がかかりでできた婦人会を中心にした「くらしの会」という消費者団体がある。私たちのグループもそこに入れてもらい、さまざまな市レベルでのおつきあいや団地内での活動が始まった。

この会を通して、市や県の消費者行政とつきあう中で、企業情報

も要求の仕方によってはもう一歩つき進んだものが入るようになり、各種の商品や環境資源問題など、個人ではできない学習の機会を得ることもできた。消費者行政だけではなく、公民館の学習活動を通じて得たことも多くある。

その一方、先進消費者団体の出版物や学識者の著作も読み、自分たちの機関誌を通じて、周りの人々に情報提供する自信もでき始めた。同時に、行政そのものにも市民として注文したくなることを発見して、さまざまな提言を市や県、議会にもするようになった。

A F 2が禁止になる前に、市内の豆腐屋にこれを抜いてもらうために市に話合いの場を設定してもらったり、学校給食パンからリジン抜き運動もした。新しい添加物の許可や緩和の都度業者に警告情報を流してもらい、不用品交換会や粉石けん運動の拠点として市庁舎を使えるようにした。市広報に「消費者の窓」という頁を新設して今日的な消費者問題の情報提供ももらうようになった。市民むけ講座のテーマや講師の注文を出し、ともすれば商工育成の色が先行しがちな経済課内で商工係兼任であった消費者係を、市民の生活権優先で考えてもらえるよう市民生活課へ移行させ、二人の担当者に増員できたことなど、仲間があったからこそ実現できたことがいくつかある。

ふと気がついた時には、私はよく市役所にたむろうるさい小母さんの一人になっていた。地方行政の中の、しかも消費生活担当者と市民が手を組んでできることの枠の中身はしれたものかもしれない。しかし、私たちはここを入口にして行政全般への納税者意識が醸成され、市民として必要な行動が促されていくし、中に働く人もまた、市民の需要に応じた仕事をする喜びを覚えていってくれるよ

うになるのではなかと考え、行動している。

物価や資源環境問題など、今日の消費者問題は、地域での互いの啓発や共同購入などの活動だけでは片がつかない部分が多い分多

い。

一九七三年六月ごろ、テレビで当時の前田科学技術庁長官が「くさらないじゃがいも」のメリットを被露していた。食品添加物の人体への影響が巷間の知るところとなるや、またしても業者の利便性のみが先行する放射線による食品保存とは!! 中央の大団体はどうしているのだろうか。その時始めて主婦連に電話をした。応待に出た事務局長は、「安全性に疑問はもっています。でも私たちもたくさん抱えて手一杯。あなたがそう思ったらいっしょにおやりになって」と言った。これまで自立して歩んできたつもりだった私の耳に痛かった優しく厳しい一言。この運動を主婦連にまかせようとしていた自分に恥じ入ると同時に、地域活動が中央の運動と結びついて解決されていくはずのこと多しと考え、その後、私は主婦連合会の個人会員になった。

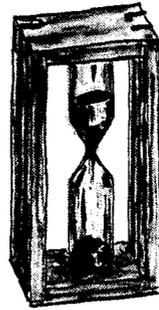
企業（生産・流通側）は、仲良く手を組んで政治と結びつき、こんな風に私たち（消費側）に一方的なことを押しつけてくる。あるいは不当なカルテルを結んで私たちの暮らしを圧迫する。力のない私たちがバラバラでは、社会的発言は無視される。力なき者、弱い者こそ束になってかからねばならない。私はそう考えたのだが、当初はおしゃもじ（主婦連のシンボル）アレルギーの友人も多かった。残念なことにはその源は、ほとんど一部のマスコミや企業側がくり上げたわからずやのうるさ型オパッサンの群という先入観念であ

ったと思う。しかし、だんだん協調者も増えて、今は一つの地域グループになって、主婦連の隅っこを支えている。

抽象的な消費者の権利、憲法に書かれている健康で文化的な生活を営む権利を、具体的なものにしていく作業は、米、タタワンから始まって、テレビのCMや公共料金、原子力問題まで実に幅が広い。運動は忍耐強い調査や人との会話など、ボランティアする時間が、

くらしをいとおしむ

なぜ、私はヒープを志したのか



碧海 西癸

演劇人になることを夢見た時代はあったが、家政学を学ぼうと志したことはなかった。就職し、自活しようと思ったが、今、私の仕事の重要な部分である消費者教育はもちろんのこと、それ以外の分野に関しても消費者問題に取り組むことになろうとは予想だにしないことだった。私は高校までの家庭科の授業は受け、担任だった家庭科の女教師の人間的魅力や、教え子に対する熱意に感激していたが、教科の内容の重要性を汲みとることはできないでいた。労働組合の婦人部や、ウーマンシップの活動に相当深くかかわったけれど、消費者運動については明らかに傍観者であった。

現在の私は電力会社のホーム・エコノミストであり、食品会社のヒープ室所属フード・アドバイザーの肩書も所有している。通産省認定の消費生活アドバイザーの一期生でもある。日本には七カ国ならぬ八番目のカタカナ外来語というものがあるとある人が言ったが、出所も意味も曖昧なまま、一部の人々しかその正しい定義を知らぬカタカナ語のおかげで、ホームエコノミックスを専攻しない私がホームエコノミストと称する不思議さがまかり通るのである。「なぜあなたはヒープを志したのか？」原稿依頼を受け、さて正直なところ困ってしまいました。はっきりしていることは、もし私が夫の

ものすぐく要る。より大切だと思おう方を選択して動いている内に、金を得られる仕事は、いつの間にか私から離れていってしまった。夫の被扶養者という立場に時々悩みながらも、とにかく現在は、消費者、婦人、平和問題といった市民運動が、私の生活の中心である。いささか気障だが、こんな社会を次の世代に残せるかという怒りや気負いが、常に私を駆りたてている。(主婦連合会常任委員)

海外転勤という不運によって放送局の番組制作者の職を失っていなかったら、おそらく自分の人生を、ヒープという適職に結びつける幸運に（あるいは好運に）は恵まれなかったらどうかということである。

専業主婦の期間、私はただの一瞬も再就職したいという希望を捨てたことはなかった。しかし、マスコミ界にもどることは難しく、たえず前途を不安に思いながらも、私はリップやPTAの活動に参加し自宅や社会教育の機関でのささやかな料理指導など、思いがけず講演や実技指導の経験を重ねる機会を得ていたのである。

そんな時、放送局時代の後輩を通じて税所百合子さんに紹介され、「HEIB」というアメリカの女性たちの活動を生まれてはじめて耳にし、日本にヒープを育てその活動を推進するための協力を要請された。それは就職ではなく、むしろ手弁当、持ち出しの運動であり、ヒープ的な仕事で、私の経済的自立を支えることになるのは、それから四年後のことであったが、はじめて税所さんたちのグループの会合に参加し（その仲間には高校の一年後輩に当る高原須美子さんがいた）、話を聞くうちにヒープこそ私にとって一生の目標になり得るという確信が急激に深まった。

我思う故に我在り——まことに不遜な言い方とは思いますが、私にとって「生きる」又は「生活する」という感覚は、偉大な思想家の言葉がまことにふさわしく代弁してくれているという気がするのである。

来年の春には五十歳になる私が、みずから誇れるものがあるとすれば、それは朝起きて、一日暮して、夜寝床に入るまで、あるいは眠っている間の夢まで含めて、私は私自身の意志に忠実に、自分の

頭で考え、自分の身体を使って行動し、自分の意欲を実践にかえ「自力本願」の生き方に徹しようとしていることである。（*学生時代、伊豆の海辺の寮で水泳の合宿をしていた時、私が寝言で「もっと沖へ！」と大声で言ったという友人たちの語り草がある。「あなたらしい」と皆笑うが、私はこのはなしが気に入っている。）

他人の意見に耳を傾けたり、仲間と協力することができないと言っている訳ではない。ただ、価値判断の最後の砦は常に自分にあるという意識を、非常に強く自覚しているということである。右へ做えることは嫌いで、流行に卒先して乗ることなど決してない。

仕事上の会議、仲間同志の語り、講演会、父母会、様々な席で、私はすぐ発言してしまう。どなたかご意見は？ 質問は？ と聞かれると無理なく手をあげてしまう。疑問が生じるからであり、意見を持つからであり、相手のものの考え方に対してすぐ反応するからである。自分の質問が進行を妨げ、他のメンバーに迷惑を与えぬ配慮はしているつもりだが、さもなければ簡単な用語についての質問でも憶さず提出する性質である。

よく通勤の混雑した電車の中で、吊広告を丹念に眺めている。内容を子細に読み、ひとり納得したり、憤慨したり、新しい発見を喜んだりして退屈しない。私の一日は、世の中の仕組みや情報の与えられ方、物の売られ方、人々の行動その他もろもろについて、腹を立て、感動し、共感し、そしてたえずおのれの内に様々なニーズが生まれ、提言が浮かびそれを口にし最後には疲れきって終わる、その繰返しである。

「肉体的にも精神的にもなみはずれて健康で生きがいのよいよ」と私より繊細で華奢な友人が羨しがり、「だからそれでも保つよ」

「と言うが、確かにタフであることもヒープに向く私の適性と言えるかもしれない。

私が生まれ育った家庭では「女だから」という枠付けは一切なかった。姉妹三人、父親は娘たちが自力で問題解決に立ち向かうことを殊のほか喜び、その鍛え方は厳しく容赦がなかった。その代わり子供たちに多様な経験をさせることに熱心で、私たちが自発的に疑問をぶついたり、新たな試みに努力したりすることには協力を惜しまない。自転車、スキー、水泳、竹馬（それも足の高さ1mもある）といった、ともすれば当時の少女たちとは無縁な技術も叱咤激励しながら教え込む。

女だからと言って、いたわられる、特別扱いされる経験を持たぬ私たち姉妹は、今だに男性に荷物を持つてもらおうとか手をかしてもらうことが苦手であるが、裏返せば男に対して劣等感を持つことがないとも言える。学校でもクラブでも、職場でも組合活動でも、そして恋愛や結婚という個人的体験を通じて男と女の違いを上下・高低の差として実感することがない。企業対消費者（生活者）、男性対女性、専門家対素人といった異なる価値観、異なる視点のほだまに立って、発展的なあるいはラセン状の展開や解決を可能にする方向づけをする、自身の人生に根ざした自主的判断を持つ、衣食住のすべての側面を実践を通じてとらえる、そして具体的な作業を積重ねることによって世直しに参加する、それをヒープの活動と定義するなら、それは私の生いたちや現在の生き方に最もふさわしいと聞き直るしかない。アメリカのHEIBは職種かもしれないし、資格かもしれないが、「ヒープ」はむしろ理念だと私は思いこんでいる。

私たちのくらしぶりを撃つ映画 その1 「原発切抜帖」

ああ、映画っていいなあ。心の底から思った。水野晴夫の「一緒に楽しませよう」の意味からではない。

かの土本典昭氏の企画演出作品である。氏の卓越した着想と編集には感嘆するのみだ。原子力事故を報ずる朝日・毎日・読売・東京各紙の一万点余の記事だけを素材にした映画が、こんなに衝撃的だとは。人の目を開かせるとは。歴史の生き証文になるとは。

土本氏は、ある若いアジア人のひとこと「私の国で原発を作る日 came たら、きっと日本がひきあいに出されるでしょう。」原爆の怖ろしさをあれほど知っている日本でさえ、原発大国になっているではないか」とが、この映画製作の動機だという。'45年八月七日、広島島のピカを報じた話センテ角の記事を初めとして、すべてここ十年来特に目にしてきた覚えのある記事ばかり。原爆は忌避すべきもの、原子力平和利用は人類の輝く夢、放射能洩れは当事者以外「他人事」。溢れる情報に溺れ、一つ一つの記事をつないで考えることもせず、今日の快適な暮らしのみを追って来た私。鉄鎚を浴びながらも、真実を直視する不思議な魅力に、限りなくひきつけられた。語りは小沢昭一氏が報酬を拒んで協力された。その迫力が映像をみごとに生かす。こんな表現方法を駆使できたなら、と思った。

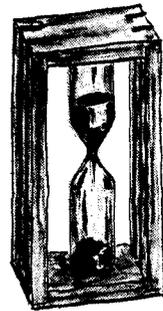
この16ミリプリントの販売価格24万円、貸出料3万円。

問い合わせは、青林舎(☎03・504・1706)へ。(半田)

くらしをいとおしむ

名古屋新幹線公害問題の現在

くらしをいとおしむ者ほど苦悩は深い



長谷川公一

一、住民の要求と減速運転

下りの東海道新幹線が名古屋駅に近づくにつれて、窓外は急に家並がたてこんでくる。線路近くに目をこらしていると、はだかの土地を囲むフェンスが点々とあるのに気づく。列車によっては、ずいぶん早くからスピードを落として、そのまま駅まで一〇分近く走り続けるものがある。また、たてこむ家並の中を高速のまま走り抜け、ナゴヤ球場を過ぎてから、ブレーキをかけはじめる列車もある。

名古屋駅の上り手前一〇キロから、ナゴヤ球場付近までの約七キロの住宅密集地、これが「七キロ区間」とよばれる、新幹線公害の日本で最も深刻な地域である。都内の密集地では、カーブなどの物理的制約を理由に、時速一〇〇キロの徐行運転が行われている。二〇〇キロで走られるのは、ここだけだ。

この区間をかなりゆっくり走るのは、動労所屬の運転士の列車である。ほぼ時速一一〇キロ。三分の一ぐらいあるという。もう三分の一の列車は、比較的ゆっくり走り、時速は一五〇から一六〇キロ

程度。国労所屬の運転士の一部が、自主的に減速している列車である。決められた二〇〇キロで走り抜ける列車は残り三分の一しかない。動労が「減速闘争」をはじめたのは、昭和四九年二月。もう九年近く続く。このための遅れはせいぜい三〇秒。他の区間で、調整できるからだ。

名古屋新幹線公害訴訟原告団が国鉄を相手におこした裁判も長期化して九年近くになる。差止は却け、損害賠償は認めるといふ双方痛み分けの一審判決を経て、現在控訴審を争っている。

彼らの中心要求は、新幹線の七キロ区間でのスピード・ダウン。「失われた静かな環境を返せ」という現状回復要求でもある。騒音は六五ホン以下、振動は五〇デシベル以下におさえよ、そのためには、時速七〇キロ以下で走れというのが差止請求の内容である。

動労や、国労の一部の運転士が徐行運転しているのは、①減速によって騒音・振動被害を少しでも軽減するとともに、②減速が容易であり、遅れもほとんど出ないことを実証し、③頑なに減速を拒否

する国鉄当局の姿勢を内部告発しているのである。被害者の住民運動と加害企業の労働組合との共闘・連帯が、長期にわたって続いているのは稀有な例だ。

国鉄当局も当初は別として、ほとんど処分を控え、減速運転は半ば既成事実化している。

二、病める地域社会

七キロ区間を、新幹線の高架にはぼ従って歩いてみる。もつとも、ごく一部を除いて、高架に沿って歩くことはできない。街路とは無関係に、というよりもむしろ、都市計画の済んだほぼ碁盤状の街路を全く無視して、高架橋は斜めに突走っているからだ。

(一)新幹線公害の原因

名古屋新幹線公害の直接の原因は、まず①このように密集市街地を通したルート選定にあった。戦前、弾丸列車計画用に既にも買収してあった用地をできるだけ利用しようとしたためといわれる。また、②国鉄は、高架橋に必要な最小限の用地しか買収しなかった。新幹線と住居との間に緩衝地帯を設けるといような発想がなかった。木造家屋の軒先を文字通りかすめるようにして、新幹線は走るのである。このほかにも、③高架橋の脆弱な構造、④騒音対策のない無道床鉄橋といった、基本的な欠陥が指摘されている。

東京駅の中央階段のこんなレリーフが思い出される。「東海道新幹線の中央階段のこんなレリーフが思い出される。「東海道新幹線この鉄道は日本国民の叡智と努力によって完成された」

建設当時、国鉄の技術陣には、安全性や耐久性への考慮はあっても、最高時速二一〇キロのスピードが、一方で沿線周辺の人々とくらしに何をもちたらずのか、騒音、振動に対する配慮はなかった。安くつくり、東京オリンピックに間に合わせることに、国鉄の「叡智と

努力」の焦点はここにしかなかった。

(二)沿線の現在と過去

沿線を歩いて目立つのは、車窓からも目についた、フェンスで囲まれた移転跡地である。騒音や振動に耐えきれずに、国鉄に土地を売り、東海市や春日井市といった名古屋周辺の新興住宅地などに移転した者の跡地である。昭和五十六年度までに、七キロ区間から約四〇〇戸が、国鉄の補償をうけて立ち退いている。

フェンスの中は、高架橋の下と同様に雑草が伸び放題である。中には、金網が破れ、ゴミが投棄されているようなところもある。夜はもろろん真暗闇。街生上、治安上も好ましくない虚な空間だ。利用の目途すらたない国鉄の所有地である。

新幹線に近接して、工場が目立つ、稀には、鉄筋のマンションがある。こうした第三者に買却して立ち退いた者がどれぐらいにのぼるのか、国鉄も市もつかんではない。

新幹線に接する工場は、大きな騒音が嫌われる金属加工や、機械製造などの比較的小さな町工場が多い。地価が低下するせいもあって、新幹線は町工場という新たな騒音源を招き寄せることになった。

「騒音の複合汚染というわけだ。小学校が近くて、静かなところだから土地を求めたんだというMさん（六四歳）は苦笑する。

「私が土地を探して歩いたのは、昭和二五、六年のころだった。当時はみんな田んぼだった。三四年に家を建てたんだが、妻と二人して、一円、二円とやっとなめた金で建てたんだ」。

静かさは五年目に破られる。Mさんは、二年前、苦菜をともにした妻（当時五九歳）を亡くした。「脈なし病」と心臓肥大で一〇年間

療養を続けた末だった。うつ伏せで眠る心臓病の妻には、とくに振動が辛そうだったとMさんは思いおこす。夜勤だったMさん自身、三九年の新幹線の開業から、四八年の定年退職まで、昼間眠れないために、胃腸障害に悩まされ通しだったという。

(三)健康被害を中心とした複合公害

新幹線は一日二〇〇回往復する。朝六時半から夜の一一時半まで、五分間に一回の割合で衝撃が走り抜ける。

高架に間近な家々は、八〇ホンを超える騒音のほか、振動、風、家屋の損傷、日照障害、通過時のテレビ画像の乱れ(昭和五二年までに解決)など、幾重もの苦痛を被り続けてきた。

騒音・振動でイライラする、眠れない、食欲がない、会話ができない、一家の団欒が破壊される。読書や勉強もできない。騒音八〇ホン、振動七〇デシベルといった数値は、被害測定の一つの目安にすぎない。破壊されているのは、人々のくらし全体である。

Mさん夫妻の例のように、とりわけ安静な環境を求められる療養者、病人、夜勤者、老人、妊婦、乳幼児といった、一般に在宅時間の長い弱者ほど、かえって騒音・振動にさらされる時間が長く、苦痛が深刻化するという矛盾がある。健康な大人でも、病気で寝込むや、騒音・振動の苦しみは痛切だ。

慢性的な心理的不快感にもとづくストレス性の健康被害。循環器や消化器系の病気が沿線の住民には目立つといわれている。

(四)沿線の「姨捨山」化

移転者の多くは、五〇代までの比較的若い年齢層である。七キロ区間の宅地化が進んだのは、昭和二〇年代の後半から三〇年代半ばだった。六〇代以上にとっては、Mさんのように高度成長期以前に

自分が探してもめ、苦勞して家をたてた土地だ。小なりといえども、人生の縮図があり、近隣とのふれあいがある。これら「第一世代」の人々は、当然地域への愛着が強い。

この名古屋の新幹線公害反対運動をはじめ、「老人パワー」や「主婦パワー」が各地の住民運動を支えている事實は、被害の切実さと地域への愛着が、どのような人々にとって最も強いのかを物語っている。

また、老夫婦だけでは、騒音地帯からの脱出を希望しても、経済的な困難がある。国鉄の買収費だけでは、新しい家を手に入れることはできない。借入金の返済能力のある年齢層までが脱出可能なのである。

こうして、沿線は今や「姨捨山」化しつつあるといえる。老夫婦を残して、就職や結婚・出産を機に子どもは転居していく例が多い。子どもたち「第二世代」では、長年、新幹線に悩まされ続けてきたこの地域への愛着はない。「娘夫婦も孫も、泊まりにきてくれないのが何よりつらい」とこぼす老夫婦もいる。

(四)防音工事の家々

移転跡地が目立つ一方で、外壁を新しいタタン板でおおい、アルミサッシを入れるなどした防音工事済みの家々が多い。国鉄の移転補償をうけられるのは、沿線の両側、二〇メートル以内の家屋である。対象者であっても移転を希望しない家、二〇メートル外で七五ホンをこえる騒音を被っている家は、防音工事を受けることができる。七〇デシベル以上の振動を被っていれば、あわせて防振工事も受けることができる。

防音上の効果よりも、古びた家の外装が新しくなる、クーラーが

はいる、それが魅力で、訴訟団にはいっていない世帯を中心に、工事を受ける家が増えていったといわれている。

防音工事については、①部屋数の制限、②事後のチェックがない、③「……騒音により生ずる障害の防止については、助成金の支払い完了と同時に解決したものとす、」という条項付きの契約書に、判をつかねばならない、などの問題がある。防音工事を受けた以上、もう国鉄に文句はいえないんだと条項を解釈して、訴訟団としての活動から身を引いてしまいう原告がいる。一度防音工事を受けた家は追加の防音工事や、移転補償を受けられないという契約が、こうして、結果的には人々を訴訟団から離していく。

(9)原告の苦悩

差止請求を却けた第一審の判決を、原告の住民は敗訴と受けとめている。最高裁まで、あと何年かかるのか。裁判が長期化していくなかで、原告ひとりひとりが、移転を選ぶか、防音・防振工事を受けるか、判決を待つかという、いずれにしても苦しい選択に迫られている。

原告の移転が増えすぎるとは、裁判上有利ではない。

頑なな国鉄、新幹線の公共性を重視する裁判所を相手に、くらしと地域をいとおしむ者ほど、苦悩は深い。

高架に近接する激しい騒音と振動の中で、寝たきりの老妻を看病しながら、八二歳の老人は呻吟する。「おまえにゃあー、すまんが、リーダーの責任上、わしは移転できないんだ。」

新幹線の建設工事中から、老人は、ひとりで抗議を繰り返してきた。「大国鉄を相手にするドンキホーテ」と、近所の人々の気持ちが抜いてのりこえ、ようやく、住民運動に育ててからでも、一一年

余り。彼は二〇年間新幹線とたたかい続けてきた。

「正義は最後に勝利する」。祈るように、自分を奮いたたせるように、最近頻りに口にする。教育勸語で育った老人の、国鉄批判を支え続けてきた信念である。

三、なにが国鉄をそうさせるのか

では、なぜ、国鉄はスピード・ダウンを拒み続けるのだろうか。減速は、大幅な累積赤字に悩む国鉄に、新たな財政負担を強いこともなく、最も自由にできるダイヤをたかだか、数分遅らすだけで可能である。

一地域の減速は、他地域に波及し、新幹線は高速性の生命を失ってしまうというのが、表向きの理由である。しかし、次のように推論してみると、減速を拒む国鉄当局の体質と、今日の国鉄の「破産状態」の主要因である組織的無能力さとは、同じ根をもっているのではないかと思えてならない。

第一に、国鉄には、国家の鉄道であるという「お上意識」がある。①そこからは、経営の視点から合理的な環境対策を選ばずという態度は生じにくい。例えば、私鉄ならば、裁判費用の巨大化を嫌って早期の和解を採ったのではないだろうか。②そうして、住民要求による施策の変更への過剰な警戒心、嫌悪感がある。減速要求は、ダイヤ編成権への住民の不当な介入と映っているかもしれない。また、住民への一步の譲歩が、公害反対の各地の住民運動を勢いづけ、国鉄の環境対策全体にはねかえってくるのではないかと、いう恐怖。

第二に、国鉄は身動きのとりにくい、巨大なタテ割り組織である。③官僚主義の弊害も肥大化してあらわれる。公害は、環境保全

《名古屋新幹線公害問題関連略年表》

昭14.	11	「弾丸列車計画」決定(東京一下関、敗戦で中止)
39.	10	東海道新幹線開業(12両、56往復)
45.	2	万博を機に16両編成に。本数も増大、被害深刻化。
46.	10	テレビ受信料の不払い運動、「新幹線公害対策同盟」に発展
46.	11	東北・上越新幹線着工、各地で反対運動
47.	3	山陽新幹線岡山まで開通
49.	2	動労減速闘争開始(以後継続)
49.	3	名古屋新幹線公害訴訟原告団 341世帯 575人提訴(差止・損害賠償請求)
50.	3	山陽新幹線全線開通
50.	7	新幹線騒音環境基準告示(住宅地域70ホン、商工業地域75ホン以下)
51.	3	新幹線騒音対策要綱閣議了解(移転補償、防音工事の基本原則)
55.	9	名古屋地裁一番判決(差止棄却、損害賠償認容)
56.	6	国鉄高木総裁来名視察。名古屋高裁で控訴審開始
57.	6	東北新幹線大宮暫定開業

部の担当であり、ダイヤ編成は、運転局の任務である。環境保全部が減速を提起することは、運転局の権限への干渉になりかねない。

④ 施策の変更はできるだけ避けなければならない。関連部局を説得するに足る理由のない施策の変更は、いたずらに混乱を結果する。

⑤ したがって、官僚の事なかれ主義にとつて、減速の提起は、余りにも冒険である。

ところで、官僚組織のこのような壁は、国鉄ばかりがもっているわけではない。くらしをいとおしむ住民・市民は、社会生活のさまざまな局面で、「お上意識」と「事なかれ主義」がつくくる硬直した壁の前に、苦悶を強いられてきたのではあるまいか。

私たちのくらしぶりを撃つ映画 その2
「みちことオーサ」

小山内美智子「脳性マヒ。「いちご会」代表。スウェーデンで地域に生きる障害者を知る。オーサもその一人。帰国後仲間と札幌のアパートで、ケア付き住宅の実現を目ざし研究と活動を始める。

オーセ・ルームブリッキング(オーサ)―みちこと同じ障害を持つが、ケア付き学生寮に住み、成人学校に通い、ガール・スカウトのリーダーをつとめる。強い自立心の持ち主。

オーサが仲間と日本に来る。みちことはオーサを札幌に招くために大奮闘する。映画は、みちことオーサが共に過ごした一週間の記録である。オーサが来道する前日、早い雪が地を清めるかのように降った。美しい情景、美しい音楽が、二人の再会の幸せを暗示する。

「私が自立して生きようと決意したのは、山口県に住む重度脳性マヒ者の木村浩子さんが子供を産み育てている姿をTVで観たのがきっかけでした。私がスウェーデンの旅でもらった生きるエネルギ―、たくましく生きるオーサの姿を、映画を通じて多くの仲間と味わってもらえたら……」。みちこ

「自分の心を開いて出来る限り社会の中に出て行きながら、自分が憶病であったり、恥じることを忘れ去ってしまわなければなりません。というのは、私たちが自分で他人と違うと考えている限り、私たちは他の人と違っているのです。障害者であれそうでない人であれ!」。オーサ問い合わせは記録社 (☎03・388・0719)

くらしをいとおしむ

子どもにくらしを学ばせたい

— 人とのかかわりの中で育つもの —

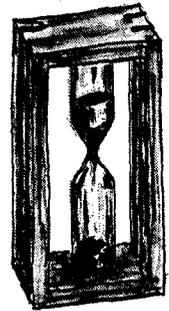
私はかつて家庭科は、「家庭の中で人間がいかに育つか、その育ち方を追求していく教科」であり、その柱として、「家族の健康安全」と民主的な家族関係」を挙げてきた。そして、家庭の中で人がより良く育つためには、家庭科は、単に五・六年だけに止まらず、低学年から必要であり、発達段階をふまえたその内容検討を主張してきた一人でもある。

その考え方は現在も変わってはいない。しかし、ここ三年特殊学級を担任し、障害をもった児童や、深い苦悩を抱えておられる親さん、それをとりまく人々に接するにつれ、「人とのかかわりの中で育つもの」についてもっと見詰め深めたいと考えるようになった。

二、人とのかかわりの中で育つもの

野原先生へ

家内から、M子の電車通学の計画を聞いたとき、私は一瞬耳を疑いました。それは私の想像をはるかに越えていたこと



野原 春江

一、はじめに
だからです。しかし、私の気持ちは、すぐ賛成と定まりました。何故なら学校側とりわけ担任の先生に、より大きな負担をかけるというときどいさえ除けば、M子にとって、これ程スケールの大きな教育実践の機会はないと思っただからです。親はもちろんですが、先生や同級生、それに有縁の人々の協力なしにはできないという意味においても、画期的な出来事だったと思っています。

毎日、勤めから帰って、M子の通学の様子を家内から聞くのが楽しみとなっています。何故なら、話の内容は、常にM子が生々として帰途についているということであり、ここまですべて御努力いただいた教育者の確かな目と決意に、改めて感謝する次第です。

自ら考え、創造してゆく能力に欠ける宿命的な子には、例え不安や迷いがあるうと、訓練させ、模倣させ、繰り返して繰り返して習慣とさせる、外からの強制力が必要だと思えます。白状致しますが、この計画が始まって間もなく、会社をさ

ぼりまして、一度だけ、揖斐駅にM子を迎えたことがありません。数百キロの旅をして帰ってくる子を持つ心境でした。まだ慣れていなくて、ぎこちない様子で電車を降りてくるM子を見ながら、その表情に生気が漂うのを私は見逃がしませんでした。

その時ふと思いました。普通の子に十の可能性があれば、M子にもM子の十の可能性がある。その可能性をひき出してやることこそ、心ならずも不幸な子を、この世に送り出してしまった親の責任である！

今後共よろしくお願い申し上げます。

M子の父より

この手紙は、一昨年十一月中旬、当時一年生の彼女が、やっと電車で帰ることができるようになったころ、彼女の父親からもらったものである。

この手紙に接した時、私は教師になって最大と言っても良い程の感動を覚えた。それは私の行ったほんのささやかな実践が、こんなにも親さんにとって重大なものであったことを知らされると共に、この手紙の内容から、特殊教育のねらいを改めて教えられたからである。そして、こうした子の将来や、親さんの気持ちや想う時、担任としての自分の責任の重さを、ひしひしと感じた。

(2) M子を自立させるための一方策

M子はダウン症の子である。ダウン症としては比較的軽度であるが、ダウン症特有の、骨の柔らかさからくる歩行困難、舌が長いため言葉が話せない、といった障害をもち、知能はIQ五十前後であ

る。

彼女が一昨年四月、一年生として入級した当時は、歩くことはできたが、階段の登り降りは介助が必要だった。又、話せる言葉は、「オカサン」「センセ」の二語で、他は何を言っているのか全く理解できなかった。

そこで私はまず、用便、給食、衣服の着脱、階段の登り降りの訓練など、周辺生活の自立への指導をすすめた。

更に、学級の健康観察カードを保健室へ持って行く仕事を位置づけてやらせたり、道の歩き方の指導もしてきた。

彼女は、ダウン症特有の人なつこさがあり、ほほえみかけたり、話しかけたりしていくので、普通学級の子たちからも、かわいがられている。そこで、今一歩行動範囲を広げ、社会性を培い、自信をもたせたいと思った。しかし、隣の町から母親が車で送迎するので彼女は一人で行動したことがない。そこで、思いきって手離し、一人で行動させることにより、より自信をもたせると共に、このことを契機として、生活の他の面でも自立を促したいと願った。

学校から乗車駅までは近く、降車駅は終点なので、事故や迷い子になる危険が少ない。そこで、一人で電車を使って帰らせる決心をしたのである。どのような経過をたどったか、表でごらんいただきたい。

彼女は言葉が話せないという、致命的な障害を負っているし体も小さく弱々しい。だが、計画通り、一人で電車に乗って行けるようになった。このことから彼女にとって、又、母親や私にとっても、多くのものを学ぶことができた。

S 55 11/1 ~ S 56 2/28 3/1 ~ 3/25 4/7 ~ 現在

- 北池野まで菊子と行かせ一人で電車にのせる。
 - ・次の日の朝、前日のようすをたしかめる。
- 3時の電車にのせるので3時半までは、母親からの連絡がくるまで心配である。
- 時々M子を先頭にして、駅まで歩けいこをした。
- 失敗もなく、うまく乗っている。

- 菊子を学校に残して、一人で行かせる。
- あとからついていって見とどける。
 - ・駅で他の人に「イビ」「イビ」と話しかける。
 - ・電車が来ると一番前まで走って行つてのる。
 - ・他の人がだれもいないと不安そうにキョロキョロしている。

- M子を一人で行かせる。
- 私は教室で親からの連絡を待つ。
- 4月7日以後現在までのうち6回、北池野駅でわからないことがあった。慣れてのんびり行くためのりおくれた。

- 揖斐駅でのおり方はだんだん上手になるようです。
- 「M子が先生になって、みんなを駅までつれていった」と話しますが本当でしょうか。
- 毎日他の人に話しかけます。

- 母親が揖斐駅に着く時間がおくれると、おとなしくベンチに坐って待っています。
- 駅の人たちともすっかき仲よしになり、声をかけて下さったり、M子も手をふったりします。

- いつも揖斐駅でおりのおばあさんと仲よしになり、よく一緒におりてきます。
- うちでのお手つだいや、するばんもよくできるようになりました。

- 授業中もハイハイと手をあげてよく話す。そして、一生けんめい話すが、残念ながら、言っていることがよくわからない。

- 「それから…して、そして…で」といった接続詞がよく出るようになった。
- 学級の友だちの名前がだいふはきり言えるようになった。

- いろいろなことばがはっきりしてきた。学校のことをうちでよく話し、内容も正しい。

① M子が学んだこと・成長したこと
 一人で電車に乗っていく過程で、駅員さん、車掌さん、一般の方々がとても温かく見守り手を貸して下さった。それに対して彼女は、言えない言葉で精一杯反応している。

人なつこく笑いかけたり、手を振ったり、挨拶したり、一般の人々への気持ちよい接し方を身につけていった。又、このように、他の人々との交流によって生じた自信が、彼女の言葉を多くしていった。そして、話そうとする意欲ができ、うちでも学校のことや、電車でのことを、よく話すようになっていった。

② 母親が学んだこと
 M子と他の人々とのかわりを通して、こうした障害を持った子に対して、温かく接して下さる方が多いことを知り、又、彼女が短期間に通えるようになったこととあわせて、意を強くしたようである。れんらくノートに「M子が皆と同じように手を挙げて話をするなど、入学当時は思いもかけなかった事ができるようになりました。思い切つてこの学校へ入学できて本当によかったと思います」と、記している。

実践経過表

日	S 55 10/15	～	10/21	10/22	～	10/31
計画とその記録	<ul style="list-style-type: none"> ・信号の渡り方 ・改札口の通り方 ・電車ののり方 } を指導			<ul style="list-style-type: none"> ○北池野まで菊子(3年)と一緒に行かせ、一人で電車にのらせる。 ○私は、彼女の50m程後を、電柱や車のかげにかくれてついていく。 ○信号の渡り方、道の歩き方も上手にできる。「大垣行」が来ると、後にさがって見送り、「揖斐行」が来ると菊子が教えてM子に乗せた。 ○母親と連絡ノートを通し連絡をとり合う。 		
家庭からの連絡	<ul style="list-style-type: none"> ○元気に電車からおりてきました。改札口がわからなくて迷ったようですが、手をあげたらみつけて走ってきました。泣いていなくてほっとしました。 ○中年の主婦の方と一緒にニコニコしておりました。 			<ul style="list-style-type: none"> ○だいぶなれた様子です。 ○荷物をおろしている車掌さんと、何か話しながらおりてきました。 ○車掌さんに「バイバイ」と手をふっておりてきました。 ○日曜日に学校から駅まで歩かせてみたら、一人でよく行きました。 		
ことば	<ul style="list-style-type: none"> ○となりのおばあさんにカバンを持ってもらって「ありがとう」「さようなら」を言った。 			<ul style="list-style-type: none"> ○朝の会で、きくちゃんと電車にのったことをしきりに話す。「でんしゃ」「おばあさん」のことばがよく出てくる。 		

⑧ 私が学んだこと

彼女の行動や成長の様子を見て、教育とは見通しをもち、危険のない計画を立てたら、思い切って飛躍して見る必要があると思った。

彼女の後からそっとついていく時、電柱のかげや車のかげにかくれている私の姿を見て、まわりの人々が、不審そうな目で、ジロジロ眺められる。しかし、私はそうしたまわりの目を気にしないで、ひたすら彼女のことだけを考えるよう努めた。教育とは、その子と同じ道ゆきをすることだ。

それは技術ではなく哲学だ”と、かつて教えられたことばを思い起こす。

他の人がどう見ようと、その子と共に歩んでいく時、彼女も成長するし、私も又多くのことを学ぶことができたのである。

三、人とのかわりを学ばせる

あれから、まる二年の歳月が流れた。彼女は、「せんせ さようなら」と頭を下げたり、時には、両指をまぶたに当てて「バイチャ」と微笑んだりして、確実に電車に乗って行くことができる。今では、よそのおばあさんや駅員さんと、すっかり仲良しになって、言葉を交わし合っていく。その中

で言葉が増え、自立心が培われていった。

これは、特殊な例であるかもしれない。しかし、彼女の成長の様子を見、更に、まわりの人々が、彼女を中心に温かいやさしい心を寄せ合っている姿を見るにつけ、くらしを学ばせるとは、もっともっと、人とのふれ合いを大切に、自分がどうかかわっていくのかを知らせることだと思ふ。

かつて、学校の近くにある老人ホームを、学級会活動の一環として、定期的に訪問していた時、当時四年生であった児童は、はじめは、「気の毒だから慰めてあげる」という発想であったが、話し合いや訪問の回を重ねるにつれて、「自分たちのためになることだ。自分の心が変わってきた」ことに気づき、家の近くで働いてみえる老人に、すすんで声をかけたり、見知らぬお年寄りに傘を貸したり、行動する子に変わってきた。

家庭科の中で、生活者として消費するくらし、生産するくらしを学ばせることはもちろん大切であるが、その底に流れる人と人とのふれ合いや、かかわり、特に弱い立場の人とのかかわりを学ばせることも忘れてはならないと思ふ。

いやむしろ、そうした弱い人たちにとっても、何が安全か、どんな形に作られている物が良いかを常に見分け、要求していく目を育てていきたいと思ふ。

あり余る物と、自己中心的な考え方が優先してきた社会の中で、もう一度立ち止まって、人と人とのかかわり、そして、その中で自分が育っていく、自分を育てていく、そんなくらしを見つめてみたものだと思う。

(岐阜県揖斐郡池田町立温知小学校)

ひき続き “We” のご購入を

どれだけの方が読者になって下さるか——創刊の時の不安と期待。いま、同じ思いで心が昂ぶります。

“We”は、おかげさまで9月には、当初の予定部数を越すことができました。発刊を、好意的に報道して下さったマスコミ関係の方の力も大きいのですが、何よりもまごころでご支援下さったあなたのおかげです。ありがとうございます。

「We」という名の炎をともし、強め、広げていくのは、あなたであり、そして私たちです。いつかこの炎が荒野の枯草を焼きつくし、新しい芽が萌え出ることを願い、信じて、支援と連帯の輪を大きくして下さいよう、心から訴えます。

“We”発刊時のアピール文を、祈りをこめて再びあなたにお届けします。

私たちの願いとは裏腹に、日本の現実は当時よりいっそう憂うべき状況にあります。どうぞ、“We”と共に考え、行動するために、いつまでも仲間であって下さい。

2年目の“We”は、定価据置きで増頁し、男と女の自立を、差別のない人間らしい社会の構築を、生活と教育を私たちの手にとりもどす“つぶて”としてがんばっていきます。

巻末の挿替用紙をご利用の上、**いますぐ2年目のご予定を!**
あなたのお仲間へぜひおすすめ下さい。
新しいチラシもお送りします。

新しい家庭科を創るために

*** 小学校では *** 名取 弘文

ミシン・卒業製作

三学期も二月となると、なんとなく浮足立ってくる。六年生の気の早い子どもはサイン帳を友達に回して、メッセージを集め出す。教師のほうも卒業式に向けての打ち合わせなどの会議が多くなり、文集の印刷や書類の作成が続いて忙しくなってくる。授業も時間がたりなくなってくるようで、「家庭科の時間くれない?」と聞いている仲間もいる。「家庭科を軽視している」と怒らなければいけないところだが、そうそう原則ばかりともいえない。それにつね日ごろ、ぼくの都合で授業がつぶれたこともあるし、二時間の予定が三時間になったこともある。先方の都合に合わせてもいいではないか、とぼくは思っている。怒るのは子どもで、楽しみがなくなっただけで算数のテストだったとブツブツいっている。

五年生のほうは、教科書準拠で、「ミシン」である。子どもと道具の出会いはすでに書いたように人類史を見るかのようで

あった。畑を掘るのに板や棒を使ったり、小麦やそばを粉にするのに金づちで叩いてみたりして、スコップや石うすのほうが便利で能率もあがることに気がついていく。ノコギリをナタのように使って歯をだめにしたりしながら、ノコギリは引くものだと気づいていく。また、スコップの形が、どうしてあの形をしているのかに気づき、石うすが押しまわしであることのわけを考え、ノコギリの歯が左右にそっている(あざり)ことにうなづく。子どもたちが体験してきたことが知恵となって道具の使い方を覚えていくのである。教師がスコップの形と使い方などをいちいち教えなくても、子ども自身が解決するのである。

ところが、ミシンは機械である。子どもたちの体験だけでは仕組みと使い方がわかるようにはならない。そこで説明と訓練が必要になる。回転運動が針の上下運動にどう伝わっていくのか、上糸をスミーズに引っ張るためにどういう仕組みがしてあるか、上糸と下糸はどうやって絡んでいくのか、などと構造についての疑問をもたせ機械について考えさせることは、難しくはあるが科学との出会いとして大切なことだとぼくは思う。そこを抜きにして、たんに機械を使いこなせばいいとすると、極端にいえば、労働することによって疎外されるという資本主義の問題にいつてしまうと思う。納得できないままに生産を強いられるのでは喜びは失われてしまう。

——などと書くと、もっともらしいが、早くいってしまうと、ぼ

くは家庭科の教師になるまで一度もミシンを使ったことがなかった。親の家にはミシンはあったし、母や姉が使っているのは見ていたし、いとこの家は縫製工場をしていたのでプロの仕事ぶりも見ていた。けれども、いたずらをしてみようとか、使ってみたいと思うことはなかった。高い機械をいじって壊しては大変だし、ケガをしては困ると思っていたのである。

またミシンを使う必要もなかった。服は店で買えば十分であったし、袋なども既製品で間に合ってしまう。家事の中でもっとも産業化されているのが衣領域なのである。生活レベルでやることは、ボタンつけくらいであるべくにとり、ミシンはまったく不要なものであった（これはほくだけのことではなく、ミシンを結婚の時に買って、たいして使わずに押入れの中にしたままという人も多いようだ。そういう意味では、ミシンは甘い結婚生活を売るイメージ商品なのではないか）。こう考えていたので、小学校でミシンをやることはない、正直にいうと思っているのである。ミシンの使い方にはたくさん時間を費すより、手で縫うこと、編むことをやったほうが良いと思う。

と、ブツブツいいながら、ミシンへの取りくみが始まった。「どうしよう、困ってしまう」と嘆くほくにヒントを与えてくれたのは、お正月に遊びにいった雑誌編集者の夫妻であった。「ミシンを一台壊してみればいいよ。そうすれば構造がわかる」と彼がいえば彼女のほうは「学校に十台もミシンがあれば一台くらいは調子のいいのもあるでしょうから、それを先生が使えばいいのよ」と教えてくれる。なるほど、そう考えれば気が楽になる。

三学期になってからは、用事で学校に行く母親をつかまえては家

庭科室に寄ってもらい、ミシンの使い方を教えてもらうことにした。上糸のかけ方、上糸調節のしかた、ボビンに糸をまく、ボビンに糸を入れるなどを何人かに習った。なんとかなりそうだと思いがた、ミシンの点検をして驚いた。なんと、メーカーも機種もバラバラなのである。上糸調節が前についているタイプと横についているものがある。バック縫いのやり方もいろいろである。調べているうちに頭が痛くなってしまった。それに、どうみても、壊れているものが二台もある。そこで、校長に「ミシンの修理ですが、予算をとっていかなかったんですが、やらないとだめですよ」と言う。校長のほうもミシンに詳しくはないし、ほくに技術があるとは思っていないから、修理にOKを出してくれる。そこで、仲間にいわれたようにそのうちの一台を分解してみる。「へー！ここはこうなのか」「なるほどミシンを発明した人はアタマいい」と感心しながら、あっちこちのネジを外してみると、壊れている部分が見つかる。折れるはずのない軸が折れていたり、ストップモーション大ネジに糸がからみついていたりした。軸の折れているほうはミシン屋さんで修理してもらうことにして、分解したままにしておいた。子どもに構造を見せるのにちょうどいいからである（直せなかったのではありませんよ）。

子どもたちはミシンをやると聞いて大喜びである。幼な児が小学校に入学するのを喜び、三年生が毛筆習字やソロバンに歓声をあげると同じである。そういう教材に接することは自分たちの成長を確認することになるからだ。

授業のすすめ方は教科書準拠

①ミシンの頭部の出し方・しまい方

② ミシンの頭部の絵をかく。おもな部分の名前を覚える
③ 足踏みの練習をする。

④ ボビン、ボビンケースのつけ方、針のつけ方を覚える

⑤ 上糸をかける。下糸をつり出す

⑥ そうきんやふきんをぬう

⑦ 故障の原因を見つける。修理する

実際に、ミシンを使いたすと、予期しないことが続出する。トランプルでいちばん多いのは、逆回転させてしまつてカマに糸をからませてしまふケースである。ちゃんと回転しているのか、逆に回っているのかに気を配る余裕がないのである。「針が動かない！」と叫び声があると、だいたいこれである。「カマのそうじをして」と指示する。と、分解してからまた糸を取り除くところまでではできても、カマをもとどおりにできなくて、悲鳴があがる。ストップモーション大ネジをゆるめてしまつて針棒が動かなくて騒いでいるグループ、ベルトを切つてしまふグループと家庭科室は騒がしい。ぼくはといえば、ドライバーとペンチ、千枚通し、試し縫いの布を持つてあつちこつちのミシンの修理である。発狂しそうになることもある。「いくらやつても縫えない」というグループに行つてみる。上糸のかけ方を調べて、上糸調節、糸とりバネ、てんびんにきちんと糸が入っていることを確かめ、カマを調べて「これでゼツタイ縫える」といばつてやってみると、なぜか縫えない。おかしいな、こんなはずはないのにとメガネをかけて、もう一度やってみるけど、ダメである。「わかった、このミシンには呪いがかかっているんだ、ほかのミシンを使おう」というと、子どもはシャーと白い目でぼくを見る。教師のメンツがつぶれてしまふ。子どもを追い払つて、よ

くよく調べてみるとなんと！針が左右反対になっていたのである。もう一台は「針が右、左にブレる」という。やってみると、本当に右、左と針が動いている。宿酔のせいかと思つて、水を飲んでやってみても同じ。あとで同僚に聞いたら、ジグザグミシンであつた。それ以来、「ミシンは直線縫いだけで十分。ジグザグもコンピューターミシンも絶対不必要」とぼくの考えは固まつた。

ミシンで男の家庭科専科が悪戦苦闘している話はずぐに親に伝わる。夕食の話題にはもつてこいなのであろう。そのおかげで、いいこともあつた。一人の父親が、ミシンのセールスをしていたのである。ある日、その人の子どもが「土曜日の午後に行くからつて言つてたよ」と伝えてくれた。そのお父さんは技術屋さんと二人でできた。電動ミシン一台と足踏み二台をおみやげに持つてきてくれた。

ついでに、全部のミシンを点検してくれ、壊れているところを直しベルトの予備をおいていつてくれた。地域の人々の知恵と生活が集まるところが学校とぼくが思いたくなるのは、こういう時である。このお父さんたちは、ぼくに説明してくれながらサッサと糸を通していく。「さすがプロ！」という感じである。

そこで、ぼくも子どもたちに話しながら、糸をかけてみるが、なかなか糸はうまく通らず、子どもに「ヘター！」「老眼」とヤジられることになつてしまつた。

ミシンで縫つた雑巾は卒業式をむかえて大そうじをするのに使うことにして、早くできた子どもは手さげ袋、つりざおの袋をぬうことにした。それもできた子どもは、六年生の初めにやるエプロンづくりにとりかかることにする。

その後も、ミシンをくれる家は多く、中にはほとんど使つていな

いままホコリをかぶっているものもあった。今年は、五年生に車イスの子もがいるので、電動ミシンを購入した。コントローラーを肘で押すと動きはじめ、もう一度押すと止まる機種は彼のために購入した。ついでに、電動ミシンを五台買った。逆回転しないので使いやすいという長所もあるが、足と手と目と頭脳を同時に働かすという足踏みミシンのほうが子どもが発育には向いていると思う。足踏みミシンが使える子どもは電動も使えるが、電動が使えても足踏みは使えないでは、せっかくな時間をかけて、わざわざ学校でやる意味は半減してしまふ。

六年生、卒業製作として

六年生のほうは、卒業製作をすることにした。

課題は、つづれ織りでマフラー・テーブルセンター・ベストを作る、テーブルセンターやハンカチに刺しゅうをする。丈夫な椅子を作る、校庭に小屋を作るにした。

つづれ織り(ベスト)。用意するもの、厚めのベニヤ板、クギと金づち、毛糸(木綿紐、布を裂いたものでもよい)。やり方、身体サイズのズを測り、ベニヤに線を引く。1〜1.5センチの幅でたて糸を張るクギを打つ。Vネックのところを気をつける。たて糸を張る。横糸は杼に巻いてたて糸の間をくぐらせる。目のあらい櫛で横糸を下につめる。糸を換える時は三センチくらい重ねる(さしこの時と同じ)。Vネックのところは片側ずつする。表側と裏側ができたら、ぬい合わせる。

小屋造り(たて穴式)。中心の柱を立てる。四方から柱を中心に寄せる。縄でしぼる。細い木をまわりにしぼりつける。ワラやスキを束ねて壁にする。

やり方を簡単に説明して、やりたいものを選ばせる。条件と用具だけを留意しておけば子どもは自分たちでなんとかやるものであるとぼくは思っている。あとは子どももまかせとした。が、そこでもぼくのほうが固定的な観念を強くもってしまっていて、それがマイナスに働く。つづれ織りや刺しゅうは女の子がやりたがるだろう。椅子や小屋づくりは男の子がやりたがるだろうと予想してしまうのである。そして、女の子に「つづれ織りをやれば」と言ってしまう。男の子に「小屋づくりをやりなよ」と言ってしまう。そうすると、女の子は反発して「いつも言っていることと違う」「どうして女子は小屋をつくってはいけないのだ」と口々にいう。ぼくは平謝りをするようになる。

そんなこともあって、小屋づくりは全員でやることにして、そのほかにつづれ織り、刺しゅう、椅子づくりをすることにした。小屋を立てるのに使う柱は、学校の近くの廃材置き場からもらってくることにした。もらいものは、マーレードの夏みかん、畑づくりの牛フン、古畳となれているので、子どもも姿には思わなくなつた。中心の柱にしたのはハリの廃材である。直径三十センチ、長さ四メートルもあるものだった。みんながかついで運び、深さ一メートルほどの穴に立てる。二時間がかりの工事であったが、みんな汗をかき、力を出し、満足していた。次の週には四方から柱を寄せ、縄でしぼりと計画を話してその日の授業を終える。ところが、翌週になってぼくはびっくりしてしまった。なんと、小屋が出来上がったのである。聞いてみると、土曜日の午後と、日曜日の一日を使って、みんながやったというのである。小屋のまわりには排水溝まで掘ってある。ぼくはうれしくなってしまう。いまの子どもは創

造性がない、協力しあわない、根性がない、などといわれるけれども、この子たちは自分たちでやりとげてしまったのだ。もちろん見た目にはボロ小屋である。繩のかわりにビニール紐が使っていたり、カヤがないので枯れたススキを使っていたりするけれども、中心の柱はしっかり立ててあるし、排水の設備までしてある。立派なたて穴式住居なのである（この小屋は春休みごろに学校の近くに放火魔が出て、万一火をつけられると危いと近所から苦情がたくさん出たために、四月の下旬にこわしてしまった。そのことを知った卒業生にずいぶんぼくは怒られてしまった）。

椅子づくり、つづれ織り、刺しゅうもそれぞれ楽しみながらやっていた。クラスでいちばん人気のある男の子は、女の子に刺しゅうのやり方を習いながら、一応マジメにやっていたが、六時間かけた彼の作品は、ハンカチにTSUNODAと苗字を縫いつけただけであった。でも、それはそれでいいではないかとぼくは思う。卒業をひかえて、男の子と女の子がいっしょに小屋づくりをしたのが意味あるように、いろいろしゃべり合うのも大切なことなのである。しゃべる中から、男の子のことを知り、女の子のことを考えるきっかけが出てくるだろうし、かすかな恋心も芽生えてくるのだろうから。

つづれ織りのほうは、なかなか大変だった。楽しみながらやっていたので、間に合わなくなってしまうのである。おまけに横糸を強く引っぱるとたて糸が引かれて幅が短くなってしまふ。横糸を引かないとたるんでしまふ。途中で全部ほどいてやり直したりして、卒業式近くなつてからは夜中までやっていたという。その努力があつてか、出来あがつたベストはとても暖かで色あいもよかつた。記

念にちょうだいといったが、誰もくれなかつた。

三月になり、いよいよ最後の授業である。食べ物をつくりたいという声にこたえて「クッキーづくり」をする。作り方を説明し、小麦粉、バター、砂糖、タマゴを渡し、器具を運ばせる。出来あがるまでの二時間、ぼくはこの二年間の彼らとの付き合いを思い出している。とっても良かったと思う。家庭科が男の教師と知った時の彼らのどよめき。勉強ができる、できない、何年生の時にどんなことをした、家庭が崩壊しているなどの余計なデーターを持っていなかつたために素顔の彼らと出会えたこと、野草をとりに行つたこと、家系図を書いたこと、夏休みの宿題の料理づくりのこと、父親が時間をかけて裁縫箱に彫刻をしたこと……わずかに週に二時間の家庭科である。でも、それだからこそ、子どもたちのすばらしさに会えたのではないだろうか。教師のぼくのほうに変な自信がなかつたから子どもたちの知恵が自由に出たのであろうし、たくさんの人たちに助けてもらえたのであろう。ありがとう、子どもたち。ありがとう、たくさんの人たちの生活と知恵、そして、**We**の人たち。

子どもの感想から

国尾信広

ぼくはたべ物とか作るのは、きょうだから家でもよくやっています。

うどんを作った時は、これでたべられるかなと心配でした。が、たべてみると、ちょっとかたかつたけど、まあまあおいしかったから作ってよかつたです。

時々、先生が話をするのをきいていると、つまらなくなつてあんまりきいていませんでしたが、よくきいていると、生きてきた人の話

をちゃんと話していました。今、考えると、さびしいです。だって、ノートに字を書いていると、ひらがなを書かずにかん字にしないという先生がこいしいです。

川野文子

とにかく楽しかったです。とってもよかったです!!「はんごうすいさん」から始まって、パンづくりやつげ物、カレーづくり、何だか食べ物ばかりみたいだけど……

でも、エプロンや手さげづくり、卒業製作のししゅうなど、しめ切りに間に合わせようとして明け方の三時くらいまでおきていてやったものもあります(そのかいあって、ステキなのができた。うれしい)。みじかい二年間だったけど、とても沢山のことを覚えたような気がします。卒業したら、中学一年生として大好きな家庭科をがんばります。わからない所があったら、また聞きに來ます。よろしく。それから、来年は妹が四年生。弟が一年生としては村岡小学校にお世話になります。その時は、よろしくお願いします。

浜中卓治

僕は五年生から六年生まで二年間家庭科を勉強して家で合成洗剤などマレモン等は悪く良くないと言った。

母さんも「うるさい!」とブーブーブーブーと言っていた。

一番役だったのは合成洗剤のことだ。我々浜中家では僕の血と汗と涙と肉体労働で母がやっと洗たくの時粉石けんをつかってくれたことだ。これも名取先生のおかげです。

山中真紀子

五年の時から家庭科をはじめて、もう2年。とてもみじかい間でした。

週2時間の勉強。先生の用事でつぶれることもありました。

でも、とても楽しい家庭科でした。

教科書に書いてないようなことも習いました。ぞうきんぬい・エプロン作り・うどん作り・マレード作り・さしこ・しほりぞめ・クッキー作り。

みんな、みんな楽しくできました。

家庭科の時間にこうゆうことをやったことがあります。

『家庭科の時間』という題で、家族とはなにか? をやりました。いろいろな意見が出ました。その中で先生は、親子とは……家族とはいろいろ話してくれました。私の耳にのこった言葉「最近では、りこんがふえていて夫婦をとりけす人がいる。りこんしてもけっこんするグレンドファミリーがふえている」といった。グレンドファミリーはじめてきいた言葉だった。けれどこの言葉は心につよく心にきざみこまれた。私の家では考えられない言葉だが忘れてはいけないう言葉だとも思う。家庭が平和でいられるようりこんなんかしなくすすむようしたい。

先生、卒業なので本当のことゆると、男の先生が家庭科をおしえるなんて少し不安でした。でもおそわって名取先生のよさがわかり不安も今は、おそわってよかったというようになりました。

私はもう卒業だけど先生忘れないうね。急にかんけないことになっちゃった……。

本当に楽しかった2年間。知らず知らず家庭科をまつようになつた私。

私が家庭科が好きなのはきつと名取先生のおかげだと思います。

ありがとう。

ぼくは、四年生の時、家庭科という勉強はぞうきんやエプロンなどを作って先生に見せて、点をつけてもらうだけかと思っていたけど、ぼくが思っていたこととはぜんぜんちがってパン作りやうどん作りやクッキー作りが一番印象に残っています。

だから、五年生の時から急に料理するのが、好きになりました。後、四年生の時までは、くつ下の穴をお母さんにぬってもらったのですが、今では、自分から進んでぬうようになりました。だから、家庭科を教えてもらって、ほんとうによい勉強になりました。

後、名取先生は、家庭科はあまりむいていないと思う。頭が悪いから……。

名取先生は、子供のめんどろを見るのが、とてもすきだから、うち園の先生とか、一、二年生のあいてをするのがいいと思う。

山川まどか

家庭科は、人生科である——。これがとても強く心に残っています。私は家庭科が好きです。訳は、単に好きな料理が出来るからでもあります。が、ぼく然とした形で人間（家庭・家族）が分かる気がするからです。

そんな家庭科の中で一番印象に残った時間と言えば、溝上泰子先生の話聞いた時。生きる事が、私に近くなった様な感じのする授業でした。

とにかく家庭科は、とても楽しいです。まず、マーマレード作りで、とうふやカレー、野草のおひたし、うどん作りに、はくさいをつけてみたり、ねぎを植えたり、クッキーやお団子や、おにぎりに

いろいろな料理したし、さしこや小さなふくろ、エプロン、それにミシンの使い方、プラグ・コンセントの仕組みなど。とにかく楽しかった！

でも、先生は、私達に何を教えてくれるのだろうと思ったことがあります。もちろん、「家庭」内についての勉強だから、例えば、さいほうや料理なんだけど、それだけではないと思いました。生きる事に始まって、食べる——料理する、などと言った生きる事に基づく教科だと思います。

溝上先生の授業のあった日。あの日に、「家庭科は人生科だ」と聞いて、その直後にはわからなかったけど、今頃、やっとわかる様になりました。私の解尺トビはこうです。

人が生きるには、まずその人を生かす人々が居なければなりません。その人々は私達をとりまく家族であり、その家族は、すなわち家庭である。家庭で生きるのが、生きているのが、生活していることで、その事を勉強するのが家庭科、イコール人生科なのだ、と。だから、国語、算数や図工などよりも、家庭科こそが生きる事を知る勉強だと思って——何てったって、生きる源は食生活にあるもの。（つまりは料理）それをやるのは家庭科だもの。

不服に思うのは、家庭科の時間が少ない事。もっとあってもいいんじゃないかなあ。ま、よゆうがないからダメ、かな？ だけど、私はもっと家庭科を勉強したかった。

一言。生きる事について再確認する時間を作ればいいのになあ。

（藤沢市立村岡小学校）

新しい家庭科を創るために * * * 中学校では * * * 熊本県家庭科サークル
徳田桂子・稲田加代子

保育学習でつけたい力

一、はじめに

数年前までの私たちの保育学習をふり返ると、教科書に忠実に教えることになんと一生懸命だったことか。もちろん、その中身が生徒の実態にない、生きぬく力となるものならば問題はないのだが。

教科書の保育の内容はまさに育児書だと思ふ。教科書にそって授業をしていたころ、生徒は、「おやつを作って食べたらいいかった」「楽しかった」「もっと作りたい」「ぬいぐるみを作った机の上に飾る」などと、幼児とのかかわりはぬきにした感想を述べていた。保育学習を本当に自分のものとして、そこから問題意識をもち学ぶ姿とはほど遠い。

しかし、それは生徒たちの罪ではない。教える私たちに問題意識がなかったのだから当然である。私たちが変わったのは、県の家庭科サークルに加入して仲間の教師たちの実践を知ってからである。

そしてさらに、県教研や全国教研などをおしてであった。

保育はやりようによっては生命の尊さをふまえてこれから自分はどう生きるかをしっかり考えさせることのできるすばらしい教材だと思ふ。そのようなことに気づいた私たちは、教科書を手離す決意をした。自主編成の教育実践に取り組んだのである。

(その一) 女子教育に視点をあてて

徳岡桂子

本校の三年生は、三クラス共に男子が圧倒的に多く、何をするにも優勢である。子供たちは、「男は社会に、女は家庭に」という考え方が強く、特に男子にその傾向が著しい。女子は理想の男性像として、「たくましく思いやりがあり、女性をリードしてくれる人、包容力があり、女性を守ってくれる人、度胸、根性、信念がそろっている人」と答えている。男に強さを求め、依頼心が強いといえる。逆に、男子は理想像として「明るく可愛い人、素直でやさしく思いやりがある人。料理上手で男性につくしてくれる人」と答えている。強くたくましい女性は敬遠気味である。

また、子供たちは、働くことに対して非常におっくうがる。特に男子は面倒な仕事や、いやなことは女子に任せがたがる。

こんな子供たちの状況から、私は、今までの固定的な役割分担意識をなくし、お互いを理解し助け合う仲間づくりをして、更に豊かな家庭生活、社会生活へと発展できる力を、子供につけたいと願っ

て、共学で保育の学習を行った。

一、実践

1、保育学習と共学に関するアンケートを書く

設問の内容は、男らしさ、女らしさとは。理想とする男性(女性)とは、女性が家事以外の仕事を持つことについて、男性の家事・育児の担当についてなどである。

資料1、女性が働くということについて

△女生徒▽

④女の人が働くというのは大変よいことだと思う。スウェーデンなんか、お母さんが赤ちゃんを産んだら、今度はお父さんが育児休暇をとって赤ちゃんの世をし、そのかわり逆にお母さんが働いていました。日本はスウェーデンの逆です。男子の中には、家庭的なことがらはすぐ女子に任せようとする考えがあるので、家庭の中のこともっと身につけてほしい。こういうことから男性は女性の立場というものをもっと理解してくれるのではないかなあと思った。

⑤家庭内の仕事をきちんとやり、そして外の仕事に手を出していくというのならかまわないと思う。女性だから働いてはいけないとか家の仕事だけでよいからちゃんとしろ、などという考えはまだまだ女性と男性を平等と見ていない考えだと思う。女性にもいろいろ才能があるのだからどんどん働くべきだと思う。しかし、その女性が結婚をして家庭を持った場合は、外の仕事にばかりあまり熱心になり過ぎず、難しいと

は思うけど両方を両立させていかねばならないと思う。

△男生徒▽

④今、女性が働くことはあたりまえになっているが、それでいいと思う。家でぶらぶらして何もしないよりずっといいかもしれない。しかし、女性がなぜ働きたがるのかが分らない。男性が働いて金をかせぎ、女性がそれをやりくりしながら生活する。それでも十分ではないかと思う。自分としては、結婚したらそういう生活を営みたいという気持ちがある。で特にそう思えるのかもしれない。しかし、女性から見ると女性にしかわからない何かがあるのだろう。女性が働くということとはよくもなく、かと言って悪くもないと思う。

⑤男性の立場からいえば、働けば収入が増え家計が助かるが、外で働けば浮気や痴漢や、今はやりの通り魔など危険がいっぱいなので働かない方がいい。ただし独身女性に限れば働いた方がよいと思う。それは社会の厳しさというものを知らない機会だと思うからだ。

⑥そりゃ少しぐらいはいいけど、夫がいるなら夫が仕事から帰ってきた時は、絶対に家にいた方がいい。そしてあんまりきついことはしないでほしいと思う。まあ、少しならいいんじゃないですか。

④のようにスウェーデンのように男性も育児を担当し女性も働けるように、男の子も家庭の中のことをもっと身につけてほしいと書く者がいないわけではないが、極めて少数である。大多数の子どもは、働いてもいいが家の中のことまきちんとしてほしいと、家庭と

仕事という二重の役割をもちながら働いている母の姿を肯定した文を書いていた。

2、生育史を書く

今までの授業の中で私の言葉の端々に「女が働くこと」「家事・育児の分担」がちらちらしていたからであるうか、子供たちが母親から聞いてまとめた生育史には、きびしい条件の中で子を生み育てた母の姿や苦勞が、ひしひしと感じられる次のような文がかなりあった。

資料2、生育史より

・出産当時は、個人経営の小さな会社に勤めていて休暇もなかなかとりにくく、お産のまぎわまで出勤ししばらく休み、その後は復職するチャンスもなく、子どもを育て、子どもが大きくなったら働こうと思っても今度は思うような職場が見つからない。(パートくらいしかない)

・子どもを生んでその後、生活のために働こうと思っていたが、思うように保育所にも入れることができず(個人的に預けるとなると収入から見ても余裕がないので)、結局、主婦業に専念してしまふ。

・二千グラムに足りない、身長四十七センチの赤ん坊は、未熟児のため保育器の中で育てた。個人経営の店で、人手が不足し思うように休めず、つわりがひどかったが無理をして仕事を続けていたことも原因と思う。

3、はたらく女性について

ちょうど、このころ私は佐藤洋子著『子を持つ女が輝くとき』を

読んでいたので、なんとかして『おりない女の子』を育てたいと思った。『生きるために食いぶちかせぐのも、暮らすために食い物作ったりするのも、言ってみりゃ生きる基本、両立できてあたりまえ、男だろうが女だろうが、仕事か家事か片方しかできない奴なんて、しよせん半人前』(この言葉は「週刊ヤングジャンプ」最近号の漫画の女主人公の発言である。世の中少しづつではあるが変わりつつあることを痛感する)ということをやわらせたいと考えていた。授業中の子供たちの作文(資料1)や生育史(資料2)をプリントして配布し、女性が進んで働くことについて話し合せてきた。子供たちは、働きながら子供を育てることは大変だ。しかし働かないと生活していけないんだ。だから、もっと世の中の母親たちが安心して子を生み育ててゆける社会にならないといけないと発言していた。しかし、きつい中で自分も働くとか、妻が働けるように、自分も努力するということに、自分のこれからの生とつなげた次元にまで考えてはいなかった。

次に七十九歳の田中カナヨさんの半生についての聞きとり文をプリントして配布した。これについてどう考えるか、話しあったところ、仕事に生きがいを持っていてとすばらしいと思う。非常に感激した、この人たちが今の日本を築きあげた人たちだなあと思っただと感激する子。たった百円のお金を稼ぐために炭鉱で働いて父母を失くし、結婚しても二度とも夫と死に別れるなんてとてもかわいそうだと同情する子。悲しい生き方だ、全員が団結して仕事に対してもっと楽にしてくれと要求すべきと論評する子。働くのは楽ではなかったはずなのに、今でも働きたいと思ってるなんてなぜだろうか、人は皆平等なはずなのに、あんなことをやらされて、それだけ

にこの人は強い人だと思ふ、となかなか、子供たちの生とつながった言葉がでてこない。

昔の人の話だからかなと思つて、次に進学をあきらめ十五歳で就職、十七歳で結婚、二人の子を生み育て、夫の給料でやりくりし、家庭をきりもりしながら勉強し、やがて無認可保育園の保母となる。保母をしながら読書会に参加し夫が寝てからも勉強し、その範囲は時事問題にまで広がってゆく。よい夫であるとは思いつつも、次第に夫との間に溝ができ、ついには子をおいて離婚する。障害児施設で働きながら、親たちの子育てと子捨てを見、自分自身の子育てと子捨てを考える。「何かをやっていないと生きていけない人間なのです。それなら、役に立つこと、自分を生かせる生き方をしたい」と述べるIさんについての文(佐藤洋子113~116『子を持つ女が輝くとき』)をプリントして配布する。

子どもたちは・夫や子どもを捨ててまで障害児施設で働くなんて気持ちに分らない。・障害を持つ人の為に働くのは偉いと思ふが、夫と子どもを捨てるのはいけない。・世間の目が気にならないのだろうか、でもこのような人がいないと障害児施設は成り立たない。・人にはいろんな生き方があるだろうが、私にはとてもできない。夫や子どもはどうなるのだろうか。夫がその人を本当に愛していたのならむごいことだ。・自分にはまねができない。すばらしい生き方だと思ふ。どうせ働くならやりがいのある……というIさんの考え方は立派だと思ふが、子どもまで手離して……と、自分にはできないとか、逆に自分を生かせる仕事だからといって夫や子どももいることだし、それを捨ててまでもやっていたいのだろうかという疑問、中には批判の気持ちを示す者がほとんどだった。

私は、女性も経済的自立なくしては、真の人間としての独立はないことを理解させたかったし、こんなことをふまえて、女性の真の幸福とは何かを考えさせたかった。しかし、子供たちは、性による役割分担の意識をなかなか捨てきれなかった。男も女も、働くことも、家事・育児を行うのも人間として当然のことと、なかなか認識してくれない。

5、共働きと家事育児

次に、民主的な家事協力のあり方について討論させた。しかし、家事・育児を担当する父親の姿など想像がつかない子供たちは、なかなか自分の役割意識を疑問視しない。サークルで後日聞いた『看護婦のオヤジがんばる』の本など使えばよかったかもしれない。

6、グループ研究

・男女の賃金差、労働時間について・産前産後休暇などの母性保護についての制度・男子の家事協力について・児童憲章、保育所などの実態についてなどをテーマとして、グループ毎に、新聞の切り抜き、図書館の資料、聞きとりなどによって調査し、まとめ、発表させた。

7、性について

省略

8、保育園見学

省略

二、実践を終えて

共学による保育は今年で二年目であるが、ここには初年度のものを紹介した。内容・指導方法とともに苦労した。生徒たちは授業を終えた後、自分を生むために仕事をやめ、そのあと勤めたらパートにしかなれなかった母親、家事・育児と仕事に追われながらも精一杯生きている母親の姿には尊敬と感謝の気持ちをもったものの、

「生きがいの持てる仕事につけるようにがんばりたい」とか「僕もお母さんの手伝いをして、身の回りのことができるようにになりたい」と変身した子はほとんどいなかった。

この点、なぜ甲佐中の佐川先生の生徒たちのようにならないのだろうか。実践の乏しさといってしまうればそれまでだが。

保育の実践をして、子供たちを変えきれなかったのは残念であるが、副産物ともいえる効果があった。一つには食物の共学には快く賛成するが、それ以上の共学には渋りがちだった技術科の教師が、授業中の子供の作文や態度を見て「よかばい、保育も男ん子にもいるばい」と共感してくれたことである。二つめには、私が変わったことである。今年私は、三年生の学年主任なのである。今までの私なら、「副担任が……」と言っていたけれど、自立をめざした保育の、しかも男女共学もした手前、学年主任をせざるをえなかったのである。サークルの仲間たちに「先生が！ 変わるなさったこと」とからかわれながら、こんなにも変容した私、次の実践では、子どもをもっと変えようと今から検討中である。

(その2) 性の問題を通して

福田加代子

昨年、私は三年生の女子だけに自主編成の保育学習を行った。性と生の問題を真剣に考え受けとめ、これからの自分の生き方への布石になった学習ができたところとらえているが、授業しながら、私は、このような学習は共学でやらなくてはと痛感した。生徒の中からも「女子にだけ必要なことではなく男女共に人間として学ぶべき」という発言があった。そこで、本年度は、共学での保育学習にふみきった。ふみきったと簡単に言ったが、正直言ってふみきろうとする

までには迷いがあった。生徒の実態に即している内容であればあるほど、まっすぐに受けとめ考ええてくれるだろうか、男子がかきみだして授業にならないのではないだろうかなど不安がいっぱいあった。しかし実践した今、その不安は杞憂だったと思う。

三、実践

1、保育学習で学ぶことは

2、私の生いたち

1のときに「私の生育史」病気、けが、出産の状態、お母さんの健康、名前つけ、食事の好き嫌い、小さい時の性格などを家の人たちから聞いて作文にまとめてくるように課題にしておいた。聞いた人は、母親が断然多かった。親に聞く中で自分もこんなにも親や周囲の人に苦労や心配をかけて育ったのか、又愛情の中で育てられたのかを生徒は感じとり感想として書いていた。また、友達との生育史を聞き、人それぞれ育ってきた過程を知ること、その友のことをより深く理解できたと言った生徒もいた。

3、男女の性のしくみと生命の誕生

10時間

ここでの目標を次の二つにとりくんだ。

- ①お互いの性を理解し、男女の望ましい関係を考え、協力して人間らしく生きようとする態度を身につけさせる。
- ②一人の人間が誕生するまでの生命の発生を知り、生命の尊さを学ばせる。

④成長―男女の発達

- ⑤女と男の体の違いを知る、月経のしくみ、精子、精通現象、精子の通り道、受精卵、子宮、産道、出産

⑥生命の尊さ

子供たちは、テレビ、週刊誌、雑誌などで性に関する言葉は、よく知っているが、正しい科学的な知識はない。この学習の中で、女性の生理のしくみも正しく教えることができ、後の感想に女性への思いやりの気持ちを書いた男子がいた。

4、子供たちが心身ともに健康に成長するために必要なものは何か

2時間

「狼に育てられた少女」アマラとカマラの資料より話しあい考えさせる。

人が人として育つには教育、しつけ、環境の影響が大であることに気づかせる。そしてその環境を良くも悪くもするのは、やはり人であることをわからせる。生徒たちは、この話が真実であることに驚き、その後自分たちが人として育てられたことへの感謝の気持ちも持ったようである。

四、生徒の感想

・この勉強は、とてもためになった。別にいやらしいとかではなくて、きちんとしたことが覚えられたからです。今十四、五歳で妊娠する女の子がいますが、まだ体が完全にできていないのに、「愛」だとかなんか本心から出た言葉かなんかわからないのに心を動かされるなんておかしいと思う。また、女の子が妊娠するには男の子と接触があったわけだから、そういうことをする男の子もおかしいと思う。この男女の性を学習して、女の人がとても大変な仕事をやらなければならぬということがわかった。もっと男女とも性を理解して尊敬しあうことが大切だと思います。

・人の体というもののは、こども精密にできているのかと感心しました。男女の身体の違いは、ただ単に性器だけかと思っていました

が、まだまだいっぱい違うところがあることがわかりました。男の方は、だいたい自分にあるからわかってたんですが、女の方は初めて習ってちょっと恥ずかしかったです。それから自分たちの生命がこんなかたちで生まれてくるとは思ってませんでした。やっとなりあえた精子と卵子が僕をつくったんだと思うと命をそまつにできないなあと思いました。

五、学習を終えて

食物や被服を共学で学ぶこと以上に保育学習は今の子供たちには必要だと思う。学習するまでは、わがクラスの落書きにも男女の性を表現したものがあつたが、学習を終えた今、そういう落書きは消えた。また、学習前に、「先生、今度の保育では、性のことを学習するんですか。女子だけでしましょ」などと、いやな顔をしながら来ている女子の何人かも、学習を進める中で、こたわりなく授業を受け入れ真剣に学んでくれたと思う。生徒自身、性への妙なこたわりがなくなってきたと感じると同時に、私自身が教える前と教えた後では大きく変わったと思う。一番こたわりを持っていたのは生徒よりも私だったのでないかと痛感した。

徳岡・嘉島町立嘉島中学校
稲田・矢部町立浜町中学校

新しい家庭科を創るために * * * * * 寺島 紘子

女性と職業・課題研究学習

「先生、話があるんです。聞いていただけますか」。電話の向こうは、卒業して二カ月、就職した二人の卒業生たちだ。進学組にいた彼女らが、事情により就職することになり、それでも社会人として働くことへの希望を持って、巣立っていったのだった。彼女たちに会った。「今の仕事をしていても、全然やりがいがありません。男子の新入社員との研修の違いにガッカリしました。女の仕事はあくまで男性の補助。自分の仕事で、会社の中で、どんな風に位置づけるか全然見えてきません。こんな風に毎日、飼いやられていくのかと思うと、絶望的です。職場の女性は若い人ばかり、結婚したら残業できないから、とても続けられないんです」。

彼女たちの焦り、無念さに、私の胸もくやしさと腹立ちでいっぱいになる。どう考えたって、職場は女にとって不利に出来ているのだ。彼女たちは、自分のやりたかった夢を、小さい時からずっと育て、その実現に向けて、努力してきた挫折。初めて知った社会のむごい現実である。彼女らは、社会の矛盾や不合理を鋭くかき分けながら必死にもがいている。

高校時代は、自分の生き方を進路と重ね合わせて考えねばならない重要な時期だ。しかし、女子の場合、同年代の男子に較べて、職業意識は、きわめて希薄である。結婚という大前提を、はずすことの出来ないものとして進路設計させられる女子高校生。「自立と労働」を考えるには、彼女らの回りは、余りにも反作用の力が大きい。経済力のある甲斐性のある男を掴むことの方が、自分が生きていくための先決問題となる。これは、家族を養わねばならない任務を、いやが上にも期待されている男子と対照的だ。どちらも生きにくい。

「女性と職業」は私にとって苦手な授業である。「私は結婚したらどうせやめますから」とか、「女の役割が決まっている以上、男性と差があるのは当然」「夫に保険をかけて、イザという時でも困らないようにしておきますから」などと、授業以前の抵抗に、生徒の思考を今一歩進めるのが困難だからだ。

しかし、そのような生徒たちの認識を揺さぶるには、まず学習に参加させることだ。働いていない生徒には、一方的な講義ではわかるはずはないと考え、婦人労働の実態を自らの手で調べさせた。そして「学びたい」という気持ちをはき起こした上で、できるだけ討論の時間を保障して、問題を自分たちの手で解明させようと思っただ。働く女性と出会わせることによって、二十三歳止まりの人生設

計しか出来ない生徒たちにも、その後の女の姿と、自分をつないで考えさせたいと思う。

「人間として譲ることのできない権利としての労働の権利」（婦人差別撤廃条約）を命題におさえながら、授業をすすめた。一年生の二学期、所要時間七時間。

働く女性のインタビュ調査から

この学習に入る一カ月前に、各自、一人あて、働く女性に面接し、質問に答えてもらい、それらをまとめておくように指示する。

質問事項は、年齢、職種、常雇・パートの別、中途退職の有無、結婚・未婚の別他に、職場での男女格差（仕事内容、賃金、退職制（慣習含む）の有無）、母性保護（生理休暇、産前・産後休暇、育児時間、産児休職制）、女性にとって働きやすい職場か（理由の項目を列挙したものに答えてもらう）、働くことのつらさ・喜び、高校生へのアドバイスなどである（『あごろ』21号BOC調査部の調査項目参考）。

生徒が調査対象に選んだのは、三分の一が母、あとは、先輩、近所の人やスパーに勤めている見知らぬ人、出身中学校の教師、将来希望する職業についている人など、多様な職種の人たちである。

各自調査したものを班で項目ごと一覧表にまとめさせて提出。それを印刷して生徒にもどす。これで働く女性の実態がクラス四十名分出る。その中から幾人かの生徒を指名し、全体の前で具体的に報告させる。

生徒はこの調査で初めて知ったことが多かった。男女格差、あまりが余りにも多かったこと、産前・産後休暇について、労基法の規定通りか、それ以上の職場が全体の三分の一弱、あとは「知らな

い」が多く、産前休暇は、二十代の人でも産む当日まで働いていたとか、予定日より十日か二週間前位が常識になっているという職場もあり、産後も一カ月位で職場復帰している人もいた。生理休暇、育児時間に至っては、「知らない人」がほとんど。さらに、格差があり、母性保護がないにもかかわらず、多くの人が働きやすい職場だと答えており、その理由として、「仕事がラク、気らく、人間関係がよい」などを上げている。

仕事の満足度と身分保障・労働条件を分けて考えている人が多かったことも、彼らにとっては意外な点であった。また看護婦や教師などの専門職でも、仕事に向いていない、仕事は過重と悩んでいる人もおり、このことも単純に資格さえとれば、女性には有利で働きがいがある職が開けると、一概にいえないなども、初めて知った事である。

実態が報告されたあとで、一人一人に「わかったこと」「疑問点」を述べさせた。「労働条件のよい職場につくため、何度も転職する」という生徒、「そんなの甘い、どこへ行っても同じだ」などと、議論にまで発展するクラスもあった。生徒から出されたものを次の時間印刷して渡す。次はその中の一部である。

へわかったこと

- ・労働条件を割り切って考えている人が多い。
- ・パートよりフルタイムの方が条件がよい。
- ・資格や技能は労働条件と絡んでくる。プロ意識にもつながるが、必ずしも、生きがいにつながる場合もある。
- ・母性保護規格がないところもあり、認められていても、行使してない人も多い。

。やめたくなくても、母性保護が整っていないのでやめざるを得ない

。中高卒で働く理由は、家計補助が多い

。中高年で仕事を求めると職種が限られる

。同じ仕事をしても、正社員、パート、アルバイトで待遇は違う。

人間関係にも影響する

。格差があるといっても、働いている人自身が承認している

〈疑問点〉

。仕事の内容に差がないのに、賃金格差があるのはなぜか

。『女の適性にあったものを』『生きがいのある仕事を』とのアド

バイスがあるが、それをどのように見つければよいか

。『甘えないこと』というが、本人が甘えているのか、回りや上の人が甘えさせるのか

。女にとって働くことと家庭との両立は可能か

。差をなくすには男と同じ仕事をしなければならぬのか

。待遇の悪い人は、組合などを作って、待遇をよくすることができないのか

〈疑問点〉から「一番勉強したいこと」を選ばせる。圧倒的に多かったのは、賃金格差の問題である。やはり金の問題は関心が高い。逆にいえば「金」は生徒にとっては、最もよくわかる「痛み」なのだ。

賃金問題を中心として

日本の低賃金構造の裾野を支える婦人労働者。役割分業論を利用した婦人労働者への労働権の侵害は、資本主義社会における利潤優先の低賃金雇用政策である。なお、母性保護については保健科で学

習する。結婚や出産による退職制度の法廷闘争の判決や、私の知人の事例などを紹介する。私にとって「女性と職業」の授業は、この知人たちの働く現実から触発されたといえる。

『なぜ女の労働権を奪ってまで早く退職させたいという職場が多いか』班討議。不安定就労層の確保のためのM型雇用形態と、低賃金の関係を理解させる。

さらに過去の婦人たちのたどってきた足どりと、現代における婦人労働者の活動を見せる。このことによって、自分自身が、仕事を通して、社会を切りひらく主体者であることをわかって欲しいと思う。

スライド『婦人解放の足あと』（日本幻燈文化社）を見せる。近代以降の婦人労働者がどのように生み出されたか、貧困と搾取にあえぐ中で、人間として、労働者として目ざめていった過程が描かれている。一年生には、資本主義社会の歴史的経済的なしぐみは難しいが、歴史の中の自分の位置のようなものは漠然とでもつかめる。

『昔でなくてよかった。今はまだまし』と述べた生徒もいる。「確かに、昔に較べて労働者の地位も向上し、生産力も上がり、生活もよくなった。これは過去の人たちの苦勞と戦いがあったればこそだ。

現在は、さらに矛盾が多い。もっと家庭でも、社会でも生活が充実し、生きやすくなっていくにはどうすればよいのだろうか」と私。これは私自身へ向けての言葉でもある。

国連婦人の十年中間世界会議での差別撤廃条約の署名式、スウェーデンなどの男性もとれる育児休業など、かなり進んだ先進国の様子をおさめた『男女平等への道』を見る。日本での条約批准を阻む労働の改善、とくに男女雇用平等法の制定問題についても触れ

る。女が働くには「保護」も「平等」も勝ちとっていかねばならぬ。い。

再び賃金の問題について班討議して発表。「勤続年数、学歴、年齢が同じで、一定時間に同じ労働量をこなしても、女子の賃金が男子より低く見積もられる場合がある。なぜか」

生徒たちはかなりの線まで考える。男は一家を支えるために高い賃金が必要。女は家計補助が多い。「雇う側で実権を握っているのは男が多い。賃金で差をつけないと男の立場がなくなる」「昔からの悪しき伝統で女の能力を低く見ている」「女は結婚したり、子どもを持つとやめる人が多いので、企業は女をあてにしない」「女は安くても働いてくれるから。女も賃金が安いのは当たり前と考え、賃金要求の交渉もしないから」。

『女生徒の進路』（和田典子著）の「女子の賃金」を資料に、賃金は労働の報酬ではなく、労働力の価格であること、賃金水準は何によって決まるか、女子の賃金はなぜ安いか、を学習する。

働く女性の肉声を

生徒たちは、働く女性から仕事のつらさだけでなく喜びも聞いてきた。授業では、生徒に最も近い卒業生からのメッセージを伝える。そして最後に、教える側の「私の場合」について語った。

冒頭の卒業生は、その後、五か月程して再び私のところへ訪れた。表情は明るい。仕事にも慣れ、おもしろさも出てきたようだ。彼女たちの声を録音した。彼女らは職場での仕事について具体的に語ったあとで、次のように述べた。生徒は録音テープを熱心に聞いた。

「……私は、自分のやりたい事と、仕事を別に考えることにしまし

た。今、そのことをするゆとりも出てきました。仕事もまかされることが多くなり、今は、もっとやらせて欲しいと思っています」。

「……私は、仕事が自分にあっていないというところで抵抗があり、まだ納得していません……。たとえば、その仕事が好んで選んだ場合でも、会社の体制について何も考えない人にならないで、組合があったら、積極的に参加して、どうすればもっといい環境で働けるか、考えられる人になって下さい。もし、その仕事が納得できない人は、それに慣らされるのでなく、自分のやりたいことは、どうしたらできるか、悩むけど考え続けて欲しい……」。

私は働くことをどう思っているか

私は、経済力のない女のみじめさを、母を通して知った。母は父に献身的に仕えたが、自分の病気の治療代も、父に請求できなかった。母はことあるごとに「女も働いて、金を自分で持たんとダメや……」といった。私はどんな仕事でもよい。自分の食いぶちは自分で稼ぐ。そのことが、思想や行動の自由を持つこと、男性と対等に愛しあう基本であると思うに至っている。職業を持つ前は、高校生と同じく、結婚を通しての女の役割にとらわれていた。

仕事を持って初めて、母の言う意味がわかった。仕事は、確かに私を育ててくれた。自分のエネルギーを外に向けて使うことは苦しいけど、返ってくる喜びも大きい。私は仕事を離れた産休中のあの短い間ですら、自分がピンボケになったと思った。いかに母性が崇高な役割だといわれても、私の実感だった。そのような私にとつて、保育園は本当に必要であった。

しかし、女が働くには様々な障害が多い。働きたくても、意志に反する選択を迫られることもある。職場に出るも地獄、家庭に残る

も地獄という状況の中で、一概に働くべきだ、とはいえない。生きがいは、各人が見つけていくものだし、その価値観の多様性は、尊重されねばならないと思う。しかし、まだ働く以前から、未来に対しての閉塞状況でゆき詰まっている女子高校生は、自らの可能性を閉ざしている。人生へのいち早いあきらめでもあるのだ。本当は彼女らは、今、大変揺れているのだ。彼女らをどんなに励ましても励ましすぎということはない。私が働きながらつかみとってきたことは、生徒に伝えてやりたいのだ。

授業後、生徒が書いたこと

A 「賃金というものは、本来、労働に対する報酬というのが当然だと思っていた私には、労働力でさえも商品のように扱われ、女性の生存費が、大変安く見積られていることにショックを受け、腹が立った。いつのまにか企業だけが大きな力をもって、労働者、特に、今まで家事をやってきて、社会にくわしくなかった女性は弱い立場になってしまったのだと思う。私たちで、女性弱者がなくなるようにしていかねければならない。」

B 「女性の賃金が低いのは昔の身分制度のようだ。士農工商の下に、えた・非人を作って、農民に不満や反乱を起こさせないようにした。あの制度に、社会のしくみは似ているみたい。この場合、えた・非人が女性労働者で、農民が男性社員で、幕府は会社、企業のような気がする。」

C 「私は、最初、女性が働くということを、余り真剣に考えていなかった。結婚して男の人が働いて生活費を稼いで、それで家計がうまくいけば女の人は、育児などの家事に専念すればいいものだと思っていた。でも今はそうは思っていない。私の今までの考え方だと

女が差別されている原因を、自分から作っているようなものだと思う。」

D 「働くことは社会に出て、社会と共に生きて行くことだと思う。人間は社会の中で生きているのだから、働くことなしでは生きていけない。女性が主婦として家の中で働いているその労働は、生活していくための全く基本的なものであって、誰でもがしなければいけないものだと思う。」

家族・家庭にかかわる問題の課題学習

自らがテーマを設定し、調べ、学ぶというこの研究学習には大きなウェイトを置く。夏休みをはさんで九時間。夏休み前の四時間はテーマを決め(個人学習中心)、研究で明らかにしたい、ことを上げ、仮説(自分の見解、予測される結論)を立てさせる。それを夏休み中にデータを収集して証明、考察、レポートを作成する。テーマのサブタイトルは「家庭と社会を見つめ、自らの生き方を確立するために」だ。今年度のテーマの内訳は次の通りである。

家族(結婚・離婚・親子)問題：十七名

青少年・教育問題：五一名

共働き・女性と職業：十二名

老人問題：十九名

障害者問題：十五名

医療問題：二十名

環境問題・その他：二六名

夏休みには、病院、児童相談所、放送局、未満児保育園、老人ホーム、障害者保育教室、生活協同組合へ生徒を引率していく。のべ八十名の参加があった。保育園と障害児保育教室は実習を含む。老

人ホームでは老人から直接話をうかがう。

その他、個人で施設・行政機関に行ったり、アンケートで実態調査をしたり、出来るだけ足を使って客観的データを収集する。

最後に各自、家族一人、友人(男女各一名)に感想を書いてもらう。夏休み明けには、テーマごとに発表する。「わかったこと」「わからなかったこと」「この研究は自分にとってどういう意味があったか」を述べる。「ぜひ知らせたいこと」を一枚のTPシートに書き、OHPを使ってみんなに伝える。テーマごとに質疑応答の時間を持つ。発表を聞く生徒は「発表から得たもの」「自分の意見」「発表者への評価」をまとめる。

学習後の生徒の感想の一部を紹介する。「資料がかなりの量を占めていて自分の意見が少なかった。もっと自分の意見をはっきりさせた方がよかった」「こういう勉強はすごい。これからもやっていたい」「『矛盾だ』『おかしい』と思ったことは、うんと追求して納得いくまで調べたり、意見をいったりしていこう!」

生徒が学習したことは、テーマのほんの糸口をつかんだにすぎない。しかし、自分の進路への何らかの働きかけにはなったと思う。「わからなかったこと」を鮮明にすることは次の学習へのステップにもなる。そういう意味で一年生の夏休みをかけたこの学習は、欠かせないものであると思っている。私の授業は「問題を設定し、事実を通して問題を解きほぐすための、学習への姿勢を作ること」であった。その「問題」は生徒にとっては抽象的で、難しかったが、わかるということよりも、自分とつないで考えること」を目指してきたと思う。

おわりに

実践報告させていただいた「私の保育・家族領域」は現代社会の抱える大きなひずみともかわって、未知数であり、展望は今後の課題である。それだけに、生徒との協同作業を重視した。自身の模索と自己脱皮の過程での報告であった。まことに未熟なものである。この二領域の配当時間は家庭一般四単位のうち二単位(約七十時間)である。

あとの二単位は、家庭科のもう一つの核である、くらしの領域である。衣領域を三十時間、食領域を三十時間、家庭経済を六時間(残念ながら住領域は、時間不足のためやれていない)。「保育・家族」が人と人とのつながりだとすれば、これらの領域は人と物と自然とのつながりを科学的に学ぶ領域である。調理実習や被服製作(ハッピを製作した)を通して、技能を獲得させると同時に、生活文化の継承や生活破壊の現実に対する矛盾追求の目も育てていきたい。

家庭科は人間そのものや、日常の生活と切り結びながら、自分と家庭と社会をみつめ、自らに生活の主体者としての問いを立てさせて学習する教科であると思う。それには、もちろん男女でという条件が必要だ。そうでないと学習はいま一つひらいていかない。

書いていて私自身の力不足を感じた。未消化のままですめた分野もあった。もっと授業の中で有機的に人間関係を仕組んでいくことも必要であったと思う。

最後になりましたが、拙文を読んで励まして下さったWe読者の皆様を始め、毎回、原稿を見て下さり助言して下さいましたサークルの方々、そして半田先生の厳しく、暖かいご指導に、心から感謝申し上げます。

(石川県立金沢桜丘高等学校)

新しい家庭科を創るために *** 大学では *** 内藤 道子

教師養成のための大学カリキュラム

問題と教科教育について

一、大学におけるカリキュラムなど
大学・学部（以下大学と略称）は、一言でいうならば、ある専門性や職業・技術を有する人間の開発をねらいとして、大学の自治のもとに大学の目的にふさわしい独自のカリキュラム編成を行っている。

筆者が所属する教育学部のように教員養成を大きな柱としている場合は、大学卒業に必要な一四〇単位（表1参照）の中に、初等・中等家庭科教員免許状取得に必要な学科目単位は十分に満たされるよう配慮されている。このカリキュラムをそつなく履修すれば、学生たちは免許状を取得できるが、新しい家庭科を創ろうとする教師が誕生するかといえば、現状では保証しがたい。しかし改善のきざしは徐々に見えはじめてるので、カリキュラムに関する問題を中心にその改善の方向を探りつつある一端をまずご紹介したい。

第二の問題は、家庭科教員養成カリキュラムの枠組みと、その各分野の比重のアンバランスである。表1中から各科課程共通の一般科目、教職に関する科目を除いた家政（家庭）に関する専門科目と各分野の単位を本大学を例に示すと表2の（A）となる（他大学でも大同小異である）。一見してわかるように、免許法に則って最低の要求単位を網羅することをねらい、教職に関する専門科目を細切れに構成し、それをパラレルに並べているにすぎない。また各分野の単位配分では、家庭科教育法が3単位と極端に少ない。この構成では家庭科教育の学問的な背景となつてゐる家政学分野の基礎となる学力を幅広く専攻することはできても、教育に携わるための総合的な能力をどこで求め得られるのであろうか。

一般教職科目の中で十分獲得できるといふ意見もあるが、筆者も参画した「家庭科教員養成カリキュラム構想」研究会では、専門的学力に加えて、教育的な総合能力を育てるにはカリキュラムの枠組を再検討し整備する必要があるとの立場から、総合領域、家庭科教育領域、個別専門領域の三領域構成を提案してきている。詳細は略すが、カリキュラムの枠組を現状との対比で示すと、表2の（B）となる。この構想では家庭科教育論を三本柱の一つに位置づけようとしている。また、従来の教科専門科目を家庭科内容論の個別専門領域とし、「専門的な知識を家庭科教育の実践活動にどう結びつけるかを研究・指導するための総合領域を新たに設定している。この構

表2 家政科(家庭)専門課程の例

科目群	専攻単位
栄養学、食品学及び調理学	12
服飾学、衣料学及び応用化学	14
住居学	8
育児学	4
家庭経済学、家族関係	6
家庭機械及び家庭電気	2
基礎実験	2
初級及び中級英会話	3
卒業論文	8

(A表)

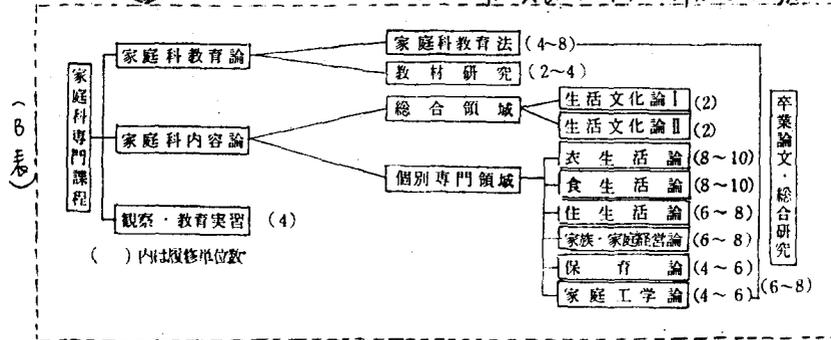
表1 履修科目と単位 (昭和57年度山梨大学家政学部家政科)

課程	一般教育 科目	専門科目		自由選取 科目	卒業 論文	計
		①	②			
中級教員養成	52	48	21*	11	8	140
小・中学校教員養成	52	16	32**	32	8	140

(注) ①教科に関する専門科目, ②教職に関する専門科目

* 21の中に教育実習4単位の含む
** 32の中に教育実習6単位の含む

↓ (小・中・高の場合) (家庭科教員養成カリキュラムの科組) (試案)



(B表)

(A, B表とも各科課程共通の一般科目、教職に関する科目は略す)

想は打ち出してから三年になる。この間、とくに「小学校教科専門科目(小教専)の現状と問題点」を、全国教員養成大学・学部家庭科教室を対象に調査し、その結果を全国レベルの総会などで報告し、各大学での改善のための討論や改善作業を促してきているが、残念ながら顕著な成果は見出せていない。しかし調査から多くの教員は、家政学の専門そのままより、むしろ家庭科教育の基礎となる学問的知見に力点を置くべきと考えていることがわかり、将来が期待される。

一方、新構想の「家庭科教育論」は、家庭科教育学を背景にしているが、家庭科教育学そのものが未だ「学」としての市民権を十分に得ているとはいえない状況にある。総論的家庭科教育法に関しては、多数の著書・出版物も見られるが、各論としての家庭科教育課程論、教授・学習論、評価論、教育史などの論文・著書の少ないことがそれを示している。とは言え、手をこまねいているわけでもない。教科教育を専門とする若手研究者や教育実践を積んだ研究者らが、「学」としての確立をめざすための基礎資料の集積を行っている。

学会活動としては、日本家庭科教育学会第二十五回総会時に家庭科教育課程の改善をめざして「児童・生徒の家庭生活に関する認識調査」を全国九地区を対象に実施し、貴重な資料を得ている。本年度も継続で「児童・生徒の家庭生活に関する技術の調査」を多くの関係者の協力を得て実施、第二十六回総会報告をめざしてまとめを急

いでいるところである。

第二の問題は、家庭科専門課程の個別専門領域の背景となる家政学研究が細分化の道をたどって、発展してきたことである。このことは、戦後の科学技術研究全般にもいえることで、その結果、目的外の資源の危機、あるいは公害問題など、人類の生存を阻む問題を招いてきた。とりわけ人間の生活に最も近い距離からかかわりあうべき家政学が、これまでどれ程の貢献をなしたか疑問のあるところである。このような状況の中で近年開かれたマニラ国際会議を契機にして、「諸外国では地球的な視野で飢え・貧困・文盲などについても広く研究している。日本の家政学は世界各国と異なり専門領域内の研究中心であるが、これでよいのか……」の論議が展開されはじめている。この論議は、現代家庭科教育のありようにも反映するであらう。

具体的な討議組織の一例をあげると、日本家政学会内で編成した「家政学将来構想特別委員会・分科会（専門分野別・地区別）」がある。筆者は被服分科会の一員として、'81年九月から'82年十二月まで約十回の分科会に出席してきた。被服学分科会は構成学、材料学、整理学、衛生学、民族服飾学、色彩意匠学、家政学原論（教育を含む）の各領域の専門家二十二名の委員構成で、特別委員会本部が提示した「分科会討議事項一〜十」について討議を重ねている。討議事項は「家政学はどういう学問か、またどういう学問であるべきか」からはじまり、隣接の諸学会との関連の中における家政学の存在価値、家政学各専門分野の相互関係、家政学の研究体制と教育体制の現状と将来、生活に関するプロジェクトづくりの可能性、家政学の負う課題など、まさに家政学の将来を構想するための重要なポイント

トが出されている。その一部を紹介してみよう。

「家政学の研究体制と教育体制」に関して、家政学の存在価値は研究・教育に止まることなく普及活動にまで発展すべきで、そのために教育・普及に関しては、単なる各専門分野の分担ではなく、専門性の総力を結集した総合的な研究が望まれること、またこの実行段階ではアメリカの家政学会などを参考に、普及部会を設け講演会・講習会などの実践活動が重視されるべきとの意見が出されている。

筆者自身、分科会へ参加できたことによって、構成学などの他分野の研究者らが人間の生活と緊密な社会現象にまで目を向け研究の成果を役立て、社会への貢献を少しずつ始めていること、教育・普及にも十分な関心をもち、その実行方法を検討しあえたこと、また家庭科教育の現状や問題点の理解、将来の教育・普及へのコンセンサスが得られたことは、貴重な収穫であった。

被服分科会をはじめ各分科会の間まとは、'83年六月開催の家政学会総会で報告されることであるので、筆者も討議の全貌を知るのを楽しみにしている。この特別委員会討議は地区別分科会も含めると全国的なレベルでの広がり、新たな胎動を感じている。

二、教科教育法の指導について

ここでは筆者自身が直接かかわる教科教育法について悪戦苦闘ぶりの一コマを紹介してみたい。

まず、初等家庭科教育法(免許法では教材研究二単位に該当する)である。他大学の多くが二単位履修であるが、本大学では三単位必須履修(通年で二単位講義、一単位演習のカウント)になっているので、恵まれていよう。

しかし、この時間の中で、表3に示す資質を育てようとする気負

いから、まず苦戦が始まる。

表3 家庭科教員養成の目標(試案*)

- A、家庭科教育の内容を構成する家政学の基礎的な学力をもち、総合的な見識をそなえて、学校及び社会での家政教育の役割を認識していること
 - B、家庭科教育を担当する教師としての機能を認識していること
 - C、教育に必要な、職業的な人間性をもっていること
 - D、教育計画を立てるために、情報の分析、内容・方法の選択、組織化及びその評価に関する能力のあること
 - E、有効な学習指導のための実践的能力があること
 - F、研究の意義を認識し、科学的な方法によって研究・調査が実施できる能力をもっていること
- * 「家庭科教員養成カリキュラムの構想」P4～5より抜粋)

特に、この目標のD・Eの実現に向けて、まず前半の講義単位の中では、主要課題〔①家庭科教育はなぜ生まれたか②家庭科教育とは何か③なんのために、何を素材として授業をするか④適切な指導方法とは何か⑤家庭科の授業をどう進めるか⑥家庭科の評価とは〕を掲げて諸説を学生たちに紹介、ここから議論が始まる。そしてこの講義過程の中で、小・中・高校時代に学生自身が学んだり見てきたやや偏狭な家庭科の認識を解体することに努力する。

例えば③について「生活の創造」を子供たちに学ばせるために、

教科内容をどのように構成したらよいか、生活現象面から、生活構造面から、生活経営面から、生活行動面からなど、構成の視点があらうことに気付かせ、学習指導要領に示されたものが唯一ではないことを理解させようとする。日本の現教育制度下では学習指導要領を無視できないまでも、授業を進めながら、批判・検討を加えていくことが現場教師の本道であり、子どもたちの人間としての成長を促すことができることを力説し、その事例を紹介している。本年度は〔8〕「岐阜大附属長良小の実践研究」〔9〕「上越・大手町小の実践」〔10〕「岐阜・岩野田小の実践」などをあげて、教育課程編成の視点から解説を加えてみた。

学生の反応は、自主編成に共感を持つもの、そのようなものは専門家に任せればよいというものなどさまざまである。しかし教科領域の変遷の経緯と、現行の教科領域と、日本教育大学協会二部会家庭科部門の「領域設定の構想案」などの比較を具体的に示すと、なるほどと考える学生も多い。

例年、夏休み中のレポートは「あなたにとって家庭・家族とは」「小学生の家庭生活における自立要件は何か」の二題を出す。前者では、教科の性格・本質論の整理をねらい家庭・家族を主題とする著書を一冊読み、その書評を一節にまとめさせ、二節で著者の家庭・家族に関する論説を射程距離において学生自身の家庭・家族観をまとめるよう指示している。読書範囲は広く、稲村博著「親子関係学」、武者小路実篤著「幸福な家族」、川合章著「子どもと家庭」など、バラエティに富んでいる。

学生自身の家庭・家族観では、自宅学生と下宿学生とは対照的な見解を示しているので興味深い。

後者のレポートでは、後半の演習単位の授業で行う教育内容の自主編成試案作成の基礎資料となるものをねらっているが、やはり学生の生活体験が大きく反映しているレポートが多い。自宅学生ではしつけの要素を列挙する傾向が、下宿学生では、ボタンつけ、洗たく、食事作りなど日常の家庭生活に必須の衣・食・住に関する生活技術を自立要件としてあげているのが目につく。

後期の演習では、男女児童の心身の発達状況と発達課題を基本に据えて、各自が夏休みレポートにまとめた自立要件を配分整理し、内容を自主編成して学習指導案を作らせる。家庭科の授業は教師自身の生き方や世界観などと表裏一体であることを把握させたいと思っている。この間、V・T・Rで家庭科の授業を見せ、いまの子どもたちを知らせる。また消費者問題への意識高揚、消費者教育の必然性を現実的にとらえさせたいと願い、消費生活センターを見学することもある。商品テスト結果や消費者相談実態、最近の消費者行政などに触れると、効果はてきめん、授業設計にそれが現れてくる。

一方、授業設計に入る前段階で、大学附属小の家庭科の先生（専科担当）に三回出張いただき、「題材をどうとらえて指導するか」をテーマに、各領域の教材的意義、教材化の事例などの解説を依頼、教育実習への手掛かりをあわせて得させる。

次に、中等家庭科教育法であるが、これは中学校課程家政科の学生、及び副専攻で家庭科の免許状を取得しようとする小学校課程家庭・家庭科教育専修学生や他課程・他学科の学生が受講するため、学生らの教科教育に関する学習履歴は複雑である。肝心の中学校課程の学生は教科教育法に関してははじめての聴講が多く、教科の性格・本質論を省くことができず、副専攻学生にとっては重複するが講義

を続けてきた。

ある機会に教科に関する専門科目は各領域十単位前後指定されているのに教科教育法は僅かに三単位指定であることに気付き、実質的には六単位指定になるよう教室会議に提案した。すなわち「初等家庭科教育法の単位を取得しなければ中等家庭科教育法は受講できない」と内規をとり決めたわけである。学生便覧へ正式に記載するために大学教務委員会の承認なども必要なので、現在は学科ガイダンスで受講学生に連絡している。この学科内規で数年を経ているが、トラブルはなく、初等家庭科教育法三単位履修をベースにして、確実な積み上げができるので担当者としては大変ご気嫌である。学生数も平均して十五名を越えることがないので、演習・模擬授業の計画・実施も可能である。

そこで前期の場（通年三十回の授業）は諸外国との比較、初等家庭科教育との比較、関連学科目との比較など徹底した比較論で中等家庭科教育の教科構造や、教育課程などを論争している。この中で男女共修問題、生活技術論、消費者教育論、家政学や生活学との関係などが出されて、総合的な話し合いが展開できる。指導する筆者自身、結論を総てに持ちあわせているわけではないので、学生らとともに立往生することもしばしばである。一見解は示しても結論を提示することは避けて、学生自身がそれぞれの問題について考え悩むことが望ましいと考えている。

次いで後半の授業研究に入る時点で林竹二著『問いつづけて―教育とは何たるるか―』の論講を実施している。ここでは一たん既存の「授業」を否定させて、林竹二氏が主張する「人間のすばらしさの発見、すべての子どもが自分を見つめはじめの授業、子どもの感

性に、からだ全体にはたつきかける授業とは何か」を問い直す。数回の輪講で適切な回答が得られるのではなく、結論は授業研究が修了したところでレポートにまとめさせるようにしている。こんな時、筆者は「子どもの事実から出発する授業」にこそ、子どもに生きてはたらく深い授業が成立することに気付かせたいと、気をもんでしまう。

しかしこの試みは、けん制球を学生に投げこむようなもので、授業研究を難かしいもの、苦しいものと思いつまされる恐れもある。ともあれこの討論を経由して授業研究に入ると、教材内容を授業目標に直接組みこむ計画は少なくなり、子どもの変容を見つめる授業設計を考へることは確かである。授業研究では、教材研究を深める中で何回も手直しする学習指導案作りを中心に、授業実践に使用するV・T・R教材づくり、T・Pシート作りなど楽しい作業・実習もあり、大いに活気が出る。

準備過程が終わると、十五分ずつの模擬授業をする。分担で授業の録画とり、生徒役、教師役が回転する。小さな声、不明瞭ななし言葉が消えて、堂々たる指導ぶりを発揮してくれるとホッとする。

以上、強引に捻出した重箱型六単位の教科教育法の指導の実際は、受講学生数、時間、施設・設備などの条件整備不足が重なって、四苦八苦だが、「教育は創るものである」ことの確信は得させたいと考えている。

(山梨大学)

注

- (1)「学生便覧(昭和五十七年度入学生用)」山梨大学より抜粋
- (2)この研究会は日本教育大学協会二部会家庭科部門・関東地区会に所属する国立大学教育学部有志六〇九名によって構成、家庭科教員養成カリキュラムの構想の研究を昭和五十三年〜五十五年まで継続して行ってきた。
- (3)「家庭科教員養成カリキュラム構想」とくに小学校教科専門科目(小教専)の現状と問題点」注(2)に示す研究会編著より(昭和五十五年)
- (4)「家庭生活に関する認識の全国調査報告」日本家庭科教育学会編著(昭和五十七年六月)
- (5)前掲(3)P 4
- (6)「家庭科教員養成カリキュラムの構想」附大学院の現状と問題点」注(2)に示す研究会編著(昭和五十四年)P 4より抜粋
- (7)『小学校家庭科教育法』藤枝他著、家政教育社、(昭和五十五年)P 3~5
- (8)研究要録「生きぬきはたらきかける子どもをめざして」教科およびあおぞらを足場に」15号岐阜大学教育学部付属岐阜市立長良小学校編著より、十か年間実践記録
- (9)「教育課程の評価と改善」二領域による上越ブリーダー」上越市立大手町小学校編著(第一公報社、昭和五十六年)
- (10)「家庭生活に対する関心を高め実践的な態度を育てる指導」研究発表資料、岐阜市立岩野田小学校編著(昭和五十七年)
- (11)前掲(7)P 50より



視点

〈「おしえる」とは〉

長谷川 孝

「おしえる」という日本語の語源の出ている辞書を、一冊見つけた。一九三七（昭和十二）年発行の『新編日本古語辞典』（松岡静雄著、刀江書院）である。

ヲシヘーヲシ（食シ）アヘ（饗へ）の約。原義は、饗食であるが、人間でも禽獣でも、

親は子に食物を摂ることを教へるのが自然の習性であるから、転じて教訓の意となったのであらう。

語源としてこれが定説かどうかは、私にはわからないが、「一つ釜のメシ」を食べあいながら、子供が成長していった、という考え方もできるかもしれない。古くは、「一つ釜のメシ」を食べあつたのは、いまの家族ではなく、たぶん「食べ物共同体」のようなグループであつたらうし、おそらく母系制の集団であつたらう。「食ス」という語には「お治めになる」という意味もあることを考えあわせると、「食べ物共同体」に食料を確保するリーダーが、共同体の支配者になったのかもしれない。だとすれば、「ヲシアヘ」の最初の食べ物母乳だが、やがてより共同体的な食べ物を摂るようになり、それが共同体の成員として認められていくことも、共同体のオキテに従うようになることでもあつた、のではあるまいか。「ヲシアヘ」が「オシエ」となっていく過程に、私はこんな推量を描く。

ところでイバン・イリイチは、西洋の教育の歴史を述べるなかで、「教育という機能を自分に帰属させた最初の男たちは、母なる教会の乳があふれそうな胸へと会衆をみちびいた初期の司教たちであつた」と語っている。また「教育することは、教育学上の言い伝えが主張する『引き出すということ』とは語源的になにも関係がない」と断言し、「ラテン語では、*educit obstetric; educat nutrix* すなわち、産婆が引き出し、乳母が育てる。男はそのどちらもしないのである。男は教えること(*docentia*)と指導すること(*instructio*)に従事する」（『シャドウ・ワーク』岩波現代選書）と指摘している。つまり、もともとの八教育エデュケーションなるものは女の領分であり、それが「教授」化しつつ男社会の支配を受けてきた、といつてもよいのではないか、と思う。

「食シ饗へ」というとき、教育はまったく生活的で具体的な共同性としてイメージできる。まさに母乳という具体性なのだが、その母乳がやがて「教会の聖なる教え（救い）」になり、体系的な知識や規範となるわけだ。それだけ観念（抽象）化した、といつてもいいだろう。イリイチのいう「存在、行動、制作のヴァナキユラーな様式」から、権力的で産業的な様式に教育が逆立ちし、「暮らしに根ざした固有」性を喪くしていった、ということだ。学校とは、こう

した教育の制度的な担い手、なのである。イリイチ流にいえば、学校は修道院の、教師は司祭の、跡つぎであらう。

前回、公教育への依存の現状を反省し、私の教育と八私の学びVを見直し、「生活の教育としての私教育を再確認し、生活そのもの、とともに、再建することを考えたい」と述べた。ここで私がいう「生活の教育」とは、郷土とその地の暮らしの個有性に根を張った教育であり、「私教育」というときには、こうした生活の共同性のなかの「私」を考えている。この郷土とか「その地」は、もちろん狭い地域、村落共同体的な意味ではなく、さまざまな人と人との直接的な結びつきの場としての地域である。そうした結びつきの網の目として新しい教育を構想し、学校を網の目のなかにとらえ返したいものだ、と思う。

私たちはいま、「暮らしに根ざした個有」性を己の手中に握っている、といえるだろうか。握っている、とはいえないのが、私たちにとって「常識」である。八教育Vを「暮らしに根ざした個有」性にとり返すことは、だからこそ私たちにあって、固有の暮らしと生活の個有性をとりもどす「闘い」であり、そうした自覚を創り出していく認識変革の八学びVの課題である。『教育問題は子どもたちの問題ではない。教師や親たちの、おとなたちの問題だ』と、私はつねづね述べているが、子どもたち自身ももちろんのこと、おとなたち自らが「教育をとり返すための拠点」を創り再構築しなければならぬ、といたいからなのだ。

自らの在りようから疑え、そこから固有の八学びVが始まる——私は、こう思っている。女たち、男たち、女と男の新しい自存と自立と共同性を創出する八くらしVと八まなびVと八はたらきVの手

探りである。「人間生活の自立と自存を志向する」(イリイチ) 営為が、おとなたちにとっての「教育問題」の原点であらう。

一九八二年は、中曾根内閣の登場という不気味な、政治・社会情勢を八三年に残した。全日本中学校長会では、管理教育のメッカ愛知県で開いた大会で、「学校が荒れる原因は、生命尊重、児童中心主義、自主性尊重といった戦後教育が原因だ」という戦後教育見直し論が本部提案の形で提起されたという(82・10・29毎日新聞)。おそらく「私」が「国家」と対峙しなければならない時代が来る。という覚悟をせざるをえない情況だ、と思わずにはいられない。

そのとき、「私」の自立と自存、「私」たちの共同性と連帯を、われわれは、どう確保しえているだろうか。これが、おとなたちの「教育問題」だ、と私は思うのだ。

私に加わっている郷土教育全国協議会は、昨夏に出版した『土着の思想と行動を——桑原正雄教育論集』(カタツムリ社刊、地方・小出版流通センター扱い、一五〇〇円)のなかで、「教育に国家はいらない」という思想を提起した。「教育に国家はいらない。真の教育は、私たち人民の手で行われてこそ教育とよばれるのにふさわしいのだ」という主張だ。私は、この提起は、とてもだじだと思ふ。

「認識の『質』は『育てる』のではなく、『変える』ことによつて、その『質』を『高める』ことができる」「価値認識(筆者註・認識の質、価値観)のちがいを問題として、子どもたち同士が認識変革をめざしてたたかっている学習」(傍点は筆者)。同書のなかから拾った文章である。そのたたかいは、子どもたちだけのものではない。

(教育評論家)

児玉 すみ子

さて、最終回を迎えて、これまで述べてきたカウンセリングの基盤となっているものに照らして、学校という教育現場で当然とみなされている前提に対し、疑問を投げかけてみたい。「学校教育」に安住している教師の足をくつがえす爆弾五発であると自認しているが、はたして、私のペンにその威力があるかは、自信はないのだが……。

一、教えれば、子どもは学習するのではしょ
うか

カウンセリングにおいて、クライエントは自己の問題を発見し、直面し、解決するといふ自己主導的な学習をしながら、生きゆく力を回復していく。カウンセラーの援助は受けるが、強い指示や強制や教えを受けることはない。それでも尚、というより、そうであるが故に、彼は、自分の力を確認し、主体性を培い、自分の行動に重要な影響を与える学習を行うのである。

よい教師は、立派な教案を作り、整然と立てられた計画に従って、必死に教授する。教壇の上は、主役の独り舞台、その熱演ぶりに観客である生徒は、聞きほれる。「ああ、一時間、教えるべきことは皆、教えた」と教師は安堵する。しかし、生徒の方は、その時

間、学習したのだろうか。与えられ、聞かされ、注入され、教えこまれただけで終わっていないだろうか。その授業から、彼らの主体的な学習が起るであろうか。与えられた結果だけをうのみにするのはなく、自らなすことによって習得する学習を行っているだろうか。実際、真に血肉となる学習とは、他人による操作が、もつとも必要でない活動なのである。ましてや、一クラス全員そろって、同じベースで、教師のプランに合わせて動かされる授業の中で、学習の起り得る可能性は、きわめて低いことを、知らねばならない。

二、まとものあるクラス、秩序正しい学校生活が、すべてに先んずることなのでしょうか

カウンセリングは、個人を集団に適應させるためのものでない。個人が、主体性を確立し、自らの独自性を伸ばし、その創造的エネルギーを解放していきけるよう援助するものである。かくして、いきいきと息づいた個人は、結果として、自分の属する集団の維持と発展に寄与する力を養うことができるようになる。集団の秩序のために、個人の成長を犠牲にするならば、一体、誰のための集団なのだろうか。その成員の生きゆく力を阻害する集団ならば、結局、その集団自体も発展を遂げることができない筈である。

しかし、教師は、まとものあるクラスが何よりも好きであり、秩序正しい学校生活を全員が一糸乱れず送ることを、もつとも望ましいとする。髪の毛や、スカートの丈の長さ、靴やカバンの種類、シャツの色や形等々が、子どもの人格を決定づける重要なことであるのかのように取り上げられ、真剣に職員会議で話し合われる。そこ

で定められた規則は、全員一致、一つの方向に同調するために、守られるべきであり、はずれていく子どもは、無論問題児呼ばわりされる。実は、この、何でも統一し、同調させんとする学校の風土が、人間個々の成長を阻害し、いわゆる問題児なるものを生み出し、ていることに気づかずに。

三、子どもは、教師の評価にあやつられて、成長していくものなのでしようか

カウンセリングによって成長に向かう人間は、(一)、仮面から離れる、(二)、「べき」から離れる、(三)、他人の期待に添うことから離れると言われている。両親や、教師や世間一般が善しとする価値や概念を採り入れて生きている子どもが、自分がほんとうに感じたまま、経験したままの価値や概念とのくい違いを、検討したり吟味したりしないでいると、その成長に支障が起こり、いろいろな心の障害につながっていくと考えられている。仮物の、ロボットのような生き方から脱け出て、自前の力で生きるよう援助するのが、カウンセリングである。

しかし、学校では教師の評価権が、何にも増して絶対性を持ち、子どもは、教師の期待、教師の抱く「……べき」に適合することが求められる。学習においても、教師の与えるアメとムチが、唯一の促進剤として、頼みとされる。犬の訓練とさして変わりはない。人間が、自由意志をもち、自己の成長を自ら意欲し、自分の生き方に責任をもつ存在としてはとらえられず、学校の与える評価、それに付随する資格と履歴と等級づけに左右される、「られる存在」として定着しているのである。他人の評価に依存している子どもは、永久に依存的で未成熟なままか、又は、すべての外部的な評価や判断

に対して爆発的に反抗するか、である。現在の日本の、学校教育を受けた青少年の実情が、まさに、これを裏付ける、格好の材料を提示しているのではないか。

四、教師が悪い、否、生徒が悪いと責め合うことより、両者の間の関係が、どうなっているのでしょうか

クライエントが、自分自身に直面して、できれば避けたい程つらい、困難な、自分との取り組みを始めることができるのは、「自由と安全」が確保されている雰囲気においてである。カウンセラーの、真実な、共感的理解に満ちた、受容的態度が必須となるのは、この「自由で安全な」雰囲気を作り出すためなのだと言っても過言でない。ロジャーズは、「自己に脅威を与えるような常習は、外部的な脅威が極小になる時、もっとも容易に知覚され、同化される」と言っている。

静かな教室、こわい顔でにらみをきかず教師、いつ指されるかと、おどおど、どきどきしながら堅い椅子に身を縮め、頭を垂れている生徒たち。教室での行動や態度は、すべて教師の判定、指示、非難、無視、脅し、叱責にさらされている。生徒たちの心は閉ざされ、知性も感性も、潤滑油抜きで動かされるごとく、鈍い動きしかない。ましてや、学業に自信のない生徒にとって、そこは、冷ややかな針の山である。その耐え難い緊張感、委縮した状態を破る者が一人でもいれば、それに同調する者が現れ、授業妨害が始まる。教師が、授業に参加しない、参加できない生徒にかかわってみたいとしよう。教師の方から心を開いて、彼らに近づき、彼らを大切に、彼らに教育と学習の過程がどのような見え方をしてるか、敏感に気づいていくとしよう。その教室の雰囲気は、暖かく自由で、

しかも真剣な雰囲気となっていくだろう。教師と生徒双方に、通じ合える関係が生まれた時、脅威の支配しない、安全で自由な雰囲気が生まれた時、子どもは、解き放たれた知性と感情を伴う、生産的な学習を始めるようになる。

五、学校は、子どもの生活すべてに立ち入り、支配してよいのでし

ようか

子どもの抱えている、生きていく上での諸問題が、カウンセリングで明らかにされる。学校とかかわる問題もあるし、学校外の問題もある。学校と切り離して取り組んだ方がよい場合もあるし、学校の外の方が生き返る場合もある。要は、彼らが、自分の背負っている独自の問題に、自分なりのやり方で取り組み、解決方法を見出していかねばならないのである。その過程を援助するにあたって、カウンセラーは、自分自身の抱えている価値観にこだわらないことが要件とされる。「学校こそすべて」と、教師の多くが執着している前提をとりはずさなければ、子どもの傷は癒やされない。

すべての制度がそうであるように、学校は人間のために創られたものであったのに、今や、人間が、人工的に創った学校に自分を適合させなければならなくなっている。学校の中で行われるすべての競技にプレイできない者、しない者は、悪者として非難され、そこでは、「個人の自由に関する保護条項」は、すべて無視される。その上、教師という全能者が、逃げ出す心配のない聴衆に向かって、何が正しいかについて、教化するわけである。

清水幾太郎は、「学校は、現実という大海の中の孤島」だと言うが、世俗と切り離された特殊環境に適応する術だけを身につけ、大海で生活する知恵を育くまねかった未成熟者を吐き出す機関、そ

れが学校とは言えまいか。自分の生活体験過程と結びついた、自分が生きてゆくための学習——それに貢献する場としての学校、それを援助、促進する人としての教師、という視点から洗い直していかなければ、学校教育は、人を崩壊させてしまうことになりかねない。

◇ ◇ ◇

「カウンセリングの教育への応用」などと、銘打ちながら、結局は、カウンセリングの基盤に立って見つめ直すと、学校教育の弊害の大きさはかりが、明らかにされてしまった。これ程、巨大で、動かしがたい怪物、学校教育の革新など、可能であろうか。ここに挙げた、素朴な、初歩的な、五つの疑問でさえ、答はわかっている。現実には、解くに解けない難問なのである。

私は、学校にあって、毎日、絶望の叫びをあげている。しかし、同時に、蟻が大きな山の切り崩しをえいえいと続ける類（たぐい）のことも、毎日、欠かさず行っている。「そうすべきだ」という気持より、「そうしたい」から、「そうせざるを得ない」から、「そうある方が、ずっと生きていて楽しい」から、行っている。「カウンセリングの教育への応用」——その具体例、ささやかな、私の実践例は、いつの日か、まとめて、本誌に連載させていただこうと思っている。

終り

△参考文献△

ロジャーズ 『創造への教育上下』 岩崎学術出版社
イリッチ 『脱学校の社会』 東京創元社



学習の 主人公たち

We の合宿に参加して

真鍋由紀子

前日の夜、夜ふかしをしたため、私たちは完全遅刻をしてしまった。一時集合なのに、一時半出発で鳩の巣に向かった。鳩の巣に着くと「遅刻者が多くて自己紹介ごっこは、やめた！」とあの有名な名取先生は言っていた。こんな雰囲気なのである。講演者として招かれた永畑さんのお話を一時間半位聞いていた。内容は、学校教育とは何か、これいいのかなどだった。ほんとうに内容がむずかしいので、長いのもあって、眠たかった。永畑さんの話は私としてはうなずくというより

眠くてこっくりこっくりだったけれど、その後、Weのみんなで討論の時は、目がぼちりになった。Weの仲間の人々は、意見をいう時私も言ったが、マイクの前で「ウー」とつまった私の話をみんなが聞いてくれたことがと

てもうれしかった。Weの人たちはみんなそういう人たちだと私は顔相を見て思ったし意見を聞いてもわかった。

Weの討論というのは、職場づかれした社会人の休憩所みたいだなあと考えた。「生徒たちは、移動教室の時や他の行事でも、何か決めなければならぬ時に『めんどくせえ、先生決めてくれよ』というぐあいであつた。やる気がないんです」と言った人もあれば、「私は教師生活がすこくいやでした、みなさんがこんなにかんばっていらつしやるので、私もこれからがんばりたいです」と言った人もあった。Weに集まった人たちの意見を聞いて一人一人勇気がついて又自分の仕事場でも一生懸命生活できる事はいい事だと思ふ。私もWeに入りたくなつたし、先生という仕事をしたくなつた理由は、ここにもある。

次の日も名前は忘れてしまつたけれど番場先生がよく知っている人が講演をした。その人は先生をやめ、自宅で国語教室を開いているそうだ。その人は、物語の話もした。佐藤さとの本は、私はどの本も好きである。とくに私はコロポックルのでてくるのは全部単行本で持っている。安房直子の本も大好きである。これは、中一の時教科書に出て来た「鳥」というのがたまらなく好きで、すぐさま図書館に行つて借りた。「きつねの窓」はおじさんの講義の中に出てきた。これは、私が本屋に行つた時、ちょうど発売されていた単行本を買つて来て読んだ。この人の講義もちょっと眠かつたけど、ここだけは、しっかりと聞いていた。

お昼は、私の大好きな時間である。パーベキューを川原でやった。あちこちでよそのグループの鍋がぐつぐついついていたけれど、Weの鍋が一番大きかつたと思う。味もとてもよかった。イモニつていうんだつたかなあー。私としたことが忘れてしまつたけれど。

川原でのメニューは、イモニと鉄板焼きとごはん(食べなかつたけれど)、トマト、これがほんとうの赤いトマトだノと思うほど赤かつた。あとキューウリ。大人は、ビールも飲んで

いた。ビールの好きな番場先生は、生水に当たり下痢便のため早退で、名取先生は二日酔いのためで、この二人は参加できなかった。

川原で、本職とうふ屋さんで、アルバイトで教師をしているというユーモラスなおじさんと仲よくなった。そのおじさんは一人で川で泳いでいた。実は、つきおとされた人だけ。最後に名取先生が来た時には、食べ物は何一つとしてなく、反省を川原で、全員で円になってやった。

「みんないい人たちでよかったです」と私は自分の反省の中で付け加えた。悪い人がいるとか、そういう意見じゃなくて、だれでも仲間に入れてくれる人たちだって言いたかったんだけれど。帰りがけに雨がふって来ちゃって雨やどりをしたんだけれど、雨も上がって虹を見た。とても大きな虹が、家から空に向かってかかっていた。私はWeの合宿に来てほんとうに良かった。いろんな人の考えや、いろんな人がいるっていう事をここでほんとうに知ったし、その人たちは、私たちを心から仲間に入れてくれたし。来年もぜひに行きたい。その時は、たくさん自分の友達をつれて行きたいなあ…。

堀 明美

新しい家庭教育をめざす雑誌Weの合宿へ八月二十一日、二十二日と行った。Weという雑誌は半田たつ子さんが編集長です。私は半田たつ子さんについてあまり知らないけど、長い間男子一緒家庭科をやる必要があるといい続けた人であるそう。外見はやさしい、どこにもいるお母さんというかんじで、いつもニコニコしていた。もう一人名取弘文さんという人、小学校で家庭科の教師をしている。としは三十七、八歳という所だけど頭は白毛まじりで、おしりがいやにまるく、手つきも色っぽい。あの白毛は苦勞のあとだろうなあーと思った。

私がWeの合宿で今一番印象に残っているのは、二日目に発言した看護婦学校へかよっている人の話だった。自分は今看護をやっている。それで看者さんを見てるとすごい痛みがわかるけど、何もしてあげることができない。自分の父親は今、苦しい立場にある。その父の苦しみはわかるけど、何もしてあげられない。自分の無力さをすごく今感じている。と、なみだ流しながら話してくれた。私は看護婦もなりたいたいと思っている。それは私の友達が歩道橋に頭をぶつけて、気を失った

ことがあった。私はその時何もしてあげられなかった。

うなされて血を流しているのに、私はただ手をにぎって見ていることしかできなかった。それが、ただ見ているだけがつらくて、看護婦になりたいと思った。看護婦になれば、少しはちがうのかなあーと思った。

その人は合宿にいる間、小さい子供にすごい好かれていて、どうしてかなと私は思っていた。私のほうから小さい子に近づかないとなついてもらえなかった。でもその人は子供からその人に近づいていった。その人の話をきいて、それがなぜかなんとなくわかった。自分の無力さを感じている人こそが、強さとやさしさをもっているのかなと思った。

そういうこと小さい子もわかるのかな？ Weの合宿に来ている人たちはほとんど、職場で一人で戦っているといっていた。Weの合宿に来て戦う勇気ができたといっていた人もいた。まなはWeの合宿に行つて家庭科の先生になることを決心した。私はWeの合宿に行つてよけい看護婦になるか先生になるか迷いができた。先生のことについては、番場先生から聞いた。組合のこととか、校長、教頭のこととも聞いた。看護婦のことについても、も



つと知りたいたいと思った。
二日目のお昼はかわらで、バーベキューをやった。私たちは、ねむたいのどつかれたことがかさなって、みんなしゃべる元気もなくしてしまった。(中略)

バーベキューのかたづけが終わった時「インターナショナル」という歌をかたをくんでうたった。私はその歌を知らないから、かたをくんで書いていただけだった。したら名取さんが「これはデモが終わった時にみんなで歌う歌なんだよ」「きどう隊とけんかしてよく留置場に入れられるんだよ」とか私に言ってくれた。その時の名取さんは、本当お父さんというかんじがした。

伊藤真希

行ってすぐ始まった講演は、私にとつてはすぐくむずかしい話に思えて思わず眠ってしまった。でも眠ることも大変なことで、よだれがたれないようにと思いつながら眠っていた。目をさますと夕食の少し前だった。だから眠ってはヤバイと思って、すこしの間しんぼうして聞いていた。みんな協力して支度をした。おかずは、おさしみ、とろろ、えびフライとおみそ汁だった。思ったよりごうかだった。私はおかわりがしたかったけど、よそいに行くのがはずかしかったので(まなはそんなことではないと言う)、一ぱいでやめておいた。

夕食後のセキララ大会が行われた。先生た

ちが学校を舞台にした劇をやった。私はなんか適当に見ていたせいか内容がよくわかんなかったけど、番場先生も自分の役を忘れて、生徒役をして、おこられながらもけつこう楽しくやっていたみたいだった。

先生たちの劇が終わると、こんどは高江さんの子供よっちゃんと、池田先生、番場先生、まな、ほり、まきで『つっぱり』はだれだ」というクイズをみんなに見せた。内容は表番と裏番を当てるクイズだ。みんなから質問を受けて、それを私たちが答えた。いいそびれたけど、表番はほりで、裏番は私である。(略)当たった人が五人ぐらいいいた。

それから私とほりは、タイマンのことや、つっぱりってこわくないかなどいろいろ聞かれたので、ありのままで答えた。先生たちは真剣な顔で話を聞いてくれた。人の話を真剣に聞かれていると、なんだかとてもいい気持ちをした。私はこのことだけに限らずWeの人たちはいい人だなあーとつくづくそう思った。

* *

富士山麓を核戦争の足場にするな

梶原 公子

人勧凍結のショックに拍車をかけるように、十一月十四日富士山麓では、日米合同実動演習が行われた。富士山を背負い、自衛隊の滝ヶ原基地や米軍基地がすぐ近くにあるここ御殿場では、この日を前に右翼団体「愛国青年団」などが日の丸をかかげて、草色の車を何台も重ねてパレードし、ジュラルミンの楯やヘルメットで武装した機動隊が県道などの辻々に立つなど、異様な雰囲気を作っていた。

そしてその夕刻には、自衛隊演習機が浜松基地付近で墜落し、多くの死傷者を出す事故が起きた。このためか、十五日の抗議デモには浜松方面の参加者が心なしか多かつた気がする。それについても地元民の反対は少なく、むしろ平穩で、自衛隊があるがために地元が潤っている事実や、自衛隊員が多いという否定しがたい事実を痛感した。

十五日午後二時、国立青年の家前には、高教組や労働諸団体の人が集まっていた。そして北海道から九州に至る各地方の平和団体など六百名近くが、すでに富士山御殿場口登山道、太郎坊に集結しており、間もなく滝ヶ原に下り、我々はこれに合流することになっていた。今年の十一月は、例年よりやや暖いのだが、滝ヶ原街道を埋める機動隊員の青銅色や自衛隊の迷彩色の服は、寒々しくひとかけらのぬくもりもない。そして抗議デモをせせら笑うような風が吹き抜ける。

二時をやや遅れてデモ隊と我々は合流した。赤、青、白など様々な大小の旗を掲げて、京都何々団体、甲府何々と書かれ、行列は男が多く、しかも年配者が多い。合流地点から滝ヶ原街道を下り、「日米合同実動演習反対」を抗議する。宣伝カーに乗った浜松の戦争未亡人が、戦争の無意味さ、自衛隊より平和な職業をと訴える。基地入口では機動隊が全身武装して、二重三重にずらりと並んでいる。それは直立不動で、デモ隊をにらみつけているのか、それともあらぬ虚空を凝視しているのか、無表情で無気味だ。報道者は両者に等分にマイクとカメラを向け、デモ隊はウターンし、再び街道を上る。

この抗議は徒勞ではない、と思いつつも、無言の警戒の相手に、「侵略」という巨大な圧力が着実に歩を進め拡大されていることを否定できず、その撤回はいかに徒勞に近いことか——アリの行列のような少数の抗議者では——と思わずにいられなかった。そして多くの人は「自分とは関係ない」「この平和な経済国に戦争など起こるはずがない」「反対したって我々の力では仕方がない。なるようにしかならない」と言う。そう言う人たちは口惜しく思うより、人をそう思うにさせる為政者のやり方の方が狡猾である。

しかし、反対であると思っても、そう言わず、行動もしいことは、「賛成」と見なされても仕方なく、時として「賛成だ」と言っていることにすらなりかねない。なすべき時は、はっきりと自分の

意志表示をするべきである。そして「侵略」の意味を子供たちに教えるべき立場の教師が、自分の保身のために口をつぐんでいないで、はっきりと言うべきである。徒勞だと思われる

「モンペハウス」のロケ

内山 裕子

パンツショップ、生活雑貨の店としてオープンしたモンペハウスも、Weと同じく一年を迎えました。モンペハウスという名前を聞くと、えっと吹き出してしまおう方、すてきな名前とほめて下さる方、冷笑のみの方、モンペの評価も人それぞれようです。もちろん私は、モンペはすばらしい日本のパンツだと思えます。下町育ちの私は、町の雑貨屋さんに蕭職さん用ニッカボッカや、お米屋さん用前掛けなんかと並んで店先に下がっているモンペがいつも気になる存在でした。

私のつれあいがアメリカに行った時、ピンクや紫に染めたつなぎや白衣を、これまた大きなダンボールにボンと入れて売っている店をみつけ、これはイイ、と思ったそうです。店の名を和訳すると「古くて懐かしいもの」。つれあいのその「古くて懐かしいもの」のイメージと私のモンペという「古くて懐かしいもの」のイメージがドッキングしたのがモンペハウスです。名前を考えたのが五年前、イメージが生まれたのが三年前、げっそりする程つれあいが実行した三分間思いこみ法のお陰か、自分たちで内装しオープンまで一週間、その後もつれあいと、ダブルファンタジーさながらに今に至っています。

でも、反対だと……。子供を育てる父母もまた、一個の人格を持つひとりの人間としてもまた、反対の意志表示をして欲しい。

ます。

私自身、漠然と自分の生き方を考え始めたころ、パンツをはき始めた事を考えると、単にファッションの流行のみでとらえるのではなく、女性の意識の変化を背景に考えるべきでしょう。パンツは生き生きと、主体的に行動する女性の姿です。そういえば新聞の投書に、年配の女性が同僚の男性の批判的な目をものともせず、パンツルックで颯爽とした気分になったと寄せていたのを何度か読み、拍手喝采しました。教科書のさし絵でも、もっとパンツルックの女の子を!! という指摘があります。家庭科の被服でも、もっとパンツをとり上げて良いのではないのでしょうか。制服はなくても良いと思うけど、制服即スカート、という発想もどうでしょうか。

私は区の夜間婦人学級の企画委員をして、女性問題を仲間と勉強しています。そこで学んだ事、Weで学んだ事をなにかモンペハウスに反映できたらと思っています。つれあいと相談して自由に使えるミニボードを置きました。現在は学級のチラシ、自主映画のチラシなどが貼ってあり、勿論Weのチラシは常時貼ってあります。We創刊も、婦人学級を通じて名取先生から知りました。女性の時代といわれる80年代にWeが創刊され、同じくモンペハウスもオープンでき

ました。今度は共に一年のお誕生日を迎えられ、たいへんうれしく思います。

たくさんの女性の問題を抱えてはいるけど、明らかに女性ばかりつつあると思います。お店を訪ずれるヤングミセスは、個性的で、母親はこうありなさい式の格好はしていません。オリジナルの黒い革風モンペをさらりと着こなす熟年ミセス。女性だけではないでしょう。つれあいをみてメーカー

暮しに根ざした保健教育を

——女子短期大学の保健室から——

勤めをこちらにかえて二年余りになりますが、「人間が暮らしていくためのほんとうの能力」ってどういうことなのだろうかと考えさせられています。

それは、学生たちがあまりにも、自分自身のからだや保健についての理解にも実践力にも欠けるように思われるからです。からだのこと、日常的な傷病の手当や予防などの知識と実践は、暮していくうえで当然に必要なことであり、おそくても高等学校をおえるまでには身につけていてほしいことだと、私は考えていました。そしてそれは可能であると思っています。

でも、保健室に入室する学生たちの姿にみるかぎり、私の考えは甘かったようです。彼女たちのこれまでの十七八年間の生活のなかで、何回となく出会ったであろうさまざまな外傷（小さな切傷・擦過傷・鼻出血・熱火傷など）に対し

さんが、新しいタイプの商人が出てきたなあとしみじみ感じるそうです。彼はハウスハズバンドとしても有能です。よき生活者はよき社会人になれる、そんな日が近づきつつある気がします。肩を怒らせず、生活と仕事を大切にし、男性と共に生きていける女性は、きっとパンツ大好き人間になってくれると思います。そして日本のすばらしいモンペが、二度と戦争というイメージに重ならないようにするの、パンツ大好き人間の仕事だと思っています。

柴崎 和恵

での応急手当（清潔なハンカチなどで圧して止血するか、泥などの汚れを流水で洗い流す、血液が流れ出るままにせず鼻翼を押えて止血する、水でよく冷やす、というような）をやらず、またからだの軽い変調（腹痛・下痢・嘔気・生理痛など）に対しては、体のしくみや生理に基づく自然現象を考えながら異常の原因を考え、からだに備えている自然治癒力を活かしていくというみかたを全くといってよいほどしないで、痛ければ鎮痛剤、下痢ならば下痢止め……というように、おそろしいほどに薬剤にたよるのです。

また、自らのからだの、女性——子どもを産む機能をもった性——であるしくみや生理を暮しのなかで大切にすることが忘れられているように思います。というよりも、そうしたことに気づいていないように思えます。

私は、彼女たちが「自分のからだを大切にすることにもっと真剣に積極的であってほしいと願わずにはおれないのです。そ

★報告

「そばづくり」から★★

それはまた、暮しを大切に、人とかかわりを大切にはぐくむということでもあるからと思います。
 学生たちのこうした状況にふれながら、彼女たちがそのよ
 うな「能力」をつけられなかったのはなぜなのだろうか——
 ということが重要だと思えます。
 幼少時からの「家庭教育」の問題もあるでしょう。でも、
 もっと大きな要因は、これまでの制度としての学校教育の問
 題ではないでしょうか。彼女たちもおそらく短大へ入学する
 までの間、受験学力を要求されて点数主義と偏差値主義の教
 育のなかにあったことでしょう。

そうしたなかでは、人間の暮しを考えたほんとうの能力を養うこ
 とは不可能だったにちがいない。私は彼女たちをみながら、
 現在の中学校や高等学校の保健体育とか保健といった教科とは異質
 な、人間の生命と向き合い、人間の暮しを基底にすえた健康教育・
 保健教育の重要性を強く感じるのである。それを、私は家庭教育の
 なかに期待するのですが、いかがでしょうか。
 短大生となってもおそくはない、と自問自答しながら、新入学生
 ガイダンス時の保健教育、日常的な個人を対象とした保健相談や保
 健指導、また母性保健教室の開催、などで学生たちに語りかけ続け
 てみています。

——六年四組がそばをまきました。
 白い花が咲いて、玄そばが両手いっぱい分
 くらいとれました。

そこで、そばを打つことにしました。——
 十二月二日、村岡小学校で行われた名取弘
 文さんの公開授業「そばづくり」は、こんな
 風にして始まった。他教科の神田学さんが、
 「玄そばを粉にする」授業を、名取さんが、
 「そばを調理する」授業を同時に行った。
 授業のはじめに神田さんが「玄そばを粉に
 しようよ」と言っただけ。子供たちは石臼をひ

き始めた。石臼を勢いよくひきすぎるので玄
 そばはつぶれずに出てきてしまう。それをす
 くてまた石臼に入れる。このくり返し。
 私は、粉ができるのかしらと思ひながら、
 そばを調理している教室に移った。
 二時限目も終わりごろ、石臼をひいている
 クラスにもどって驚いた。
 確かに粉ができています。石臼を床におろし
 かけ声をかけながら数人でひいている子供た
 ち。日なたにすわり込んで、すりばちをかか
 え込み、粉をつぶしている子供たち。二つの
 ふるいを重ねて使いながら粉をさらに細かく
 している子供たち。
 なんと二時限ずつと玄そばをひいていたの
 だ。あきもせず、かえって「おもしろい

よ」という返事が返ってきたほどだった。
 そばを植えるところから始まり、そばがき
 などを作って自分が食べるんだという全工程
 がみえているから楽しいのだろうか。
 石臼をひくにも一つ一つにコツがありリズ
 ムがある。それをのみこみ石臼と一体となっ
 てはじめて粉がひける。そんなことを二時限
 で感じとったのだろうか。
 二時限はそんなに長い時間ではなかったの
 かもしれない。
 もし一日こんな時間だったら、子供たちは
 この単調にみえる石臼をひく行為からどんな
 ことに気づいていくのだろうか。そんな思いを
 ふくらませてくれる子供たちであり授業であ
 った。
 (馬場洋子)

●私が教育・教師批判をするとき、少数を除けば、親の発言としか見られないのが哀しい。相手は、たいがい気の合った女教師たちで、わが子を通しての教師とはなかなか話し合えない。女の問題はどこまでも話し合えるのに、こと教育・教師論となると、親と教師に対立させられてしまうのがやりきれない。

●むろん、各自の立場を離れての一般論に終始すれば空論でしかない。私も親としての発言もするし、教師としての友人の考えも聞きたい。だが、教師批判を私は一市民として言っているであり、親の枠組から目前の女教師を叩いているのではない。これがわかってもらえない。

●教師である友人と教育・教師論をたたかわす、これがなぜできないのだろう。みんなイイ教師である。現場で奮戦している人間教師である。だからカチンとくるのもわかるが、親だから私が教師批判をするのではない。教師が教師批判をする例もあるのに、教師がつきつける教師の原罪論には答えず、私の、あるいは他の母親のそれにはムキになる。

●レイプや男の優位性を話題にするとき、少数を除けば、たいがいの男はムキになる。しかし、その話をしようとする相手はイイ男だからするのだ。または、イイ男になってくれるだろうとの期待があるからだ。だが、イイ男といえども、話題と無関係ではない。

里雅舞十丙 バラード

(10)

●私自身はどうかと考える。夫との対等な関係をつくるために闘ってきたあげく、主婦娼婦論に見舞われた。そうではないと胸を張れる部分と、どう否定してもゆるぎない現実があった。事実を受けとめ、そこから脱出すべく努力するより他はない。今もなお、だ。

●己れの現実像を認めるのは苦しい。だが、

それを受けとめたとき初めて問題が見え、立場の異なる人と語り合える基盤ができるのではないか。そのとき初めて自由な人間同士として話を深めることができるのではないだろうか。

●「教師」と「親」として対立せざるをえないほど、教育問題の根は深い。だからこそ、せめてイイ教師はヨロイをぬいてもらいたい。たまには教師の立場を離れ、市民として教育問題を眺めてもらいたい。もう一步切りこめば、教師は社会的に過保護ゆえに、私のような親にもまれていないと言えらる。

●教育の右傾化しかり、教師の管理体制しかり、個人の良心でもならぬ教育の現場だろう。だからオマエタチにわかるか、ではなく、立場の異なる人と大いに議論を交わし、別の視点を得て点検してもよろしかろう。改善要求も必要だが、いまこの日々を子供たちは育っているのである。教師よ、耳を持って。眼を開ける。専門家ヅラなどくそくらえだ！

(門野晴子)



◆10月号「人間の自立とは」をVを読んだら、ぜひとも書きたくなりま

した。「自立」することにこだわり、そのための示唆を『家庭科教

育』誌から多く学びながらこの九年ばかりを生活してきました。すぐれてわかりやすい内容は、家庭科というものに偏見をもって私さへ、毎号毎号発見があつて楽しい雑誌でした。生活者としての視点が大切にされた展開は、鋭い指摘がなされている一方で、心暖まるものを感じさせました。

三年たらずの結婚生活の末、一歳十ヶ月の娘を夫に渡し二四歳で離婚してしまつた私は、当時必死

になつて自分の生き方を探しておりました。先の雑誌はそれらの期待にも答えてくれました。それゆえ、くいいるように読みました。

家族とは何か、自立とはどういう内容をもつものか、常識でものを、あるいは人をはかる恐ろしさを、生活するとは……、e t c .

それはそれは大切な雑誌でした。ところがああいふことがあり、『家庭科教育』誌は変質。残念が

つていたところへ「We」誌の発行となり、喜んだ次第です。

最初のほうは正直言つて、気分いと熱気が良くも悪くも反映させられました。それが最近ではあるべきところに落着こうとしてい

るように思えます。それにしても「自立V」というのは本当に難しいものですね。教年前と論調も少し変わってきたようです。私自身の身につまされた経験は、あれほど自立する意味を自分に問

た本も読み、しかと自分の信念として持ちえた、と思つていたのに。何のことはない、状況が一変すれば、今の仕事も生活環境も放棄し、ひたすら彼との生活を夢みてしまつたのです。幸か不幸かこの夢は実現しませんでした。全くのところ、幸福を積んで白馬で迎えにくる王子様を夢みる女子高

校生のごとく現実の厳しさを棚上げした空想ばかりしかできなかつたのです。厳しい状況に追いこま

れると否応なしに人間としての自立を考えざるをえなかつた私ですが、仕事の面でも私生活の面でも

楽することが許されるなら内心ズルイと感じつつ責任を放棄してしまひそうです。自立的に生きることはのシンドサを私だけでなく、多くの女性が気づきはじめているように思ひます。逆にいえばここが正念場なんでしょうね。本物の自立Vへの。

した。人はやはり一人では生き難い。それゆえ豊かな人間関係を持つことが、その人自身の自立へつながつていくものだろうと思ひます。精神面の自立を考える時、特にそれを強く感じるのです。自分の未熟さがよくわかりました。ですからこれからはいろいろな示唆をうけながら確かなものを身につけたいと思つています。

(長崎M・M)

◆We十一月号到着すると何をさておきまず一読、読むうちに自問自答やWeとの対話しきり、読みおわるとすぐペンをとりたい衝動にかられます。それほど人の心に訴え人の心をゆさぶる雑誌はないのではないかと改めて感じ入りました。はじめざらりと読んで一番心に残つたこと二つ。

一つはやっぱり「波」。多忙な仕事の中で衣食住に心を配つていとおしんできた半田さんの思い。その中で長い年月の中で問い直

し、疑問を感じつつ考え煮つめてきた思いが二頁いっばいに感じられ共感をよびました。特に「夫に料理をさせる法」とかで「それは違う」と叫ぶ半田さんの姿勢に同感いたしました。男女共修、人間のくらしを考えることはこんなこととは違うのだというその気持が一致できてうれしく思いました。

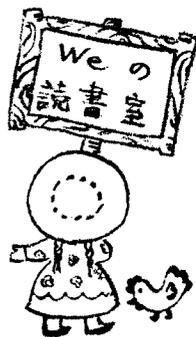
二つ目「専業主婦なんて遊んでいるようなもの」の一文。こんなこと言い切っていいのかな。これだって半田さんの思いとは違うはずと思いました。この言葉、長く長く心の底に暗くよどんでいます。私も仕事をやめたとき、家事もグループの仕事なども職業労働に比べれば何でもない事と思ひ、人が大変だーと投げ出すような仕事も、「そんな事働いていたこと思えばカンタンよ」などと言って引き受けてやったものです。実際それは時間的にも労働的にも何よりも複雑な人間関係の面からも職業労働に比べればいとも易き事で

した。しかし、ある時ふと、私のそんな言葉を発するまじがいに気づいたので。グループの仕事の大部分は専業主婦、その人たちに向かって「働いている事に比べれば何でもないことカンタンよ」と言う事は、職業を持たない主婦にどう受け止められるだろうかーと他者の立場に立った時、自分の言動の軽率さを思い反省いたしました。「主婦の仕事など遊んでいるようなもの」と言い切る事は、これと同じ心情なのではないかと思ひました。主婦たちと共に仕事をし、つきあってゆく上で、こうしたおごりの気分は働く者と家庭にいる者とのミゾを深め、やがては女の敵は女ということになってしまふ危険もあります。今の私の立場からの購読を主婦たちにも広め、読書グループもつくりたいと考へた折、こうした一文は特に困ったものだなあーと思ひ、半田さんの考へるWeの方向ではないのではないかと思ひました。

女が働くことに後めたさを感じた時代から働かないで家事に携わることが、かえって無能力者のように思われるようになり、女が働くことは一大決意の要ることでもなく、異端者でもなく、むしろ当然という傾向になってきたのは、喜ばしい事ですが、反面こうした列に加えられるくない、参加することの出来ない主婦たちもまた大勢いること。能力もあり学歴もあり、職業を持ってばきつと立派にやりこなすだろうと思われる人たちが、子育て、転勤、介護その他、事情は各人各様ですが、必ずしも自分から選んだのではない、専業主婦の名に後めたさを覚え、職業を持つ人を羨望の目で眺め、私も何かつなげなければなりません。

さまざまな姿、生き方を知っているからこそ、言えることだと思ひます。男性の立場の家事労働論、おもしろく人間性回復と家事のかかわりあいもうなずけました。紅葉をみられぬ主婦の敷き、やっぱり半分以上は自分自身の生き方がつくりあげた結果なのだと言わざるを得ません。もっと自分のものを持つべき、主張すべきだと思ひました。長い間夫の顔色をうかがうような生活を続けてきたことは決してまっとうな夫婦の生活とは思われません。女の思いも吐き出すこと、男と違った女の考えを持ち表現することは、男もよくなる事につながらなければなりません。小林さんの子育て、素晴しいと思ひます。今の世、評論家ばかり多くてどうもニセモノもいっばいいるように思ひます。人に動かさず自分の方針を持ちたいものです。

(岩手 押切郁)



なじみのない出版社から出た、ふしぎなイメージを与える題名の本。著者は一九四八年生まれの内科医、徳永進さん。故郷である鳥取の一般病院に勤めてから二年半になる。

頁を繰るや私は、人間の苦しみ、悲しみ、そしてよろこびが、淡々とした筆づかいの中に光を放ちながら描きだされているのに、たちまちひきこまれてしまった。病気をかかえ、治療と看護を受けるために病院にやってくる人たち。山奥の村や海辺の町から集まってきた病人には、看病するつれあいや子がおおり、それぞれの暮らしがある。そこで医療にあたる医者は、自分の仕事を誠実におしすすめるかぎり、いやおうなく彼ら、および彼らの担っている暮らしと向き合わねばならない。

都市の病院や診療所づとめの経験から「住民の信頼を得る医療は、いい加減な良心だけではつくれない。いい加減な良心は簡単につぶされるし、いい加減なことではいい医療技術も身につかない」という認識に達した徳永さんは、担当の患者の山のおじいこのつれあいと山の村の話をし、ホーム・ヘルパーとともに街のアルバイトのひとり暮らしの老人を訪ねる。こうしたいねいなつき合いを重ねて、彼はいつしかその地方に暮

らす人たちの「地図」が自分の中にできてきたことを感じる。それが、医療を行うために必要な一歩だな、と思う。

このことを徳永さんは「檀家をかかえる和尚さんのような責任」と表現したりもするのだが、それは、一方では、人間関係の距離を保ちにくい地方での、濃密な人間関係に支えられてこそ持ちうる実感、ともいえるのではなからうか。

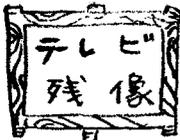
もてる技術を直接相手に届けることができ、それがまた自分へも返ってくる範囲での暮らし。そこに成り立ち、そこからひらけてくる「医療」。そこで働く「医療技術者」としての医者。

医療のみならず、保育や福祉の現場には、さまざまな人、いろいろな事実が巻きおこす場面があり、そこに正答というものはない。

「医療現場に日常的に広がっている「悲しみ」「苦しみ」そして「死」——その中に「笑み」を見ることができるとかどうかが答えない現場で働く者にとって、ただ一つ、問われつづけているように思う」といふ徳永さんの声を、場所こそちがえ、同じように地方に住み、暮らしを担う者どうしのつき合いをふまえたところに成り立つ仕事づくりを目標している私は、よくよくかみしめたいと思う。

夕方や休日には子供たちをつれて近くの神社に行き、はいつていないことの多い小銭をポケットにまさぐる父親でもある徳永さん——そのような家庭生活を営みつつ、現場（大学闘争の最後の世代として、大学に残り医局に属することだけはしたくなかった、というスタートを彼は選んだ）でいろいろなことにはぶつかり、鍛えられして歩んできた彼と彼の発言に、同世代者として深い共感をおぼえながら一冊の本を読み終えた。

徳永進著『死の中の笑み』ゆみる出版・一、五〇〇円



分の顔に「リラックス! リラックス」とつぶやく彼は、人間関係の調整が苦手な緊張型の人間のような。管理職の最下段に連なった克己は「サンドイッチのハム」の苦しみを経験する。部下が三人同時

秋は芸術祭参加ということもあって、ドラマにも「力作」が多く、テレビにしがみつくと夜が続き、子供からもヒンシュクを買う始末。番組を選択するのも大変だ。新聞のテレビ欄で粗筋と、原作者、脚本家、出演者の名前をじっくり眺める以外に頼れるものは自分のカンだけ。華々しい宣伝に見事に乗せられてチャネルを回した結果、ガックリすることもしばしば。この間印象に残ったものに、「太陽の子」(灰谷健次郎原作)、「花嫁のアメリカ」(脚本重森孝子)、「ながらえは」(脚本山田太一)、「半分正しい」(横光晃)などがあるが、サラリーマンの一人として非常に共感を覚えた「リラックス」をとりあげてみたい。

松原克己は一流電機会社の厚生課の課長補佐。同期生より二年も早く管理職になった。マイホームも手に入れたし、子供は男の子女の子一人ずつ、夫婦仲もいい方だ。目下の夢は課長となって営業部にもどること。毎朝五時半に起きて剣道のけいこをしてから出勤する生活は彼を深い所で疲れさせている。鏡の中の自分の顔に「リラックス! リラックス!」とつぶやく彼は、人間関係の調整が苦手な緊張型の人間のような。管理職の最下段に連なった克己は「サンドイッチのハム」の苦しみを経験する。部下が三人同時に休暇をとることを文句を言う課長。「善処します」と答えた克己は昼休み休暇の撤回を依頼するが、「休暇は当然の権利です」と反論され、おまけに元同僚からは「早く出世する法っての教えてよ」とイヤミを言われる。職場では、厚生資金を二度借りに来た社員に、「前例がない」と断わって、「融通がきかない」と罵倒され、社員の福祉施設である民宿に関する苦情を持ち込まれ、「この件は問題にするよ」とすごまれる。ある日は課長の妻に「夫が部下のOLと浮気をしているから別れさせてくれ」と泣きつかれ、バーで課長は「妻は妄想家だから取り合わないでくれ」と言い、部長は課長と部下の行動をチェックするのが課長補佐の任務だと訓戒し……そうしたある夜克己の家に強盗が侵入、彼は木刀で叩きのめすのだが、この事件を契機に、彼の精神はバランスを失し、放心、不注意、焦燥感がつり、誤って妻をメッタ打ちにし大怪我をさせる。会社の嘱託医である精神科医は克己に問題の本質から逃避している姿勢を指摘する。そんな時故郷に一人住まいをしていた母親が倒れる。海鳴りの聞こえる広い荒れ果てた部屋で克己は意識を取りもどさない母の手を握りしめてよびかける。「僕はここにいる。死んでいいよ。大丈夫だ」。たった一人で母の死を引き受けた彼は徐々に立ち直り、自分が働きかけることによって人間関係は変わるのだということを知る。家族そろって朝食をとる彼の表情は明るく穏やかだ。

克己のストレスの原因は多分その生真面目さにある。彼がもし酒のみだったり雀狂だったら、酒の場での説得、慰撫、情報交換ここでの腹のさぐり合いや根回しが、実は企業のフォーマルな部分を支える裏街道なのだ。私の狭い職場での権力争いに勝った人、負けた人、自らオリた人、誰彼の顔を思い出させるドラマだった。

(脚本・田向正健・フジTV)

男と女のあいだには……

私は今までどんな問題でも、逃げることなくまっすぐに取り組めば解決するものだと思っていた。しかし、親子の問題と異性間のこのだけは、正攻法では解決がつかないというのが、このごろやっとなるようになってきた。恋愛と書くのはあまりにも一人よがりすぎて恥ずかしいので、「異性間のこと」などと固苦しい言葉を使ってしまった。ざっくりばらんに言えば、私のは片思いなのだ。それも、かなわぬ相手に想いを寄せるという、ふられ役の三枚目をいつも演じているのだから、「若大将」シリーズの青大将や、「男はつらいよ」の寅さんを地でいっているみたいで、嫌になってしまふ。

そういうことに関するのめり込みようとしていらないことに最近ハタと気がついた。

この二年間、糸が切れたタコのような男を好きになってしまった。私と彼は地域の障害者サークルで、三年ほど前に知り合った。週

栗原 実抄

ムが、いつの間にかつくほどだった。私が自分の気持ちに気がついて、意識したしたのはおとしの春ごろだった。いつも早まっては失敗ばかり重ねているので、今度は少し落ちていく様子を見てからと思っていたが、気持ちがすぐ顔に出てしまい、彼にも気づかれてしまったようだ。

それまでに私は、彼にずい分無理を言っていた。聞いてもらっていた。会社を休んで遠くまで車を運転してくれたこともあり、彼には私がかんたん負担に感じられていたのかも知れない。彼はその年の秋ごろから急に私を避け始めた。サークルで月一回顔を合わせるが、こちらが挨拶をすれば仕方なく返すものの、自分からは口もききたくないという態度だった。私は彼が何を怒っているのか、今だにはっきりわからない。何度話し合いたいと電話をしても、仕事が忙しいとか、急用ができたとかいって、逃げてしまうのだ。私と彼の共通の友人に二度ほど会う機会を作ってもらった。

たが、土壇場ですっぽかす。

半年位何とか話し合いの道をつかもうとしたり、彼に対する自分の態度を反省して思い悩んだりしたが、友達の間言もあってしばらく彼を無視しようとした。昨年の夏ごろに、少しずつ彼の方から口をきくようになり、「関係回復」のきざしが見え始めた。そして九月になって急に彼が家に訪ねて来て、それまでの自分の態度を詫言するというのだ。私はキツネにつままれたような気持ちになったが、彼が精神的にまいっている様子なので、仕方なく許してしまった。どうも彼は失恋して他に行き場所がなくて、それで私の所に来たらしい。

しかし、二か月もたないうちに再びこじれてしまった。彼が約束を破ったことを私が少しなじったことからだ。さすがの私も頭に来て、真正面から彼にケンカを挑むか、これっきり彼を無視するか、どちらかを決めなければならぬ。わらん人形でも打ち込みたい気持ちだ。女のウラミはこわいゾ!



—K子さんちのね子たち

おかまひめハナ子

さとう けいこ

できてあぶれてしまっ
た。

子ねこの域を出たこ
ろ、陽なたでお尻を見
ているハナ子を見

も拘らず、その約束は無かったものにしてほ
しいと彼はその夜言い出した。かねて冷戦中
の妻が卵巣のう腫で大手術を受け、今さら見
すてられなくなったのだと言う。

チー子の二度目のお産では、太郎、ハナ子、チッチ、エミ子の四匹が生まれた。太郎は白地にトラと赤毛が斑になっためずらしい模様、ハナ子は真綿玉のような、チッチは長い茶色の毛の、エミ子は白地に赤トラの、それぞれ絵になるほどかわいい子猫だった。

おけるものならどの子もわが家に残したかったが、すでに五匹もいる以上、大半はもらってもらう以外になかった。

元気で、かわいい子猫から順にもらってもらおう。それが我が家の方法だった。そして、太郎とチッチは遠い佐渡へもらわれていった。

ハナ子は目が細く、白い真綿のママのような子で、チー子が目を細めてなめまわす。この溺愛ぶりに根負けして私はハナ子をわが家に残した。エミ子は書道の先生にもらってもらわうはずのところ、これも先客が

て、私はビックリ！ ハナ子はオス猫だったのである。「まあ、ハナちゃんノ」ハナ子はけんそうに私を見るばかりだった。今さらハナオにするわけにもいかず、そのままハナ子で通すことにした。ハナ子に化かされたのは、私ばかりではない。何とオス猫も盛んにハナ子を呼びに来る。ハナ子はオスのおとなになかなかなれなかった。

私は強いオス猫が一匹ほしかった。我が家の大半はメス猫なので、一族を守るためにはトラの後継者になるような強いオスがほしいとは前から思っていたのだ。メスはかりだとして、その猫がエサを食べに侵入してくるのである。筋力の強いオスが必要としなくなった人間社会とは全く対象的な実力社会がそこには存在していた。ハナ子はしかしその期待には応えられそうになかった……。

師走の薄月の夜であった。私はこの一年来ひきずってきた難問から突然解放されることになった。プロポーズしたのは彼であったに

幸をテコに働いてきたがもうこの生活を終わりにしたいと一年前私に言い出した時、正直これは困ったと思った。彼と歩く唯一のメリットは、私が後顧の憂なく仕事が出来るということであった。そして、二人がようやく歩み寄るはずの一年後の結論が、全く逆転してすれ違ったのである。しばし、私は虚脱状態で公園の道を歩いていた。するとカサコソ、カサコソとついてきた足もとの音が、突然ニャーオ、ニャーオと言うではないか。見るとハナ子とチミとエミ子が草むらから顔を出している。私が気づくと喜んで、ピョンピョンと姿を現した。「ママ、今まで何していたの、ずっと待っていたんだよ。早くお家に帰ろうよ」。ね子たちは白い月明りに尻尾を立てて後になり先になりしながら、公園のそば

のわが家に私を誘うのであった。

(終)



〈We 中野の会より〉

読者会初参加の深田君が自己紹介「ボクは定期読者でなく、時々鈴木書店で買う程度」。これを聞いた公一君「アッ感激！そこにWe 届けてるのボクです」。二人は大喜びで固い握手……。と、まあこんなスタートで始まった久しぶりの読者会は参加人数10人。うち男は3人、We編集部2人。テーマが家事、家族問題だから、それぞれの「現場レポート」に迫力と緊張感がかもっている。

Aさんは三人の子持ち。夫は残業もせず、定時に帰宅する人で、炊事も上手だけれど、「家事の主役は妻」という意識が強く、彼女が家を空けると気嫌が悪い。一方、Aさんは家事が嫌いで、夫が早く帰ってくると負担を感じる。働いてはいるのだが、収入に格差があるので、対等感に欠ける。この読者会に出るのも、精一杯頑張っ出て来たのだ、という話。

Bさんの前夫はインテリ。一緒にいる時は、彼女が働くのに賛成したけれど、タチマエとホンネがズレている人で、自分は家事を分担する姿勢がない。結局、家事を全部女性におしつけてくる男に失望して離婚。

などなどの話から「要するに男は、女に何を期待しているのか？」と、当日参加の男たちにはホコ先が向かってくる。すると、シングル二〇代の公一君が「ウーン、ボクもやっぱり、『全能の母性』が妻の理想なんだよネ」に、「そんな女、いるわけないでしょ？」とチクリ。

されば、と体勢をたて直した公一君が「半田さんのおつれあいはどうなんですか？」とホコ先をかます。今度は半田さんが、いつもの冷静沈着に似合わず、珍しくモタつく。

半田さんのおつれあいは、休日に家族全員洗濯物を引受け、干上りをたたむまでの全行程を丁寧にやりぬかれるそうだけれど、たつ子さんの不満は「私なら洗濯しながら他の家事も同時にこなすのに、彼ときたら、洗濯機が回っているのをジーンとのぞきこんでるだけなんですよ」とのこと。

ところが、偶然の一致か、当日参加の男は全員、この「ジーンとのぞきこむ」派に属す

る人ばかり。「半田さんのお言葉ですが、あの、ボケーッと、洗濯機が回ってるのを見てるのが最高の気分。他の家事を同時にやったりすると、能率は良いかも知れないけど、家事が全然楽しくなくなっちゃう」とボク。みなさん大笑い。

かくて時間切れ散会の後、二次会は近所の青山さんちのマンションに深田、皆川、ボクの三人が訪問。無農薬野菜の共同購入の話などしているうちに、すぐ目と鼻の先にある深田君ちへもみんなで行くことになり、まるで家庭訪問のハンゴ。

こんなわけで、Weの読者会から更に台所ぐるみの交流に発展、楽しい11月の日曜でした。(ますのきよし)

Weの会カレンダー(今後の日程)

- 1・22 城北 北区十条出張所、問合せ先
- 川名 914・六〇五三(夜間)
- 1・30 中野 中野区商工会館和室
- 増野 385・二二九三
- 武蔵野 御殿山コミュニティセンター
- 小田 399・六三二六(夜間)
- 2・4 さがみ 相原高校
- 山崎 〇四二七・54・一〇五〇

WeとWeの会の「これまで」と 「これから」を話し合う会

Weの出発に際して、大きな役割を果たされた横山雅子さんが、鹿児島から上京されました。この機会にWeの来しかた行く末を話し合おうと、岩手から参加の押切郁さんを交えて32人が十二月十一日集まりを持ちました。

編集部から読者数や会計、来年の計画を、Weの会から活動報告を行った後、発送作業のすめ方や、創刊一周年記念行事、夏の合宿、読者数の維持拡大の方法などを熱心に話し合いました。簡単にご報告します。

①定価据置きのまま増頁に踏み切りますので、どうしても五〇〇〇人の固定読者が必要です。ぜひ継続ご購読を！ また、身近な方におすすり下さい。

②発送は毎月15日（日・祭日の場合は前日）原則として調布市婦人会館つつじヶ丘分館で行います。たいいてい一時から五時まで、どなたでも参加できます。お手伝い下さる方、一人でも多く名乗り出てくださいたいと願っています（一月号74頁参照）。

③Weの会へのお誘い—どなたでも年千二百円の会費で会員になれます。Weの会からニュースを月一回お送りし、情報を交換しながら親睦を深めます。

④各地にWeの読者会を作して下さい。教人でもWeのこと、自分のこと、世の中のこと、気楽にしゃべり合うところから始めて下さい。ご連絡下されば、お近くの読者名簿をお送ります。できる限り、We編集部はちろん連載執筆者も顔を出すようにします。VTRなども作って貸し出せるようにしていきます。

⑤創刊一周年を迎え、二月末に刊行予定の『人間って不思議』の出版記念もかねて、三月五日（土）午後、日本教育会館で「We一周年記念公開セミナー」を開きます。まのきよしさんが村岡小学校で行った「家族ってなんだろう」の授業をスライドで見た後、パネルディスカッション「学校をよみがえらせよう—家庭科の窓から—」。夜はささやかなパーティをと考えています。どうぞ、ふるってご参加下さい。

⑥夏休みには、泊り込みでパッチリ勉強できるプログラムを考えています。詳細は、決定次第、誌上でご案内いたします。

⑦増頁する分は、特集記事と、うるおい・ゆとりを持たせた連載の充実にあてます。活字を大きくというご希望もありますが、二年目は記事の充実を中心に、三年目ぐらいから考えたいと思っています。

⑧全国教研集会が開かれる盛岡では、ぜひWeの会の集まりを持ちたい（もともと、この号の発行は、事後になります）。

⑨Weの会の世話人制を確立しました。現在は左の方たちですが、特に地方におすまいの方、自薦で名乗り出てくださいと思います。

青山和世、石川由紀、遠藤和枝、小田亜佐子、押切郁、蔡和美、清水能親、名取弘文、中嶋里美、中野敬子、野村康子、長谷川公一、長谷川孝、福留美奈子、増野潔、八島紀子、山川みづほ、横山雅子。

あとは自己紹介とともにWeへの感想・希望・批判などが次々に出され、楽しみながら、たくさんのお仲間になりました。皆さんもぜひWeの会のお仲間になって下さい。②③④⑤について、詳細を知りたい方は、ウイ書房にお尋ね下さい。（☎ 03・326・1380）

“We,,はIの拠点、“We,,の中のI

波

半田 たつ子

私が十二月号の本欄に記した最後の一行、「宮さん、やっぱりあなたもママになって。子どもを育ててみて」について、数名の方からお便りをいただいた。その中の一人横山玲子さんは、掲載を了承して下さいだったので、ここに紹介し、お答えしたい。なお、門野晴子さんから「We,,誌上や集まりでは、私の名に「先生」をつけないことを提案された。同感し、皆様にもお願いしたいが、今ここでは横山さんの言葉を生かすことにする。

——横山玲子さんの便りから——
いつも私はまず「波」のページを開きます。そこにいつも半田先生がいて、熱い思いが伝わってくるので。ところが今回どうしても消化しきれず、まだのどにつっかえているみたいです。

最後の一文「ママになって」です。他の人が言ったのなら多分見過ごしただろうこの一文が、半田先生によって書かれて、公になっているということが悔やしくてならないのです。残念な気がしてなりません。この一言の裏に「なってみたらすばらしさがわかる。ママになってみなければわからないのでは？」という思いが隠れているように思えたからで

す。先生は、そういう意図で使ったのではないかもしれませんが、けれども少なくとも、言葉の上には感じられます。

先生が子によって育てられたという思いはゆるぎない、というのは、私にも理解できるし、共感できます。だから産んでみて、という言葉が素直に出てくるのだとは思いますが、産んでいなければわからないという思いは、結局今産んでいない、産めない状態にいる人を疎外することにつながっていきはしないか。We,,の合宿で、宮さんもそういう立場で言われたと思うのですが。そういうある意味で偏見とさえいえる思いを、先生がもし持っていたとしたら、とても悲しいと思いました。

先生が体験しなければわからないと置いていらっしやることも、同じことが私たちの側からも言えるのですよ。先生もいろんな体験をお持ちであることは知っていますし、だからとても惹かれもするのですが、あの一文を読み、やっぱり先生はフルコースを歩まれた女なんだなって思いました。それが私には残念だった。だって、先生は先生が語る言葉のすばらしさよりも、もっと話す相手の確かな何かを受けとめてくださる方だと思っていましたから。ごめんない。へんなことばかりで。

それともう一つ、本当はもっとつらいのは、あの一文が公の場で言葉になっている、ということですよ。We,,は、あくまでも先生個人の思いから生まれるものだと思うから、それを否定はしません。夏の終戦時の日記には胸打たれましたから。けれど、あまりに個人的なものを表に出してしまつては、まして今回のように特定人へのメッセージでは、なぜか納まりきれないものを感じています。これは以前から思っていることなのですが、身内意識が強いような気がしま

す。つまり、いつも顔を合わせ、人柄も性格もお互いに知り合っているもの同士の話が多すぎるということです。部数の少ない時はそれでもよかったと思うけれど、新しい仲間をふやす時、ちょっと困るのではないかと、思うのですが。(以下略させていただきます)

——横山玲子さんへ——

まごころのこもったやさしさのあふれるお便りありがとうございます。おつきあいしてからまだ日も浅いのに、私の心に飛び込んで、言いくかかったかもしれない言葉を、よくぞぶつけて下さった、とほんとうにありがとうございます。あなたと同じような受けとめ方が他にもあって、私はまず驚き、恥じました。今月は、書く予定だったことを取りやめて、あなたへのお返事の形で他の方々にもお答えしよう。

驚いたのは、あの文で私は「育てる」ことを書いたのに、「宮さん産んでみて」と言ったかのように受けとめられたことです。十二月号は『家庭・家族』をテーマにしましたから、子を育てる・はぐくむ営みに焦点をあてました。最後にママという言葉を使ったのは、門野さん・俵さんの本を紹介する中で、子を産み育てている人を「親」と呼んできたからです。新島さんの本のところで、魯迅のいう二種類の親—プリミティブな「子の親」と、次の世代の解放を図る「人間の親」—に言及し、ここまできて、あえてママなる言葉に変えたのです。

日本では、親子間に抜き難い血縁信仰があるけれど、混血の子たちから「ママチャマ」と慕われていた故沢田美喜さんのような方もいます。「人間は、産まなくとも(男は産めない)、家庭をつくらな

くとも、『はぐくむ』という問題を避けては通れない」というのが、私の一番言いたいことでした。その意味をママという言葉にこめました。一行あけてこのセンテンスを記したのは、その思い入れがあったからです。

ひとり立ちした者同士の侵すことも侵されることもない関係はすつきりしているけれど、家庭・家族を考える時は、ひとり立ちできない存在、いたわれ、守られ、手をかけられることを必要とする、赤ん坊や幼児や病人や老人や障害を持つ人たちを包みこんで共に暮らすことを考えなければならぬでしょう。私たちはみんな、育てる人がいてくれたことによって、おとなになったのです。

「なぜ子を産まない」と決めた女が、子を持つ女から攻撃されなければならぬのか」というお便りも別の方から来て、私はびっくりしました。宮さんとは八月末の合宿以後、何度か話し合いお便りも交換していました。「波」にこのように記すということは、電話ですが、読み上げて了解を求めました。宮さんは「こうした問題に論議が深まるきっかけになれば」とOKして下さっていました。今までの人間関係の上に立って、宮さんに親しみをこめて贈った言葉が「攻撃」とは……。けれども、横山さんが「フルコースを歩んだ女のおごり」と言われるからには、私の意識の底に沈むものをかぎとられたのかもしれないと、恥じたのはその点です。

以前編集していた雑誌では、私は三〜四頁書いていました。八〇頁の「We」では、二頁が限界と考えたものの、その中で書く難しさに苦しんでいました。十一月号の「家事労働」で一層その思いが募り、短い文で書ききる力量不足を痛感しました。「家庭・家族」に関しては、二頁で到底書ききれないと初めから諦め、「日記から」と称

し、私的な話題に逃げました。三冊の本の紹介をかねることで、三人の著者の方に広がりや深まりを助けていただけようと思いました。真正面から一人で立ち向かわなかった私のあいまいさも、誤解を生んだ原因でしょう。そのことを恥じます。

十二月号「波」の冒頭に書いたように、創刊号の宮さんの文章に共感・反感がどっと届いたところから、あのテーマが生まれました。中には「We」は期待外れだ。特に宮さんの文でいやになった」という反響もありました。私は「We」はIの拠点です。どんな考えも安心して述べられ、討論・反論が戦わされる雑誌を創りたいのです」と返事を書きました。その約束を果たすための十二月号でもありました。そこでどうしても宮さんの名があちこちに登場しました。あなたは身内意識が強いと感じられたし、名ざしで攻撃した、と受けとめた人もあったのは、右のような意図がうまく出せなかったためでしょう。

横山さんへのお返事という形で書いているこの文も、関心のない人には「身内意識」と受けとめられるかもしれませんね。でも私は、お一人お一人にきちんとお答えしなければ、と思い、そのための時間と頁の不足を嘆くばかりです。

また、私は「We」の読者になられた方のはば全員のお名前と住所を、私の手で書きました。読者の方たちが書かれた振替のファイルは私の後の戸棚に並んでいます。振替用紙に細字で書きこまれた励ましの言葉は、肉声として私の耳に響くのです。何万、何十万の読者を相手にするマスメディアと異なり、「We」の読者はみんな身内です。私はまだ当分は身内意識を捨てられないことでしょう。

さつき、私はさらりと「We」はIの拠点」と書きました。身内意

識とは別に、「We」の人たちはみな同じ考えの持ち主、にはなりたくないと思います。家事労働に関しても、「家事專業など遊んでいようなもの」の発言があり、それには專業主婦が反論する。「自分の健康をいささか犠牲にすれば、宿った生命は抹消できる」の発言に、やりきれない思いを持つ人が意見を述べる。丁丁発止と切り結び合う場を「We」は提供したい。言うが怖いから、みんなが黙ってしまいい、だれをも傷つけない建前だけが活字になっているーそんなシラジラしい誌面にしたくないのです。

ただ、その際「逆もまた真なり」を拡大して適用することを戒めたいと思います。私が子どもをはぐむ営みの中で育てられ鍛えられたというのは、子どもがいなかったら、私はもつともつとダメな人間だったろう、と思うことを指します。子どもを育てない女はダメだと言っているわけではありません。このように、いちいち断わりを書かなければ誤解を生むとしたら、それは私たちが、違う考え方を排除する行為を重ねてきたためではないでしょうか。「We」はIの拠点ですが、Iは「We」の中に屹立する存在です。

「産む・産まぬ」の特集は五月号ですが、私は、産む・産まぬと女が二手に分かれて論争することよりも、なぜ女がこういう論議を交わさなくてはならないのか。男はそういう論争にどうかかわっているのか。産む・産まぬ立場の違いを超えて、共に解決を図らなければならぬことは何か、ということを考えたいと願っています。

あなたのお便りによって、この大テーマへのプレリュウドが奏でられ始めたことを喜び、たくさんの読者の方が安心して、ご自分の意見を出して下さることを期待しているのです。そのきっかけを作って下さった横山さん。どうもありがとうございます！

あ・ん・て・な

★「くらし・かえたい連続行動」★

11月28日、東京農林年金会館で「くらし・かえたい連続行動」第1回交流会が開かれた。

日本有機農業研究会の築地文太郎氏、日本消費者連盟の舟瀬俊介氏、相模女子大学の里深文彦教授らが、全国各地で自然保護、薬害追放、有機農業、リサイクルなどの住民運動を進めているグループや人に「くらしを変えよう」の統一テーマで交流を呼びかけたもの。交流会は、それぞれの実践例の紹介で始まり、映画の上映、無農薬野菜や自然食品の即売、紙芝居、おもちゃ病院の実演も行われた。

連続行動は今後、シンポジウムやお祭り、出版活動など幅広い活動を展開、生活実践を通して仲間を増やし、やがて国や自治体を変えさせていくという。

(毎日、11・29付)

★第8回全国有機農業大会開催★

11月22、23日、山形県東置賜郡高島町で第8回全国有機農業大会が開催され、約600人が参加。地元・高島町有機農業研究会の星寛治氏は「苦しい時代もあった。しかし、この10年間の有機農業の実践の積み重ねは私たちの暮らしを変え、都市生活者との関係性を深めてきた。人間の道筋として、その生き方は正しかったと確信している」と報告。農業や化学肥料に頼った農業に疑問を抱き、有機農業運動に取り組む農民は、全国各地で都市生活者と提携し、着実に増えている。

(毎日、12・3付)

★「障害者の10年」を宣言―国連★

国連総会は12月3日、'83年から'92年までを「障害者の10年」と宣言するとともに、障害者福祉を促進するための世界行動計画を全会一致で採択、決議は'81年①の国際障害者年の継続②そのための特別チームの結成③国際障害者年信託基金の継続運用④'87年に専門家会議を開催して行動計画を再評価する一などを盛り込んでいる。

採択された行動計画は「目的と概念」「現状」「実施提案」の3章に分かれ、「実施提案」の「国内行動」の項目では、加盟国が活動方針を決め、財政的措置、法的措

置、差別撤廃、リハビリテーションの提供一などの措置をとるべきだと指摘している。
(毎日、12・5付)

★登校拒否全国実態調査―文部省★

文部省が初めて実施した「登校拒否全国実態調査」結果が11月19日まとまった。

調査は、都道府県や指定都市の教育研究所、教育センターなどが'80、'81年度に扱った相談件数と、そのうち登校拒否をめぐる相談内容の報告を各教委に求めたもの。

全相談件数は'80年度6711件、'81年度7908件。このうち登校拒否の相談は'80年度3243件で全体の48.3%、'81年度3404件、43%。中、高校生別では高校生の方が全体に占める比率が高い。また「不安を中心にした情緒的混乱によって登校しない神経症的な拒否型」が最も多く'80年度は登校拒否件数の61.4%、'81年度63.6%'81年度は次いで「身体の発育や学力の遅れなどから劣等感をもち、集団不適応に陥っての拒否型」7.6%「ずる休みによる拒否で、非行に結びつきやすい型」7.3%など。

同省は調査結果に大きなショックを受け教師用指導手引書の作成を急ぐほか、カウンセリング研修などの対応を強化することになった。

(毎日、11・20付)

★子供の意識に関する意識調査★

12月12日、総理府は「子供の意識に関する世論調査」結果をまとめた。子供たち自身は非行についてどう思っているかを知るため、'83年6月、小学5年から中学3年までの各学年千人計5000人を対象に実施。

非行については中学生だけを対象。非行の増加は「主として本人」「主として家庭」が問題、各28%、「家庭、学校、社会などそれぞれに問題」25%、「主として学校」10%、「主として社会」4%。家庭に関しての非行原因を聞くと(複数回答)①子供が悪いことをしても親がしからないから47%②親と子供との接触が少ないから46%③親が細かいことまで口を出しすぎるから36%をあげ、学校に関しては①非行に対する処置の甘さ32%②受験中心の教育30%③先生としての自覚のなさ27%をあげている。

また、中学生の約9割が受験競争に肯定的な考えを示す結果が現れた。

(朝日、12・13付)

十字路

北海道・アイヌ語塾の誕生

十月末、日高の平取町にアイヌ語塾が誕生した。塾長は二風谷アイヌ文化資料館長である菅野茂氏。建坪二八坪の木造平屋、費用約七百万円。すべて氏の私財で造った。実は今年正月に開所した「二風谷保育所」は、生きたまのアイヌ語を幼児段階から伝えたいと、氏の私財と一般の寄付を募って造られたが、国や道の補助金も受けた。が、「保育所でアイヌ語を教えてはならぬ」と。そこで「私塾」の誕生。寄金者の一部は「アイヌ語教育のためにと寄せられた五百万円相当を国と道が菅野氏の私塾に弁済すべきだ」という。

(朝日、11・8)

・右腕のない青年が教員に内定

道の教員採用に関する健康状態の審査基準は四肢に欠損がある場合原則として不可だが今年には身障者への門戸開放。右腕をなくした河田栄さんが(26)二度目の挑戦をし、中学校教員に「A登録」。字は左手で書くが、日常生活は支障なく、昨年の身障者スポーツ大会では二種目優勝のスポーツマン。「非行に

走る子の気持ちをはわかる。引っぱり込んで一緒に勉強したい」と抱負を語った。

(朝日、11・11)

・国鉄職員のみ職員兼職禁止

今月一日から国鉄職員の市町村議員兼職が次の改選以降禁止となったが、道内革新陣営の悩みが深刻化している。議員報酬だけでは生活が成り立たないためだ。道内の国鉄兼職議員は現在百十四人。国労道本部が開いた議員団総会でも妙案なく、「チャンピオン闘争」の再確認だけ。畑中書記長は「地方議会右傾化を阻止する議員をつぶすのが本当のねらい」という。(朝日、11・24、山口里子)

新潟・戦争学ぶ若い先生

「教える子を再び戦場に送らない」ため、戦争を知らない教職員に戦争の悲惨さや危険な情勢を知ってもらおうと、新教組が平和教育学習会を開いた。約六十人が参加し、映画「侵略」、被爆体験をテーマの講演、軍備増強と治安強化をねらう中曽根政権の危険性を論じた軍事評論家・山川暁夫氏の講演など、みっちり学習した。(11・28、山口久子)

長野・高校長会「反核」アピール

県内百四の公、私立高校の校長でつくる県高校長会は十五日、「核兵器廃絶に関する意

見」を全会一致で採択した。高校長会としては全国でも初めて。これは一般社会への決意表明の形であるが、今後はアピールの精神を日常の授業や学校行事の中で生かしていくという。(毎日、11・16、佐藤美枝子)

千葉・金権腐敗政治退放の女性シンポ

「金権腐敗政治を追放する千葉県集会」が二七日、働く婦人や主婦ら八五人によって初めてのシンポを持った。来年の統一地方選や予想される衆参ダブル選挙を前に、金権政治家を拒否しようという県民世論を盛り上げるのがねらい。泰道代議士のその後の経過説明。日本婦人会議中央本部の清水澄子氏が「政治と婦人」と題し、女性を受け身を脱し、団結

するように訴えた。(毎日、11・28、奥田暁子)

東京・中野少年の主張コンクール

「いま中学生が訴えたいこと」を思いきりぶつけてもらおうと、六日中野文化センターホールで「少年の主張発表会」が中野区教育委員会の主催で開かれた。十三人の「悪い所ばかり見つけないで、良いことを見つけて」「将来、看護婦がボランティアで世の中の役に立ちたい」「キャラクター商品を追放し賢明な購買者としての意識を身につけたい」などの意見に約四百人の大人たちが聞き入って

いた。(都民、11・7、仲田香代子)

愛知・紛争続く稲沢女子高

稲沢市の足立学園稲沢女子高校(足立てる子理事長)では、私教連(県私立学校教職員組合連合)に加入した教諭が解雇されたり差別を受けたとする教諭の支援組織と学園側との対立が続いている。成島教諭は四十九年に就職、私教連の組合員となった。五十一年、クラス担任とクラブ顧問を解かれ、週二十時間余の授業も現在は二時間。生徒への影響も心配されている。(朝日、10・30)

・父母ら熱心に教育を考える集會

「愛知の教育の充実を願う父母・県民と教職員とのつどい」が三十一日、名古屋大学で開かれた。ことしが八回目。参加者二千五百人。作家の千田夏光氏が「非行と戦争」を講演。

「高校教育でなぜ文、理のコース選択が必要なのか」など、大学入試が生み出す高校教育のひずみについての問題が関心を集め、討議が進められた。(中日、11・1、山田和枝)

大阪・先生のかげこみ寺

小、中学校の教師、医師、能楽師……。世間で「先生」と呼ばれる人たちが、心の平穏を求めてかけ込むお寺がある。住吉区長峽町天台宗福聚山慈光寺。住職は法尼の河野慈光

さん(51)で難しい仏法の説教はせず、やさしい目で信者の悩みをじっくり聞く。信者数ははっきりしないが、数百人以上。訪れる人たちとの雑談が「心から心へ」(共同ブリーフセンター刊)として出版された。近く英語版も出る。(朝日、11・13、由良サダコ)

兵庫・教師が語る戦争体験を出版

県内の高校教師ら(特別寄稿の父親一人を含む)十七人が、戦争を知らない若い教師や生徒たちに、苦しかった戦争体験と平和への願いを知ってもらおうと『教師たちの戦争体験』(B5判、百八ページ)を出版した。

「中国への侵略」「学徒出陣の記録」「さまざまな戦争体験」など六つのテーマになっており、平和教育の副教材として各高校に配られた。千部作成。残部わずか。五百円。問い合わせは県教育センター(〇七八―三四一―六七四五)へ。(朝日、11・18、由良サダコ)

長崎・先生への門さらに狭く

県教委は、五十八年度の公立学校教員の採用候補者、四百七十三人を登録した。今年度に比べて約百五十人減。理由は①退職者の減少②児童・生徒数の先細りなど。半面不景気時代で公務員志向が強まり競争倍率は約五倍の難関だった。(長崎、11・19、中村美佐子)

熊本・婦人教育委員と語る会

ただいま三十四人。県下九十八市町村の婦人教育委員がわずかずつだが増えている。国際婦人年の前年の五十年、婦人教育委員は四百七十三人中二十五人だった。「婦人教育委員と語る会」は委員に体験を発表してもらって教育問題や婦人問題を話し合おうというもの。「一市町村にせめて一人を」と二十四日午前十時から県婦人会館で開く。(熊日、11・23、中山そみ)

沖縄・米軍基地の爆音

児童の大半が「勉強に影響」

宜野湾市立小学校の川上教諭の調査によると、基地に隣接する小学校では、政治の力で実現してほしいものの第一として「基地(爆音)をなくしてほしい」をあげている。

さらに、毎日の生活の中で「爆音がとても気になる」と答えたのが五二%。又、飛行機の爆音は勉強に影響を与えているかに対して「与えている」と答えたのは七六%もあり、その理由としては「授業中の先生の話が聞きとりにくい」としたのが七八%。授業中、飛行機の音がするとどうするか、に「まったく勉強が手につかない」をトップに挙げている。

(琉球新報、10・11、吉浜ヒロ子)

Watakushi kara Anatani

▼「We」の創刊号(十一月号)まで七冊届きました。

ありがとうございまして。まだ少ししか読んでませんがとても面白くていろいろの話題がまつまっている感じでこれから読み進むのが楽しみです。ただ、一つ二つ注文がありましてので書かせていただきます……。

①活字をもう少し大きく出来ませんでしょうか。ニューヨークって夜がとて暗いのです。だいたい天井にライトがあるのはキッチンとダイニングルームだけぐらいいで、それもうすぐらい電球なのです。居間にはランプがあるだけでお酒飲んだりテレビを見たりするにはいいかもしれないけど、日本人にはとにかく家の中が暗くなって夜勉強が必要な子供は例外なく目を悪くす

るというくらいです。表紙裏の「巻頭言」ぐらいの大きさと、行間にしていただけなら幸いです。

②K子さんのね子たちのようなちょっととした軽くて、愉快な説き物をつづらう頭の休憩のために入れてくれないか。この本は私にとって一字一句がとつても大切なのです。でも悲しいかな、活字から離れて久しいので消化不良になりそうです。今、裏表紙の「We

の取り扱い書店一覽」なんてのをポケッとながめ、ずい分増えてきたな、とか、ここにニューヨーク紀伊国屋なんて入れたらオモシロイナートか思うのが、頭の休み時間です。

私いつも思うんですが人間は長生きするには、力を抜いて本当にポケッとする時間が、必要ですね。同じことで、一つの運動、一つの本が長続きするためには完璧ではダメで、何となく変な感じのある方がよいと思うんです。そういう意味では創刊号が一番いいです

ね。(ニューヨーク 大西麻里子)

▼十一月号「わたしの家庭科通信」の総括として書いたつもりでしたが書いたあとでまた新しい発見が見つけました。家庭科に対する教師の考えをはっきりと持っている児童や父母に語りかけた実践力に敬服します。家庭科を愛する教師のすばらしさが、紙面を通じて、ひしひしと胸に迫って来ます。カットや字の美しさにも感動しました。私も学校の片隅にやられがちな家庭科に対して、このような「家庭科だより」を発行できる教師になりたいと思います。できれば連載していただきたいです。

(岡山 石井昌子)

▼十二月号の「家族」の視点は、とても新しく勉強になりました。しかし日本の場合、まだまだ嫁姑の感覚が根強く残り「風通しのいい男女関係」や「古典的単婚家族の脱皮」は現実的のどのくらい望めるでしょうか。

(静岡 梶原公子)

▼十二月号の「波」。ありがとう

萌子の教育委員日記に全力投球しています。(東京 俵萌子)

▼号を重ねるごとに内容が充実してきてうれしいのです。カットも素敵……どなたのかしら……頭文字でも……佐藤さんのニャーコの記事……いいですね! ああのものはぜひ毎号入れてください。オアシスですもの……十二月号の「宮さんへの稿」とてもよかつ

Watakushi kara Anatani

たです(問題提起となった宮さんの稿の意義が大きいのですが)。さまざまな生き方があることを読者の若い方々に知っていただく意味で、とてもよい編集方針だと思います。

(長野 佐藤美枝子)

▼私の夏休みは、なんとバイトもせず、家にもほとんど合宿のためにおらず、あげくの果てに貯金をおろしてフィリピンに二週間程行きましたので、親は私の顔をみると小言の毎日でした。でも、私はこの夏休みになんと多くのものを見てきたでしょう! アジアの国々の学生の交流会に参加し、そこで教育、公害についての話し合いをほぼ一ヶ月程してきました。もちろん話し合いは一部で、お互いの国を知るためのグループ活動が主でしたが、そこ

で私は、あたりまえの事ですけれど、底にある人間の心情は各国共通なのだなあということに改めて驚かされました。

特に韓国(南)によい友達がたくさんできたのもうれしい話です。確かに戦争は過去のごとで、

私たちの年代には罪はないのかもされません。でも私は彼らにすまない気持ちであやまり、そして彼らはそれを心の底からはまだ難しいけれど許しようと言う。過去に無惨な歴史を背負った両国だからこそ仲よくしよう。仲よく友達でいましょうと手をつなぐ。私は彼らの目を見てその目を二度と不本意な事件でくもらしたくない。私の力でできることなら私はいくらでも両国の交友関係保持のために役立ちたいと誓いました。

(埼玉 奥田真理)

▼数日前近くの町に住む三四歳の女性から手紙をいただき、We 十月号を読んでぜひ会いたいとのことでした。都会生まれの彼女は、ほと

んとうに生活するというこの意味を求めて山形に一家そろって移り来て家族が食べるだけの野菜を全て手作りし、子育てをし、仲間と共に「生活を記録する」という文集を作っている人です。ほんとうにすばらしい出会いをWeは私にくれました。彼女から吸収するものは山ほどありそうに楽しみです。

今月はじめに行われた我校の文化祭はほんとうに手造りのもの。都会の大学生にこれがほんとの文化祭だよと見せてあげたくなるほどでした。決して派手ではなく素朴なものばかりでしたが、改めて生活と文化について考えさせられました。生徒たちは生活する者の手をしており、指輪やマニキュアの似合う手ではありませんが、純粋でがまん強い山形人らしさがあり、ほんとうにすばらしい! 朝日新聞の新人国記で山形県を取り上げていましたが、風土の中から生まれる共通した気質があることに改めて驚き、テレビっ子の生

徒たちの中にさえ、そうしたものを、自然の力の大きさと、人々の生活の意味の大きさを知らずれます。「輝く大地の鼓動の中で」というテーマにそった様々の展示、テーマソングも手作りでも生徒も一緒になってつくり上げた文化祭でした。

「乳幼児の発育の特徴」のところでは体形や体そのものがどのように変わりつつあるのかという点を取り上げ、体づくりの意義や、おとなたちの考えねばならないことについて授業してみたいと思い、今教材研究中です。毎日があつという間に過ぎてしまい、東京にいる時よりもめまぐるしい日々です。全力を尽くして走りぬくことは四月に決心したことなので、立ち止まらずに走り続けたいと思っています。

(山形 大場広子)

◆「略」は家の前の畑のこと。先日、映画「侵略」をみた。みる側は、笑いを浮かべての殺戮を狂気ということができるが、狂気から覚めた人はどんな人生を送ったのだろうか。

◆夏の合宿の時、永畑さんはだまされないうちに勉強すると言われた。私は他があつての勉強ではなく、内なる欲求があつての勉強が第一だと思つた。

◆しかし、自分の中にもあるだろう狂気に支配されることのないように、やはり勉強しなければならぬ。悲しいけれど、進出を侵略にすれば終わりというのではなく、何が行われたかを知り、どう表現するかは一人ひとりの課題である。

◆次年度「十字路」のモニターを募集しております。編集部にご連絡を。(中野)

◆先月号から誌代終了真近の連絡を封筒にゴム印で押してお知らせしています。

◆その時はお許し下さい。十二月二日の村岡小学校の公開授業で増野潔さんが「家族って何だろう」を自分で描いた絵を使つてなさいました。とつてもよかったです。子供たちの感想もスゴイ！四月号に掲載致します。お楽しみに。

◆二年目四月号から表紙を加藤由美子さんにバトンタッチ致します。一年間ありがとうございました。

◆なぜこの紅が、緑が出ないのかと印刷屋さんを困らせてたことも度々。この場をおかりして、感謝!!(馬場)

We の告知板

▼トータルライフ研究センターでは、3月12日13.00~16.00九段の私学会館で「暮らしの入れものとしての住まいとあなたのライフスタイル」をテーマにフォーラムを開催。住まいという入れものにどんな暮らしを入れたいか、諸外国の事例を紹介しながら、外人ゲストと日本側講師の話し合いを中心にする。会費2000円、問い合わせは同センターへ。TEL(03)200-6086

▼11月号に記した「女性による老人問題シンポジウム」の克明な報告集が完成。このシンポを出発点として「高齢化社会をよくする女性の会」も発足する。報告集は1部1200円、送料240円を下記あてに振込めば送ってくれる。「高齢化社会をよくする女性の会」振替—東京0—79477 問い合わせは同会運営委員会へ。(03)265-1449

▼Weの継続お申込みもお忘れなく!

新しい家庭科 — We

Vol.1 No.10 1983年1月20日発行
 〒500 (年間購読料 〒5,000)
 編集兼発行人/半田たつ子

発行所/(有)ウイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14
 ☎03(326)1380 振替 東京6—59867
 印刷所/(有)岩佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

引き続きWeの仲間になって下さい
Weの仲間をふやして下さい

“4000人の固定読者の方に核になっていた
だこう。We出発に際しての悲願は、9月に
達成できました。編集室の戸棚には皆さんの
の振替のファイルが2段に並んでいます。
そこに置かれたるまに、両目が入りまし
た。どうもありがとうございます。

Weはいま、2年目に向けての準備を進
めています。定価はこのままで増頁し、より
フレッシュで、あなたの心に深く食い込む
雑誌を志しています。どうぞ、引き続きWe
の仲間であって下さいますように。最後の
頁に振替用紙を綴じ込みました。ご利用下
さい。また、あなたのお友達にも、ぜひお
すすめ下さいますように。あなたのお力添
えを、心からお願いいたします。

* * * * *

〈書店各位へ—地方・小出版流通センターに窓口を開いておりますので、ご注文の時はご利用下さい。〉

—Weの取り扱い店一覧— お近くの書店に、ぜひお声をかけて下さい（12月20日現在）

旭川	富貴堂	〈世田谷〉	やまべ書店	福井	春江書店
盛岡	東山堂	〈三鷹〉	第九書房		品川書店
仙台	こどもの本のみせ・プーの家	〈小金井〉	渡辺書店	岐阜	宝島
	八重洲書房	〈府中〉	国府書店	奈良	海老山書店
	ポラン	〈国立〉	東海書店	大阪	旭屋書店本店
	萩書房	〈小平〉	和中書店		ユーゴー書店
	高島書店	〈八王子〉	くまざわ南口		増田書店
東京	ホビット館	〈清瀬〉	マルオカ書店		西坂書店
秋田	加賀屋書店	〈高尾〉	啓文堂高尾駅前店	京都	松香堂書店
福島	岩瀬書店	〈町田〉	久美堂	宇治	大久保京都書院
	西沢書店	川崎	北野書店	長岡京	恵文社神足店
群馬	十字屋書店 大月店	横浜	有文堂	神戸	幾久書店
	松文堂		有隣堂	尼崎	宣文堂書房
藤岡	川島朝日堂	相模原	ブックス上溝	姫路	姫路丸善
結城	太陽堂	鎌倉	たらば書店	米子	今井MC本店
水戸	ツルヤブックセンター	相模大野	相模書店	広島	やまびこ書店
浦和	須原屋	藤沢	豊元書店		いづみ書店
	岩瀬書店	静岡	百町森書店	山口	白藤書店
船橋	前原かっぱ	浜松	中田島書店	山松	去来社
東松山	比企文化社	一宮	文正堂書店	徳島	雄徳堂徳野書店
浦安	原勝書店	名古屋	ウニタ書店	北九州	北九州書店
東京	蔭書店	江南	青雲堂	熊本	高校生協
〈千代田〉	ピッピ	新潟	栗山書店		三章文庫
	日成堂		白石書店	大分	開書堂
	書肆アクセス	小千谷	島谷書店	紀伊國屋書店	札幌、新潟、新宿、
	三省堂本店	金沢	白山書店		渋谷、玉川、住友、吉祥寺、川
〈文京〉	鈴木書店		うつのみや		越、船橋、梅田、岡山、広島、
〈新宿〉	模索舎		セールスセンター		松山、福岡、熊本
	ブックスミヤ	富山	清明堂書店	大学生協	
	三省堂新宿西口店	高岡	清文堂	畜産大学、福島大学、新潟大学、	
〈杉並〉	柏木堂書店	岡谷	笠原書店	群馬大学、宇都宮大学、日本女子	
	木風舎	福井	ひまわり書店	大学、東京大学、東京家政大学、	
	信愛書店		じっぷじっぷ	愛知教育大学、金沢大学、立命	
	プラサード書店		吉川陵文堂	館大学、宮崎大学、高知大学	
〈葛飾〉	宏精堂		山本書店		